力と耐久ないけどダンジョンにいるのは間違っているだろうか？

血濡れの人形

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その少年は、ナレッジは一人だった。
たった一人の友人には裏切られた。
そんな彼は、転生の特典を神と従者の名を聞くことで消費した。
いったい、彼はどんな物語を紡いで行くのだろうか。
それは、誰にもわからない。
注意
作者が趣味で書いているものです。見るに堪えない駄作だとか、こんな作品見れるか！

という人は感想や評価をせずにブラウザバックしてください。
ここをこうしたらよくなるんじゃないか、
などのアドバイスなどは書いてくれるとうれしいです。
旧タイトル　最弱がダンジョンにいるのは間違っているか？
現タイトル　力と耐久ないけどダンジョンにいるのは間違っているだろうか？
タグ追加しました２０１８／０３／０３　１６：０８
タグ追加しました２０１８／０３／１７　１７：２３
タグ追加しました２０１８／０４／０３　１３：４９
タグ修正＋追加しました２０１９／０１／０４　１：５７
タグ追加しました２０１９／０１／０６　１８：３５
タグ追加しました２０１９／０２／０３　１９：２４
入りきらないタグ置き
作者の趣味でさらにキャラが増える↓原作崩壊
ご都合主義　原作崩壊　原作キャラ死亡　わりとチートになっちゃった系主人公
気が付いたらバグキャラ（作者の無意識が作者を苦しめる）どうしてこうなった
盛大なタイトル詐欺

目次

0章
プロローグ ―――――――― 1
最弱がファミリアに入るらしい
6
最弱のステータス ―――――― 15
狼に絡まれた最弱、もう死ぬかもしれない ―――――― 19
最弱、歓迎?される ―――――― 23
最弱の朝は早い ―――――― 26
最弱、武器すらまともに選べないんだけど（重量的な意味で） ―――――― 30
最弱、走り込みの途中で子供を拾う
33
拾った女の子、家にかえりたくないってよ（ならうちにきなよ） ―――――― 38
最弱、女の子に名前を与える（入団試験もするって） ―――――― 42
明のステータス ―――――― 49
最弱のダンジョン入り（そのまま行かせるとは言ってない） ―――――― 54
やっぱり僕は戦闘にまともに参加できないよ・・・（ゴブリンが固い） ― 58
お昼は厨房に立つところからです（腕を少しでも磨かねば!） ―――――― 62
最弱、鍛冶師（モドキ）と契約する（ど

ちらかというと趣味の人ですね）――66
明の武器は何やらかなり特殊になるらしい（軽いのに重いとは一体・・・）――70
最弱は再びダンジョンへ（今回こそは！）――75
というか収入ゼロじゃない？（すみません私が砕きました）――79
相談と契約（僕の仲間はみんな似たような身長になるらしいです）――82
初めてのボッチダンジョン（えぇ、もちろん死に掛けますとも！）――92
二人に歌う、命の歌を（そんな格好いいものじゃないですよ）――97
目が覚めたら性別も見た目も変わっていました（なんでさ）――103
事情説明（転生について話す許可が出ました。一部の人だけだけど）―110
みんなで楽しくショッピング！　服編（予算は三十万くらいらしい）―119
みんなで楽しくショッピング！　髪飾り、装飾品編（引き続き、ファンタジードレスショップからお送りいたします）――128
耐久実験（だからって何でメンバーが

こんなに豪華なんですか）――――132
これを着れば僕も前線で！（近接戦闘できないから無理です諦めてください）――――135
武器の依頼（短剣ほしいですほんとに）――――139
試し切り（強敵は出てこない模様）142
みんなと合流しよう（戦闘もあるよ！）――――145
ステータス更新（やはり異常な伸び率）――――150
ダンジョンに潜る。その前に（二人の武器を見に行こう）――――158
これぞチート！（仲間の皆がね）162
ステータス更新と遠征（あんまり僕たちには関係・・・え？あるの？）166
キャラ設定　0章――――172
1章　遠征編
遠征開始（はぐれたあげく襲われるのははたしてどうなのだろうか）――176
しかし彼は、確かに英雄であり化け物である（本来の実力なんてあってないようなものですよ）――――180

起きたら明達に心配された（記憶が一部ないという問題点）　――――　187
のんびり行こうぜ（上に上がれませんもんね）　――――　191
遠征組と合流、そして帰還中のあれこれ（原作主人公不在でお送りいたします）
――――　195
戻ってきました（白いミノタウロスあたりから記憶がないけどネ）　――　206
宴会・・・？（そういえば、僕たち遠征で何もしてないよね？）　――――　210
2章　原作開始
ステータス更新（まぁ、何か言うほど上がってない・・・あれ？）　――――　213
怪物祭（お祭りと書いてあるので、とりあえず食べ歩きですかね！）　――　220
レベル上がってから初めてのダンジョン（また襲われる）　――――　226
覚醒（体が軽くなったみたいだ）　232
ある日ダンジョンの中で牛に出会った（言ってる場合ですか！逃げますよ!?）　235
こんなところでお姉ちゃんを死なせないんだから！（殺すわ、全力で！）　238

変な奴らに情報提供させられています（覚悟できてるよな？）――――241
ダンジョンでの生活（そしてタイトル詐欺の予感）――――245
話をしよう（初めから問題発言に聞こえるのですがそれは!?）――――262
そのころ地上では――――266
ただのやつあたりってやつさ（憎い、ともまた違う）――――270
戦争開始の合図（時間が飛んでる？気にしないでください）――――274
倒れぬ意思をただ叫べ――――277
英雄の咆哮／三人の少女たち――281
魔剣少女たちと死の舞踏会――――286
最後の戦い――――290

0章
プロローグ

～???～

暗く、何もない空間で、少年は目を覚ます。

ナレッジ、それが少年の名だ。

ナレッジは、どこが上かもわからない空間で、ゆっくりと起き上がろうとする。

すると、辺りが急に明るくなり、少年は目を細めた。

そして、目の前に現れたのは、一人の女性と、執事服を着た男だった。

「あの、ここはどこですか？」

ナレッジは不思議そうにそう言う。

それも当然だ。ナレッジは先ほどまで、

・・・・・

たった一人の友人と家に帰っている途中だったからだ。

すると、女性が頭を下げ、

「すみません、本当は思い出させたく無いのですが、

状況が状況なので、手短に説明させていただきます」
と切り出す。
「落ち着いて聞いてくれると嬉しいです・・・
あなたは死んでしまいました。
それも、あなたが友人だと信じていた存在によって」
ナレッジの思考が一瞬止まる。
頭のなかで整理しているのだろう。
(なんで、なんであいつが俺を?だっておかしいだろう?
あんなに笑顔で話していたのに、なんで?
それに、ならここはどこなんだ?)
事実、ナレッジの頭の中には、様々な気持ちが渦巻いていた。
だがしかし、ナレッジは情報が足りないと思ったのか、
女性に向けて話しかける。
「なぁ、ならなんで俺は生きてるんだ?こんな風に肉体を持って。
それに、ここはどこなんだ?教えてくれ」
ナレッジがそう言う事を予想していたのか、女性はゆっくりと話し始める。
「まず先に、あなたは肉体を持っているわけではありません。

まぁ、いつもより軽いから、流石に分かると思ったのですが。
次に、ここを簡単に説明するなら、そうですね、転生の間とでもいいましょうか」
ナレッジは耳を疑った。
なにせ、目の前の女性は、転生の間と言ったのだ。
「転生？まさか、また俺に人生をやり直せとか言うんじゃないだろうな？」
すると、女性は顔を横にふる。
「いいえ、それはあなたの意思によります。
あなたがしたくないと言えば、しなくて済みます。
しかし、そうすれば、あなたはもしかしたら後悔するかもしれませんよ？
因みに、ここに来た魂は、必ず前世、
あなたがいま持っている記憶は持っていくことになります。
転生しても、しなくても、です」
女性はそう言うと、近くにいた男になにかを持ってくるように指示する。
男はそれを聞くとお辞儀し、いつのまにかあった扉を開ける。
「ちなみに、転生するなら、あなたに特典をつけましょう。
幸せに過ごしたいでも、結婚したいでも、友を作りたいでも、
どれかひとつだけですが」

女性が言い終わると同時に、なにかを取りに行った男が戻ってくる。
手にはひとつの箱のようなものを持っていた。
「転生するなら取ってください。それがあなたのいく世界、
あなたが新たに作る、本来とは別の物語」
それを聞き、ナレッジは立ち上がり、箱を持っている男の方に歩きだす。
男は箱を持ったまま、ナレッジの方に歩く。
ナレッジは止まると、男の持っている箱から、一枚の紙を取り出す。
そこには、
『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』
と書かれていた。
「うん、君にぴったりの世界じゃないか。
さあ次だ、特典はなにがいい?別の世界の魔法かい?
絶対的な力かい?すべてに立ち向かえる勇気かい?
全てを守れる盾かい?全てを覚える知識かい?
幸せな生活かい?」
女性は楽しそうにそう言う。
しかし、ナレッジは首をふる。

「そんなのは、自分で掴むものだ。
だから・・・そうだね、うん、君の、君とこの人の名前を教えてくれるかい？」
女性は驚いたような顔をすると、にっこりと笑みを浮かべ、
「そのくらいで本当に良いのなら！私の名前は包合　絆！
本当の名前は星野　絆だよ！」
という。
すると、男が初めて喋る。
「まったく、不思議なやつもいたものだな。
名を聞くためだけに、わざわざ転生を選ぶとは。
俺の名はドールだ、次会うときは、絆の女神の導きに感謝するとしよう」
若干、ドールの顔にも笑みがあった。
「あぁ！そのときはまた、ここと違う美しき場所で！」
ナレッジはそう言うと、光に包まれ、姿を消すのだった。

最弱がファミリアに入るらしい

〜オラリオ〜

ナレッジが目を覚ますと、多くの人が行き交う大通りが目に入った。

「・・・たしか、ダンジョンにいかないとなんだっけ?」

ナレッジはそう言うと、町の中心部にある塔に目を向ける。

「とりあえず、行ってみたらわかるか」

ナレッジはそう言うと、中心部にある塔に向けて歩きだすのだった。

〜移動中〜

「て言うか、なんか身長縮んでないか?視線が低いんだけど」

搭の前に来たとき、ナレッジはそう呟く。

事実、彼は転生前、１２０ほどあったが今では１００まで下がっている。

高校までは行っていた彼だが、身長が伸びることは無かったのだ。

「まあいいか、いまはまだ困ってないしな」

ナレッジはそう言うと、入り口に向かって歩いていくのだった。

〜ギルド〜

ナレッジは中に入ると、受付を探す。
当然、情報をてに入れるのであれば、そのような場所にいった方がいいと思ったからだ。
原作知識という物が無いナレッジには、ひどく情報が不足しているのである。
「とりあえず、カウンター?の近くにいる人に聞いてみるか」
ナレッジが歩き出すと、突然、後ろから何者かに持ち上げられる。
「なんやちっこいのがおるな、パルゥムか?」
その方向を向くと、そこには赤い髪の女性（多分）がいた。
「失礼な、僕は人間だよ。パルゥムとか言うのじゃない」
ちなみにナレッジ、実は声が女性なみに高く、
長い髪の毛のせいでよく女の子と間違われている。
「ぼ、ぼ・・・!」
「ぼ?」
「ボクっ娘キタァーーーーッ!」
唐突に叫んだ目の前の女性に、ナレッジはビクリと体を竦める。
「かわええわぁ、もうお持ち帰りしたい!」
その言葉を聞き、ナレッジは背中に何か寒気を感じ、女性から離れようとする。

相手の手をつかみ、バタバタと暴れる姿は、
近くにいた冒険者達の顔を見れば分かるほどに可愛いものだった。
「うぅ、やめてぇ」
しかし、全く引き剥がせないからか、ナレッジは若干涙目になる。
それを見て、少し罪悪感が湧いたのか、女性はナレッジの事を下ろそうとする。
しかし、それより前に、女性の頭を緑髪の女性が杖で叩く。
「全く、私が目を離した好きに何をやっているんだロキは」
「ママ!?いや、かわいいこセンサーにこの子が引っ掛かったんよ!
だから仕方ないんや!」
「何を馬鹿なことを言っている!だからと言って迷惑をかけて言い訳がないだろう!」
ママと呼ばれた女性がそう言うと、ロキはナレッジをゆっくりとおろす。
「うぅ、ありがとう、えっと、お母さん?」
ナレッジがそう言うと、緑髪の女性は少し考える動作をしたあと、
「いや、お母さんではなくリヴェリアと呼んでくれ」
という。
「わかった!リヴェリアお姉ちゃんだね!」
そう言いながら、ナレッジはポケットの中に手を入れる。

そして、そのタイミングで気が付く。
そう、彼、ナレッジは、いつの間にか彼女、つまるところ女の子になっていたのだ。
（な、なんじゃこりゃー！）
思わずナレッジは心の中で叫ぶ。
しかし、一周まわって落ち着いたのか、表面上は何もないように振る舞う。
目の前にいるリヴェリアは、そんなナレッジの方を向いたまま微笑む。
その顔は、子を見る母のそれに近いものだとナレッジは思うのだった。
～少しして～
「それで、どうしてこんなところにいたんだ？親はどうした？」
リヴェリアが疑問そうに聞いてくる。
「えっ・・・？」
それを聞き、ナレッジは動きを止める。
（親？誰のことだ？まずこの世界にあいつらはいないはず、なら、誰が親なんだ？）
「いない。いたとしても、僕は知らない。知る気もない」
ナレッジは、嘘でも本当でもない事を口にする。
ロキが目を細めたが、今は気にする所ではない。
「ふむ、捨て子か？ならば、誰かに保護されたのか？」

「分からない、僕には今日より前の記憶が無いから」
事実、この世界に来て、この体になったときの記憶は、今日が最初である。
「ママ、この子は嘘はついとらんよ、本当の事を言ってるかはわからんがな」
ロキがそう言うと、リヴェリアはため息をつく。
「まあいい、ならばうちで面倒を見るとしよう。とりあえずホームに戻るぞ」
「わかった」
ナレッジは、情報がやっと手に入ると、少し頬を緩めるのだった。
～ロキファミリア　ホーム～
「・・・城？」
思わずナレッジはそう呟く。
「ほら、早くついてこい。フィンに紹介しないといけないからな」
リヴェリアの言葉で、ナレッジは再び二人のあとを追うのだった。
～ロキファミリア　ホーム内　団長室～
「なるほど、事情はわかった。ロキ、君はまたやっちゃったんだね？」
「そんないいかたないやろ！流石のうちも心が折れるで!?」
フィンの一言に、ロキは若干涙目になりながらそう言う。
「まあロキはいいや、それで、リヴェリアはどうしたい？」

しかし、それを無視し、フィンはリヴェリアの方を向く。
「どうしたいも何も、試験に合格出来たら入団させればいいだろう？
というか、私の後ろに隠れてないで、ちゃんとにフィンの方を向きなさい」
リヴェリアにそう言われ、ナレッジは嫌そうにしながらもリヴェリアの後ろから出てくる。
「ナレッジです。言っておくけど、子供じゃないから、一応十八だし」
ナレッジがそう言うと、三人は驚く。
「それで、試験はなにをすればいいの？」
ナレッジがそう言うと、三人はあっ、と言い、
「リヴェリア、ガレス呼んできて」
「わかった」
と、フィンとリヴェリアが動き出す。
～数分後～
「フィン、呼ばれたから来たが、何のようじゃ？」
開かれた扉から髭の生えた男とリヴェリアが入ってくる。
「あぁ、実は、ロキがまた拾ってきてね、それで話を聞いたら、この子を入団させたいらしくってね」

髭の生えた男にそう説明するフィンに男はうなずくと、
「わかった、なら、あの質問をするか?」
と言いながら、ナレッジの方を向く。
フィンもそれに賛成なのか、うなずいたあと、ナレッジの方を向く。
「お前には、今から三つの質問を受けてもらう」
「一つは僕、一つはリヴェリア、一つはガレスが質問する」
二人の言葉に反応し、ナレッジがうなずくと、ガレスが最初の質問をしようとする。
「でも、あれだったらみんなまとめていってほしい。その方がやりやすいから」
しかし、それを遮るようにナレッジから意見を言われてしまい、少し固まる。
「まぁ、君がそれで良いならいいけど・・・」
フィンがそう言うと、再びガレスが言い始める。
「・・・まあよいじゃろう。まず一つ目だ、お主にとって力とはなんだ?」
「次に私から、ナレッジにとっての知恵とはなんだ?」
「最後に僕から、君にとって勇気とはなんだい?」
その三つの質問を聞き、ナレッジは少し考えたあと、
「僕に、僕にとっての知恵とは全てです」
ロキも含めた四人は首をかしげる。

「力はただ持つだけでは、振り回されるようでは、ただの暴力でしかない。
技術を持つものには負けてしまう。
使い方を間違えなければ絶対的な盾となるもの。
しかし、正しい力の使い方を知らなくてはならない。
勇気とは、ただそれを掲げただけでは、圧倒的力の前には、
知恵には、戦略には立ち向かう事は出来ない。
正し、逃げるのも勇気が必要だ。だがそれに気が付けるものはあまりにも少ない。
気づいたときにはもう手遅れ、そのまま潰されて終わり。
屍をさらすか、奴隷になるかは知らないが、少なくとも生きていることはそうそう無いと思う。
知識とは相手の弱点を突くための武器であり、弱者の武器だと思う。
昔からそうだ。
圧倒的に有利だった筈のものが、たった一つの策によって全部崩れる。
自分が有利な条件を手に入れるための手段だと思う。
だから僕はどんな場所でもこう言う。
勇気、力、知恵の三つの中から一つ選べと言われたとき、
毎回こう言うんだ。僕にあなたの持つ全ての知恵を奪わせてくれと・・・。

っと、これで良いですかね？
一応、勇気、力、知恵の三つ、全部言ったと思いますが」
四人が唖然としているが、ナレッジはそれに気が付いていない。
「リヴェリア、もう彼女、合格でいいんじゃない？」
「・・・そうだな」
「ここまで言われているしまったらなにも言えまい」
少ししたあと、三人はそう言い、ナレッジのほうを向くと、
「「合格、これからよろしく」」
と言うのだった。
こうして、ナレッジはロキファミリアに入る事になったのだった。

最弱のステータス

～ロキファミリア　ロキの部屋～

「そんじゃ、上脱いで横になってくれや」

「わかった」

ナレッジはそう言うと、上の服を脱ぎ、そのまま背中を上にして寝転がる。

ロキがその上にまたがると、指に針を刺して血をナレッジの背中に落とす。

ナレッジの背中が光ると、そこから文字が出てくる。

そこには、

――――――――――――――――――――――――――――――――

力：Ｉ０

耐久：Ｉ０

器用：Ｉ０

敏捷：Ｉ０

魔力：Ｉ０

【スキル】

【絆の加護】
死んだ時、その魂は絆の元へ帰る。
その時、転生、もしくは、この世界で出会った友と共に世界を渡ることができる。
絆を繋げば繋ぐほど、一部のステータスに大幅なプラス補正
【神軍師のなりそこない】
力、耐久が一切増えない代わりに、器用、俊敏、魔力にプラス補正
【特殊防御陣】
パーティー全体の耐久を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。
【特殊攻撃陣】
パーティー全体の力、魔力を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。
【戦略者】
パーティー全体のステータスを1．5倍する。魔力を五×人数分消費する（常に発動。
自分には効果がでない
【魔法】

【その護りは味方の為に】
自分以外のパーティー全体に五回分の攻撃の無力化
代償として、自身のステータスが一週間一になる
【今まで救えなかった全ての者へ】
一回のみ、死んだ者を蘇生、全ての傷を治す。
代償として、体のどこかが使えなくなっていく。
自身に使うことは出来ない
【僕は最弱、故に最強】
自分以外のパーティー全体の魔法攻撃力（回復力も含む）を五乗
代償として、一部の臓器が活動を停止する
【あの愛しき女神に捧ぐ】
自身を殺す代わりに、敵対者全てを塵に返す。魂は絆の元へ帰っていく。
――――――――――――――――――――――――――――――――
あ、なんかロキが固まった。
「な、な・・・」
ロキのその声を聞き、ナレッジは無意識のうちに耳を塞ぐ。
直後、

「なんやこれー！」
というロキの声が、ロキファミリア内に響いた。
～しばらくお待ちください～

「それで、さっきの声の理由はなんなのかな？」
フィンがロキを見ながら問いかける。
「ナレッジのステータスがかなりおかしいんよ！ほら、見てみぃ！」
ロキはそう言うと、ナレッジのステータスの書いてある紙を見せる。
フィンはそれを受けとると、
「スキルが五個、魔法が四個出てる!?それに、魔法に関しては代償が重すぎないか!?」
と驚きながら、ちょうど入ってきたリヴェリアにステータスの紙を渡す。
「・・・ロキ、これは本当なのか？」
リヴェリアはありえないと言いたげな顔でロキの事を見る。
「当然や、こんなことで嘘はつけん」
ロキのその言葉を聞き、二人は頭を悩ませるのだった

狼に絡まれた最弱、もう死ぬかもしれない

～ロキファミリア　ホーム～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「なんでこんなガキがアイズと一緒にいるんだ？あぁ？」

ケモ耳と尻尾の生えた目付きの悪い男の人に絡まれてます。

なんでこんなことになったのか？それはもう特に深い理由も無いのですが。

～回想～

「ナレッジの歓迎会するから食堂に行っといてくれるかい？」

「道案内はアイズに任せるから安心するといい」

「え？」

～回想終了～

なんてことがあったんです。ええ、それでアイズさんに連れてきてもらった結果がこれですよ。

っと、そろそろちゃんとに話さないとですかね。

「ベートさんには関係ないです。

別に、小さくて、銀髪とか、紅い目してて、妹みたいで可愛いとか、
リヴェリアに頼まれたからとかじゃないです」
と思ったらアイズさんが言ってくれ・・・え?なんか関係無いことも言ってませんでした?
僕はいつの間に銀髪だったり紅い目だったりになったんです?
ていうかそこの説明いりました?リヴェリアに頼まれたから~でいいと思うのですが。
アイズさんの後ろでいそいそと髪の毛の色を確認する。
あぁもう!こういうとき後ろで髪結んでると大変なんだよなぁ!
一本くらいなら抜いても・・・止めておこう。
あ、やっと掴めた。
S?Oのア?ナさんの髪型真似てみてたけど、次からポニーテールにしておこう。
地味にやるのに時間かかるし。
結論、なんか銀髪になってた。
・・・なんでさ。
「俺がこんなガキに負けるって言いたいのか?アイズ」
ん?なんでか変な方向に話がそれて・・・。

「そうだよ」
って、
「無理だから！僕だけじゃあ勝てないから！」
当然である。力も耐久も上がることもないし、逃げ足も速くない。
「ベート、アイズ、二人っともそこまでにしてくれないかな？」
直後、ナレッジの後ろからそう言われ、ナレッジはビクリとしたあと、ゆっくり後ろを向く。
そこにいたのは、フィン、リヴェリア、ガレス、ロキであった。
リヴェリアからは、なにか漏れてる気がする。
青というか、赤というか、そんな感じの霧のようなものが。
しかし、いまはそれどころではないナレッジである。
使えるものは使うと言わんがばかりに、涙目になりながらリヴェリアに向かい走り、そのまま後ろも回ったあと、リヴェリアのスカートを片手で握る。
「うう、リヴェリアお姉ちゃん、あの狼さんが怖いの」
直後、リヴェリア、いや、なぜか他の二人からも、若干の殺気の様なものを感じる。
ベートは冷や汗が止まらなそうである。
「少し眼をつぶっていてくれないか？ロキ、ナレッジを移動させておいてくれ」

リヴェリアの言葉通り眼を閉じると、後ろから持ち上げられる。
「いい子だ、ロキ、変なことはするなよ？」
それから少ししして、ベートの叫び声（むしろ断末魔）がロキファミリア内に響くのだった。

最弱、歓迎?される

～ロキファミリア　食堂～

どうも、ナレッジです。

僕は今、

「ちょっと、なんで団長は貴女にばっかり構うのよ!」

双子のアマゾネスの姉、ティオネさんに絡まれています。

なんか前もこんな感じの始まりだった気がするんだけど・・・まあいいです。

「ちょっと聞いてる?あなたに聞いてるのよ?」

なにかいっていますが、それより先に説明させていただこうと思います。

あれはまぁ、食堂にフィンさんたちが入ってきて、

僕が自己紹介してからの話なのですが・・・

～回想～

「ちなみにナレッジの席は僕とリヴェリアの間だよ」

「そうゆうことだ、ほら、早くこい」

「リヴェリアお姉ちゃんの隣ならまだいいけど、

フィンさんの隣は何か近くにいる女の人が怖いのでお断りさせていただきたいです！」
「団長命令だよ、騒ぎに巻き込まれたら困るしね」
「ウソだ！」
〜回想終了〜
なんてことがあったんです。
て言うか、掴まれてる腕からメキメキ音がするんだけど。
むしろそろそろベキッていいそうなんだけど。
「ティオネ、そろそろやめてあげないか？
彼女、耐久が一般人と同じなんだから、それ以上やると折れてしまうよ？」
あ、力が少し緩んだ、これなら問題ないかも。
「万能薬振りかければ治ります♪一回体に教えた方が分かりますって」
嫌な予感がしたので全力で手を振り払い、リヴェリアの上に座る様に逃げる。
フィンの方はダメです、死んでしまいますから。こう、ポキッと。
ええ、レベルがいくつになろうと下手すると子供にすら負けますからね。
「リヴェリアお姉ちゃん、次からここで食べていい？
やっぱりフィンさんの隣は駄目だってよくわかったから」

それを聞くと、リヴェリアはため息をつきながらも、しょうがないと了承する。
「やっぱりお母さんにしか見えない」
誰かが小さくそう言うと、声がした方をリヴェリアが睨む。
しかし、身長等の都合上、明らかに大人と子供、
さらに、ナレッジの世話をしているときのリヴェリアからは、
母性の様なものもあるため、何も知らない者から見たらお母さんと娘に見えるだろう。
実際のところは、言うまでもなく他人であり、
また、娘ではなくこの場合は息子が正しいのだが、それを知る者はナレッジ以外いないのである。
「む、口に汚れがついているぞ?ほら、じっとしていろ」
「自分でやれるから平気だよ」
そう言ってナレッジが口をふく物をとるより早く、リヴェリアが口を拭いてしまう。
その姿はやはりお母さん、それを見ていた一部の人物など、
可愛いものを見る目で二人のことを見ている。
食事が終わるまで、二人のその光景は見れたと言うが、
何人かは萌え死したせいで見れなかったため、真実かは不明である。

最弱の朝は早い

〜ロキファミリア　ホーム　調理場〜

どうも、ナレッジです。僕は今、

「出来上がりました！これを持っていってください！」

厨房で料理しまくってます、汗で肌に張り付いて嫌なんだけど。

あと、厨房を覗きに来た冒険者の人達がなんかいやな視線を送ってくるんですけど。

まぁいいや、とりあえず言われた量作ったし良いよね。

そう思って厨房から出た直後、ナレッジはいやな予感はして、一歩だけ後ろに下がる。

直後、横から赤髪の女性、ロキが飛んでくる。当然、そこに僕はいないので地面を滑る結果となった。

「僕の直感も捨てたものではないですね。

まったく、抱き付くならお風呂出てからにしてほしいです。

このままじゃ汗くさいじゃないですか」

「我々の業界ではご褒美です！」

ロキの口調可笑しいのと、なんか声増えてない!?

「ほう？なにがご褒美なのか是非教えてもらおうか。
安心しろ、私だけでは人で不足だろうからな、フィンとガレスも連れてきた」
「あ、リヴェリアお姉ちゃんだ」
僕とリヴェリア以外が動きを止めるなか、僕はリヴェリアに近付くと、
「朝ごはん、お風呂入るから少し遅れるかも、
出来るだけ早く出てくるつもりだけど、
冷めないうちに食べてほしいな」
と言い、そのまま風呂場に直行した。
～入浴中、しばらくお待ちください～

今日の朝ごはんは、簡単にご飯、焼き魚、味噌汁、納豆、豆腐、お浸しです。
珍しいらしく、あまり調理はしないらしいですが、
寝る前に料理長さんにお願いしたら買って来てくれたらしいです。
しかし、やはり火のそばが暑いのと、道具が重いので、汗びっしょりになってしまったのです。
前なら汗なんてかくようなことじゃなかったのにな。残念。

まぁ、自分の分ではなくくそったれな両親の分ですが。
自分の分なんて毎日パンの耳とか、下手するとないなんてこともあったからな。
給食なんて注文すらされてなかったからね、小学は昼抜きでしたとも。
周りは見てみぬふりだったからなぁ、て言うか、よく栄養失調で倒れなかったな。
まあいいや、それよりも早く食べちゃおうって、
「リヴェリアお姉ちゃん達は今から朝ごはん?そんなに長時間叱ってたの?」
リヴェリアたちがいた。
こちらに気がついた三人は、ため息を付きながら、僕の方を見てくる。
「ナレッジを待っていたんだが、まったく、一体なにがあった?今にも泣き出しそうな顔して」
リヴェリアがそう言ってくる。確かに、若干視界が歪んでいるが、
そんな言われるほど泣きそうなのだろうか?
そんな風に考えているうちに、頬に熱いものが流れる。
触れてみると、手には水が付いていた。
リヴェリア達が若干慌てているように聞こえる。
「はは、なんでだろうな、もうとっくにこんなの流れないって思ってたのにな」
僕はそこまで言うと、涙をぬぐったあと、頬を両手で叩く。

「とりあえず、ご飯食べようか、せっかく作ったのに、冷えてたら勿体ないや」
僕はそう言うと、リヴェリアの上でご飯を食べ始めるのだった。

最弱、武器すらまともに選べないんだけど（重量的な意味で）

～ヘファイストスファミリア　初心者エリア～

どうも、ナレッジです。

今僕はヘファイストスファミリアの上の階、

リヴェリア曰く初心者さんの作ったものがおいてあるエリアに来ています。

理由は簡単です。武器を見に来ました。

僕、片手剣すら持てませんでしたが。しかも訓練用の少し軽いやつ。

ナイフはギリギリ持てましたよ？片手に一本ずつ。うまく動けませんでしたが。

第一近接格闘とか死んじゃうから、近付いたらもうアウトだから。

せめてピアノ線見たいのがほしい、動き止めさせるのに。

いや、ゴブリンとかに意味ない気がするし、結局それ自分で倒せなくね？

異世界きて俺ＴＵＥＥＥＥ！とかないから、割りとマジで。

え？転生特典棒に振ったのおまえだろだって？シランナ。

て言うか鋼糸だったらワンチャン首切れるかな？罠みたいにしないと駄目だけど。

まずそんなの売ってるか？いや、多分無い。
「これじゃないか？」
ついてきてくれていたリヴェリアが指を指す。
その方向を見ると、黒いドレスグローブと糸が見える。
なんかブラック○レットでティナが使ってたのとにてる。
見た目からしてかなり似てるし、あれもたしか糸が出るとか。
まぁ、聞いただけだからわからないけど。
て言うか、
「あるんだ」
思わずそう呟いても悪くないと思う。
とりあえず買ってもらった。ダンジョンに潜るのは明日からで、
それまでにメンバーを決めておくとかなんとか。
まぁ、戦闘がまともにできないからね、しょうがないよ、うん。
ていうかこれ、切り離して使うのを目的にしてるのか。
収納じたいはされてるけど、壁にさしてトラップまでが限界かな？
さっき試してみたけど、やっぱりそんなに速度でないし。
それならナイフも必要かな？

運悪くモンスターが壁から出てきたとか笑えないけど・・・
力と耐久は上がらないけど、もしかしたら走れば俊敏上がるかな？
いざという時のために走っておいて損はないかも。
と考えてたら、お昼の時間になってました。
いそがないとリヴェリアに怒られるし、ちょっと走ることにした。
部屋が近いからうれしいです。
～二分後～
何とか間に合いました。
そのあとは、少し急ぎ目に昼食を食べ終え、自分の部屋に戻り、
オラリオの地図（リヴェリアからもらった）を取り出す。
そして、その上に羽ペン（フィンからもらった）を使って走る道に線を引くと、
近くにある紙に、ここの道を走ってきますと書き、地図の上にのせる。
そして最後、部屋のドアのところに、夕食の時間になっても帰ってこなかったら、
部屋の中にある地図の線のところを探してみてくださいと書いた紙を張り付ける。
今回は人通りの多いところを選んだ。
変に裏道とか通ってさらわれた場合、周りの人が気付いてくれないからだ。
さぁ！元気に走っていきいますか！

最弱、走り込みの途中で子供を拾う

～オラリオ　大通り～

どうも、ナレッジです。

僕は今、

「ねえねえおねえちゃん、あのお店何？」

ぼろぼろの服を着た女の子と散歩してます。

ちょっとそこの男ども、なんでこっちを見て固まってる。

そして、女の子のほうにいやらしい目を向けるな。

あとティオナさん、気が付いているので、見守らず出てきてください。

そして、リヴェリアからもらったお小遣いから出さないためにも、あなたが出してくれるとうれしいです。

「あそこはじゃが丸君屋さんですね。それはそうと、とりあえず服を買いに行きますよ？」

まぁ、何でこんなことになったかというと、それは数分前に戻るのですが・・・

「～～～♪」

そのとき、鼻歌交じりで走っていると、ちょっとした小道のほうから声が聞こえた気がしました。
こう、小さな声で、たすけて、みたいな感じの声が。
それで、そっちのほうに行ってみると、小さな灰色の髪の毛をした女の子、つまりこの子なのですが。
が、倒れていたので、近寄ってみたら、なんか空腹だったらしくって、
近場で食べられる場所を探して、そこで食事をとったのですが、
その時に服のことに気がついて、服屋を目指して移動してるのです。
え？食べた店の名前？たしか、豊饒の女主人だったかなんだがだった気がします。
まぁ、それはともかく。
「ほら、あのお店に入りますよ」
僕はそういうと女の子の手を引いて店の中に入っていきます。
「いらっしゃいませ、なにをお探しでしょうか」
店に入ると、ヒューマンの女性が訊いてくる。
「すみません、この女の子に合いそうな服を二つほど、予算は一万ヴァリスほどでお願いできますか？」
ナレッジがそういうと、女性はわかりましたといい、女の子を連れて奥のほうへ行く。

女の子に掴まれていたため、ナレッジもついていくが、着替える時は違う方向を向いておく。
さすがに子供とはいえ、中身男子のナレッジは見ることはできない。
女の子は、着替え終わると、ナレッジにどうなのかと感想を求める。
ワンピースだったりなんだったりと、いろいろと聞かれたが、
それぞれ別々の感想を返していく。
結果的に、少女は十枚ほどを三枚まで減らしたのだが、そこから決めることができなかったので、
最終的にナレッジはその三枚ともを買うことにした。
しかし、女性は楽しめたからという理由で、予算道理、一万まで落としてくれたので、
ナレッジとしては余計な出費をしないで済んだので、内心ほっとするのだった。
だが、一応気になったので、ナレッジは一つだけ女性に質問する。
「でも、勝手に一万なんて言ってよかったんですか？」
すると、女性は笑みを浮かべ、
「趣味で私が開いてるだけだからね、値段自体はその時々なの。
元は取れてるし十分よ」
と言われたので、お礼を言うと、女性はさらに、

「あと、あなた用の服も入れておいたから、なんだったら来てみてほしいわ」
という。本当に、何から何まで世話になりすぎだな。
そのあとはとりあえず代金を払い、言われた通り入っていた服を店の一室で着替えさせてもらい、
女の子が出てくるのを待つ。
「やっぱり私の考え通り、ばっちり似合ってるわね」
ちなみに、僕が今着ているのはワンピースである。
実は麦わら帽子までつけてくれた。これで日差しの強い日の装備は決まりである。
そんなことを考えていたら、女の子がでてきた。
僕とおなじくワンピースである。
「それでは、本当にありがとうございました。また次に、機会がありましたらよらせていただきます」
僕はそういってお辞儀すると、それにつられて女の子もお辞儀をする。
そのあと、僕と女の子は店を後にした。
(ファンタジードレスショップ、すごい名前だけど、扱ってる服も一級品だったな。
また今度行ってみよう)
僕はそう思いながら、この子の親を探すために、

一度ギルドに向かって歩き始めるのだった。

拾った女の子、家にかえりたくないってよ(ならうちにきなよ)

～バベル　ギルド内～

どうも、ナレッジです。今僕は・・・

「ねえ、子供は君の道具じゃなんだよ?今決めな?ここで死ぬか、この子を開放するか」

買ってもらった糸の入ったグローブで男性の首を絞め落とす一歩手前です。

訂正します。

僕が絞め落としかけの状態でやめてもらうようにお願いして、ティオナさんに持ってもらってます。

周りが騒がしいですが、今はそれどころではありません。

どうやって絞め落とそうとしているのか?

それはこう、首の周りに糸回して、地面に差し込んだ後に、両手を使えないように後ろで縛って、

両足を縛った後に地面に差し込んで、近くのぼうけんしゃさんに上目遣いでお願いして武器を置いてもらった。

冒険者が使うような武器だ、そこら辺の男性が持ち上げられるほど軽いものはない。
第一、動いた時点で首が飛ぶ。
「なぜ貴様のような餓鬼がそいつのことを守る」
男性はそういうと、女の子のほうを睨み付ける。
「なぜだと?そんなの簡単だ。俺は貴様のような奴が心の底から嫌いなんだよ
それに・・・」
ナレッジは女の子のほうを向くと、笑みを浮かべ、
「この子は僕と同じ気配がする。それだけじゃない、この子は僕に助けを求めた」
というと、男性のほうを冷めた目で見る。
「君のようなゴミ屑と、この子のような助ける価値のあるもの、比べるまでもないだろう?」
そんな会話に対して、ティオナがジト目でこちらを見てくる。
「それで、結局どうするのさ。わたし、完璧に巻き込まれただけなんだけど」
・
「あぁ、殺すときは俺がやるから、ティオナさんは気にしないでいいよ?
それに、どっちが問題あるかなんて、周りの見ていた人たちは理解してるだろうしね?」

ナレッジがそういいながら周りをみると、周囲にいた全員が静かにうなずく。
「どっちにしても、こいつはもうこの街じゃあ暮らしていけないだろう？
人の悪事は千里先まで届くというしね。そういうわけで、もう放してくれていいよ？」
ティオナはそれを聞くと、両手に持っていた糸を放す。
直後、両手の糸を無理やり引きちぎると、血が出ていることを無視し、
さらに首の糸を手を使ってちぎる。
なぜ金属製の糸をちぎるなんて行動できたのかはわからないが、そのままの勢いで攻撃して来たので、
そのままティオナさんが放した糸を使って男性の首を落とす。
ここで一番疑問だったのは、なんで足の糸を切らなかったのかだが、
それ以上に僕は、自分の服についてしまった血液を、どうやって洗い流そうか考えるのに、
少し頭を悩ませるのだった。
それと、あの子ももう帰るところがなくなったため、
そのままロキファミリアに連れて行くことになった。
結局そのあと、ロキファミリアについた時に、顔とかが血まみれなのをリヴェリアに

みられて、
リヴェリアにすごい怒られました。
あと、あの子の名前だけど、僕に決めてほしいとのことなので、
少し考える時間をくれるようにお願いをし、
その日はのんびりと休むことにしました。
寝る前にロキの謎の声が聞こえた気がしたけど、そんなの気にしないの精神で無視した。
ちなみに、どんな原理なのかわかりませんが、服についたシミは、柄のようになっていましたよ？
あの柄は百合と見た！紅い枠でできた百合ですよ！
白いワンピースだから中身白いけど！
・・・なんかいま、かなり変なテンションだった気がするな・・・
そんなこんなで、なんでか忙しかった今日は、おわるのだった。

最弱、女の子に名前を与える（入団試験もするって）

～ロキファミリア　ナレッジの部屋～

どうも、みなさんおはようございます。ナレッジです。

僕は今、ベットから起き上がり、女の子の名前を考えています。

「うむむ、どうしたものか・・・」

そうして考えることおよそ三十分後、朝食の時間の五分ほど前まで悩み、

ふと、自分のことをこの世界に送ってくれた女神のことが頭に浮かぶ。

「確か、あの人の一族の名前は、星野、だったよな？なら・・・」

トントントン

そうしているうちに、ドアのほうからノックする音が聞こえる。

「お姉ちゃんいる～？」

昨日拾ってきた女の子だ、ちょうどいいと思い、ナレッジはドアを開けながら、

「ああ、ちゃんとにいるよ。呼びに来たってことは、ご飯の時間なのかな？」

という。

それを聞いた女の子は、ニコリと笑みを浮かべ、

「そうなの！リヴェリアお姉ちゃんに、お姉ちゃんに声かけてきてってお願いされたの！」

と言ってくるので、ナレッジは女の子の頭をなでながら、

「そうか、お願いをちゃんと聞けて、明（あかり）はえらいな」

というと、女の子、明は首をかしげたあと、周りを見る。そして、

「おねえちゃん、明ってだれ？」

と、ナレッジが不思議そうに聞いてくるので、クスリと笑った後、

「昨日、お前に頼まれていただろ？前の名前は言いたくないから、お姉ちゃんが付けてって。

だから、あのあと、ていうか今日なんだが、考えてね。

僕の恩人といえる人の名前から、星野、

そして、星明りのようにすべてを照らせる希望であってほしいという願いを込めて、明、

だから、お前の名前は、今日から星野明だ」

と、明に向けて説明をする。

明はそれを聞いて納得したのか、思わずまぶしくて目を細めたくなるような笑顔を浮かべる。

「さ、それじゃあいくか」
「はーい！」
そのあと、二人は食堂に行き、リヴェリアの両隣（リヴェリアには少し移動してもらった）で食べ始める。
周りからは、「また幼女率が増えた」だとか、「やっぱりリヴェリア様はお母さん」だとか聞こえる。
まぁ、そんな言葉を無視して、リヴェリアを含めた三人が食事を終えると、
ロキから呼び出しがかかったので、三人はロキの後ろをついていく。
～ロキファミリア　団長室～
四人が団長室に入ると、中にはフィン、ガレスの二人が待っていた。
「これから入団試験を開始したいと思いまーす」
ロキが唐突にそういい始める。
とりあえず説明一切受けなかったので、八つ当たりとして脛のあたりを蹴っておいた。
威力なんて全然なんでしょうけどね！
まぁ、それは置いておくとして、
「入団試験って、もしかして明のですか？」

と聞く。
明以外はそう行けば今聞いたばっかりか・・・
頭の上に?を浮かべていたので、一応説明しておこうと思う。
「この子の名前ですよ。昨日名前付けてほしいって言われたから、朝食を食べに行く前につけたんですよ。
本人も気に入ってくれたみたいでよかったです」
僕がそういうと、四人は納得してくれたみたいだった。
「てか、だから昨日名前教えてくれなかったんやな。
んもう、いってくれたらうちがつけてやったのに」
ロキがそういうと、明は少し眉をひそめ、リヴェリアのスカートを握りながら短く、
「や」
とだけ言うのだった。
あ、なんかロキが落ち込んでる。
「はぁ、まぁ、そこにいる人は置いておくとして、試験って僕にやったようなやつですかね?」
「まぁ、特に変えることはないかな」
「そうか、なら問題ないな」

ナレッジはそういうと邪魔にならないように移動する。
「さて、それじゃあいまから僕たち三人が質問させてもらうけど、いいかな？」
フィンがそういうのにたいして、明は小さくうなずく。
それを確認した三人は、それぞれ質問を始める。
～質問中～
「力と一言で簡単に言っても、その中には多くのものがあります。
体力精神力知力握力筋力抵抗力、一つでは役に立たないものの塊が力といえるのではないでしょうか？
勇気はそれだけです。勇気ある者である？そんなものは望みません。
あったとしても困ることはないでしょう。
ですが、なかったからといっても困るでしょうか？
生物とは本来臆病なものです。
その臆病さを無理やり押し込めて、敵に立ち向かうのが勇気と呼ばれるものなのでしょう。
それで、それに負けてしまったら？ちょっとしたけんかならいいですね？
では、負けるとわかっているほど相手が強大であり、その結果命を落とすとしたら？
家の状態がまさにそれでしたよ。

機嫌を損ねれば瀕死になるまで殴られ、蹴られ、ナイフで斬られ、
呼吸が苦しくなるまで水面に顔を押し込まれ。
そんな状態で、勇気を振り絞って逃げた、今回は声が聞こえたのか、
運よくナレッジさんが助けてくれました。
では？そうでなかったら？たしかに、あって困ることはないし、それで助かることもあるでしょう。
ですが、それは本当に勇気だけですか？運が必要ではありませんか？知識が必要ではありませんか？
知恵とは何に関しても必要なものです。
この方向に行けば大通りがある、ということを知っていたから私は今ここにいます。
知らなければ、今ここに私はいないでしょう。
逃げるという行為を知らなければ見つかることがなかったでしょう。
それが私の答えです。満足していただけたでしょうか？」
なんか、僕が入るときも似たようなこと言った気がする・・・まあいいや。
「それで、合格？」
「似たようなこと、君も言ってたしね・・・これで断るのはちょっとなぁ・・・
うん、合格だよ。

でもそっか、勇者は望まれないかぁ、はは・・・」

フィンが遠い目をしているな。まぁいいや。

そうして、明がうちのファミリアに入ることになりましたとさ、チャンチャン。

「だれか、うちにはんのうしてほしかったんやけど」

あ、そういえばいましたね、ロキ様。

明のステータス

～ロキファミリア～

どうも、ナレッジです。僕は今・・・

「ナレッジとは別な意味で異常なステータスやな」

「あの、落ち込まないでくださいっ！」

部屋の端で体育座りしてます。

ええ、明のステータス見て落ち込んでるだけです、キニシナイデクダサイ。

まぁ、それは置いておくとして、何でこんな風になっているかというと、

それは五分くらい前のことなのです。

～五分前～

「ほなここに横になってや」

ロキがベットを指しながらそういうと、明は言われたとおりに横になる。

ちなみに僕はそれを横で見ている。

「～～♪」

ロキがなんかノリノリだよ。まぁ別にいいけど。

「え？」
なんかいま変な声が聞こえｔ
「なんやこのステータス！」
うっわ、なんかロキが叫んでますよ。おぉこわ。
とかおもってたらステータス見せてきました。えっと、

星野　明
力：Ｉ　０
耐久：Ｉ　０
器用：Ｉ　０
敏捷：Ｉ　０
魔力：０
スキル
直感Ｂ
何となく、で、大抵のものを防御や回避ができ、
大体このくらいの敵がいる、ということがわかったりする（常時発動）

破壊工作Ｂ＋
相手の装甲の破壊、行動の妨害、武装の破壊、
毒による判断能力の低下などを狙う時にうまくいくようになる補助的スキル
黄金の杯Ｃ
絶対防御、もしくは回避に対し、確実に攻撃を当て、その防御を貫くことができる。
さらに、動きを停止させる効果がある（１分）
魔力吸収　Ａ＋
敵を殴る、血を浴びるなどの攻撃をした場合、減量した魔力が回復、
もしくは、最大魔力量が増える
２度と負けないためにも
自身の全ステータスに入る経験値を＋５０
ステータスの壁を破壊する（上限が９９９ではなく９９９９９９になる）
魔法
血塗れの王剣（宝具）
ランクＥ―
対悪宝具
効果範囲　１～５０人

敵全体にやや強力な防御無視攻撃＋必中と絶対防御貫通の効果を自身に付与（２時間）
詠唱
この剣は悪を滅ぼすためにある。王が持つ鮮血にまみれた剣である。
覚悟せよ、いま、裁きの時が来た！　ブラッディキングソード

「・・・なにこれ」
「完全にぶっ壊れやな、これはひどい」
ロキがそういう。ちなみに僕もそう思う。
ていうか・・・
「２度と負けないためにもの効果おかしくない？」
「きっと突っ込んだら負けなんや」
「そんなにおかしいんですか？」
ナレッジのつぶやきに、二人がそんな反応を返す。
「うん、あとこの魔法も不思議性能だよな。なに？この対悪って」
「えっと、それで私は、いったい何をすればいいのでしょうか？」

「とりあえず前衛でアタッカーかな」
「ナレッジのダンジョン入りも今日が初めてなんやし、
一緒に行ってきいや」
ロキがそういうと、明は少し驚いた後、ナレッジのほうを向き、
「そういうことらしいので、今日はよろしくお願いします。
お姉ちゃん♪」
というのだった。

最弱のダンジョン入り（そのまま行かせるとは言ってない）

～ロキファミリア前～

どうも、ナレッジです。ぼくはいま、

「えぇい、とりあえず武器を取ってこい！」

「素手で何とかなります！」

「なるかアホ！いいから片手剣でもとってこいよ！」

「ならお姉ちゃんはどうなんですか！」

「糸とか使うやつと比べんなや！それにこいつはちゃんとに短剣を持っているだろう!?」

「ま、まぁまぁ、二人とも、その辺で、ね？」

「「うるさい！」」

「ひゃ！　うう、ナレッジさぁん」

「おぉ、よしよし、怖くない、怖くない」

訂正、僕の目の前ではとんでもない喧嘩が発生しています。

とりあえず泣きついてきた梅重（うめがさね）色の髪と目をした女の子、
サラのことを落ち着かせつつ、
どうしてこうなったのか説明しよう。
それはまぁ、ここに集まった時の話なのだが・・・
～五分ほど前～
「あそこにいる二人が、今日からお前たちと一緒にダンジョンに潜る二人だ」
リヴェリアの案内で、僕と明はロキファミリアの門の前まで案内された。
この時、ギルドで武器を借りられればいいと思い、
装備を気にしなかったのが失敗だったんだろう。
なにせ明が、リヴェリアの去った後に、
「武器とかもうわからないし拳でいいですよ！拳で！」
とか言い出すものですから、思わず頭を抱えた。
まぁ、そんなこんなで現在。
「お前に怪我されるとこっちが困るんだよ！
ポーションだってただじゃねえんだぞ!?」
「わかってますぅ。怪我しなければいいなら全部回避で余裕ですぅ」
「っのやろ」

本気で止めなければならない、さすがに剣に手をかけるのは危険だ。
次からリヴェリアにも同行してもらおう。
この二人相性が悪い（今回は明が悪いが）。
それにもうそこそこに時間がたってしまっている。
おなかすいてからダンジョンとかたまったもんじゃない。
「明はいい加減にしろ！そして名前の知らないそっちは自己紹介しろ！」
反応が薄い。
おとなしく、ロキにもらった少し大きめのナイフを両手に持ち、
腹のあたりで二人の頭部を殴る。
ゴスッ
そんな音が聞こえ、二人が頭を抱えたので、笑みを浮かべながら、
「それで、静かにするのと、静かにさせられるの、どっちがいい？」
と言ってやると、なぜか顔を青くしている気がする。
とりあえず二人の近くの地面にナイフを突き刺す。
石が敷き詰められているので、僕の筋力で刺さるか微妙であったが、
上手く隙間に入り込んでくれたようだ。
「で、どうする？」

「「シズカニサセテイタダキマス」」
「ナレッジさんが怖いですぅ」
後ろでサラのそんな声が聞こえた気がしたが、とりあえず無視である。
「明は、今回は僕のナイフを貸すけど、
次までに自分に合う武器を探して持ってくること。
それでえっと・・・名前知らない君は、
いくらなんでも剣を出そうとするのはだめだ。
それで人を殺すこともあったんだよ？
そうじゃなくても、女の子に手を挙げたなんて、
ロキとかほかの男の神に知られたらいろいろと面倒だろうし、
そうじゃなくてもほかの人から危ないやつ扱いされるよ？」
「「ハイ」」
「はぁ、それじゃあこの話はここまで。ほら、男の人は自己紹介はよ。
昼までもう時間ないよ？」
ため息をつきながらそういう。
どうやら行けるのはもう少しあとらしい。

やっぱり僕は戦闘にまともに参加できないよ・・・（ゴブリンが固い）

～ダンジョン　1F～

どうも、ナレッジです。僕は今ダンジョンにいるのですが・・・

「わ！わわわ！」

「やばい！抜けられた！」

「怖い！やっぱり無理ですよ！」

「大丈夫！お姉ちゃんは私が守るんだから！」

ゴブリンに殺されかけたり、コボルトから逃げたりしつつ罠はったりしてます。

もっとも、罠の効果はなさそうですが・・・

え？なんでって？それは・・・

「なんでまたタイミングよく出てくるんだよぉ！」

つけた直後に解除されてたら、効果ないですよねぇ（泣

おかげでこれステータスが俊敏だけ高くなりそうなんですけど。

ダンジョンが僕に嫌がらせを続けてくる！絆様助けてぇ！

なんて叫びたくなる程度にはひどい状態です。
「あぶな！っこの！」
コブリンの攻撃を回避して、そのまま手に持っているナイフを使って首を攻撃する。
・・・刺さんないよぅ・・・
むしろはじかれた。どうしろと？
自分のあまりの貧弱さに思わず泣きたくなってきた。
「お姉ちゃん！」
「!?やばっ！」
首を狙っていたはずのゴブリンは、いつの間にか体勢を立て直していたのか、
こちらに攻撃をしてくる。
とっさに攻撃をよけるも、動きを止めていたこともあり、
服（鎧とかつけると全然動けなかったため）が少し破けて、おなかのあたりが出てしまう。
僕を攻撃したゴブリンは、明の一撃で灰になる。
「ごめん、かすっちゃったや」
「ごめんじゃないよ！偶然ゴブリンが『バランスを崩した』から助かったんだよ!?
あのままあたってたら死んじゃったかもしれなかったんだよ！」

「とりあえず、一回でるぞ、ナレッジの戦闘はもう少し装備整えてからだな」
「怪我したら大変です」
サラとレンの言葉にうなづくと、全員で上に上る階段に移動する。
「ていうか、もうナレッジ厨房担当とか服屋とかやれば?戦闘は危なすぎるだろ?」
レンが正論を言ってくる。確かに服とかは作れるし、料理とかも作れるが、
どれも出来（料理の場合は量）が悪いものばかりだ。
服は少なくとも、
ファンタジードレスショップで買ったやつとおんなじくらいの肌触りじゃないと!
料理?前世のおかげで作ることはできるけど、多く作るのはちょっと・・・
この世界に来てから貧弱になったし・・・
やろうとして一部焦がしてしまったのだから笑えない。
というわけで一言。
「無理だね、料理は少し手伝ったけど量作れないし、裁縫のほうは目標に届かないし」
「それならしょうがないか・・・なら、明と常に近くにいるといいだろうな
そいつなら護りながら戦えるだろ?ちなみに俺は無理だ」
明はそれを聞くと、笑みを浮かべた後、
「当然!モンスターも害虫も悪い虫も近寄らせないよ!」

というのだった。そこで、少し離れたところが少し騒がしくなってくる。
「そろそろ出口だ。早く帰って報告した後、飯食ってからまたダンジョンに行くぞ」
これが、僕の最初のダンジョンだった。
ほんと、散々な結果だったなぁ・・・はぁ。

お昼は厨房に立つところからです（腕を少しでも磨かねば！）

～ロキファミリア　厨房～

どうも、ナレッジです。

とても戦力として役に立たなかった僕は、せめて少しは貢献できないかと思い、厨房メンバーの人たちからダンジョンに行くときに持って行ける、手軽に食べられる料理を教わって・・・ました。

「ナレッジたんの料理が食べられると聞いて！」

「少しくらい待ってください。

少ししかないですし、どうせ昼にだすんですから。あとそこ邪魔です」

「ナレッジたんが冷たい！」

「気のせいです」

ええ、ええ、決して妨害されたからとかいう理由ではないので安心してほしいですね。

「目が笑ってないで？」

カッカシュッ↑うるさいの（ロキ）を糸で壁に貼り付けた音

「それじゃあこの料理持っていきますね」
「その前にはずしてほしいんやけど！」
「静かにしていてください。仕事が全部すんだら外してあげますよ」
ナレッジが笑顔でそういうが、確実に目が笑っていない。
むしろ、近くで動いていた全員が思わず一歩後ずさる程度の恐怖を感じられる笑顔だった。
そんな笑顔を正面から向けられたロキが軽く顔を青ざめている状態になっている時点で、
どれほど怖い笑みだったのかはなんとなくわかるだろう。
そのあとナレッジが制作した料理（片手で食べられる物）は全てロキが食べましたとさ。
本人は味見ができていなかったので、もう一度壁に縫い付けるか考えたが、
評価自体はしてもらえたのでよしとしようということで何もなしとなった。
～ロキファミリア　ナレッジの部屋～
さて、ダンジョンに行くときの軽食の練習は妨害されたので、
とりあえずダンジョンで使った糸を補充しないとですね。って、
「やばい、糸がないっていうよりも補充するときの説明、作った人から聞いてない・・・」

実際、糸自体は切り離したのを使えるらしいので回収だけはしてきたのだが、
そもそも買うとき、説明書きが不十分だったのだ。
当然のように、糸の補充について書かれていなかったし、
説明書のようなものがついてきたにもかかわらず、糸の補充には書かれていなかった。
「・・・これ作った人にも会いたいし、一回行ってみようかな？」
「それなら私も連れてって、お姉ちゃん」
「いったいどこから!?」
音を立てずに背後にいた明に思わずそう叫ぶ。
「え？部屋の天井から」
「なんで!?」
「ロキ様にお願いして上の部屋にしてもらった後、一部分だけ木製に変えてもらった後、
お姉ちゃんがいない間にいろいろと加工して、
何かあった時にすぐに駆けつけられるようにしました」
平然とそう言った明の言葉を頭の中で整理し、一言。
「もとたどるとクソ主神が原因かっ！」
それから数分後、

見た目幼女（ナレッジ）に追い回される男装が似合いそうな女神（ロキ）の姿が見えたとかどうとか。

最弱、鍛冶師（モドキ）と契約する（どちらかというと趣味の人ですね）

～ヘファイストスファミリア～

どうも、ナレッジです！あの後、ロキを壁に縫い合わせ、

たいしてありもしないお金を握りしめ（モンスターを倒せなかったため）、

このドレスグローブの製作者と会うためにヘファイストスファミリアに来ました。

もっとも、今回はそれだけではなく、

「お姉ちゃん、私の武器も選んでよ？」

明が使う武器を決めることもあるのですが。

「どんな武器がいいんだろうね、明の場合」

「うぅん、スキルとかも考えると・・・ナイフとか、片手剣とか、弓なんでしょうか」

「うん、そこらへんは、投げナイフを使って遠距離からおびき出して、片手剣・・・

でも、大剣でもいいかも？ほら、ティオナさんから教えてもらえるし、

うまく受ければ盾にも使えそうだし」

そんな風に考えていると、後ろから突然、

「何か武器のことでお困りですか？案内しますよ？」
と、声をかけられる。
二人が声がしたほうを向くと、
水縹（みはなだ）色の髪の毛と目をした、静かな雰囲気の少女が目に入る。
「あ、私、岩鋼（いわがね）水奈（みな）っていうの、
ヘファイストスファミリア所属の・・・
えっと、二つ名は誠に不本意ながら完全なる趣味人って呼ばれてます。
あなたが買っていったっていうドレスグローブの製作者です」
水奈と名乗った女性はそういいながら、ナレッジの手に付けているグローブに目をやる。
「それで、ここに来た目的は、糸の補充をしたくなったから、とかですかね？」
まぁ、説明書なんてつけてませんでしたもんね、と付け足しながらそういう水奈に、
ナレッジはうなずくと、
「はい、買ったはいいものの、糸の補充ができないのが困ったので」
という。
それを聞いた水奈は、
「にゃはは、それは当然、もともと一回使いきりのお遊び品だも～ん。

ま、またつかいたいって人には、少し改造して渡してるけどね♪」
もっとも、と、一度区切ると、
「私がその子の使い手にふさわしいって思った人限定でだけどね」
と付け足す。
突然雰囲気が変わって驚きつつも、ナレッジは、
「・・・ちなみにですけど、見分ける方法は？」
と聞く。
「秘密です♪ま、君は及第点かな。技術面を磨くといいよ。
そうすればきっとその子も答えてくれるから」
水奈はそういうと、ドレスグローブのほうを見て、
「君も、自分がふさわしいって思える相手を見つけられたのかな？
ま、こんな不思議なステータスの子くらいしか、君を使えないってのもありそうだけど」
と、まるでそこに人がいるかのように話しかける。
その直後、残っていた少量の糸が這い出てきて、
まるで意志を持つかのように水奈の足を伝い、肩に乗ると、
余計なお世話だと言いたいのか、頬をつつき始める。

「ごめんって、まったく、君はそんなわがまま言わないと思ったんだけどな。
さて、それじゃあ、この子の願いも含めて、君の専属になってあげよう。
つけた時に腕が傷だらけにならなかった君の状態を見るに、
使用者にもふさわしそうだしね。
突然だと思うけど、君の専属になるから、改めて紹介させてもらうよ。
ヘファイストスファミリア所属、岩鋼水奈、レベルは4、二つ名は完全なる趣味人、
大抵のものは私に言えば揃うから、どんどん探索してきていいよ」
「・・・はい？」
ナレッジの頭の処理限界を超えた瞬間だった。
ちなみに契約はそれから少しして落ち着いた後、改めて行われたのだった。

明の武器は何やらかなり特殊になるらしい（軽いのに重いとは一体・・・）

～水奈の工房～

どうも、ナレッジです。

あれから少しして、水奈さんの所有している工房に来ています。

「それじゃあ、一回グローブを預かるね。少し強化するから。

その間、適当にそこら辺においてあるのみてていいからね」

そういうと、水奈はグローブを持ち、そのまま奥に消えていく。

「・・・明の武器でも探すか」

「・・・そうですね」

二人はそういいながら周りにおいてある武器を見ていく。

そうして見回していると、明はその中に気になるものを見つけた。

ちなみに、ナレッジはナイフなどを探しては持ってみたりを繰り返している。

「これ、木製の床の上に置いてあるのに、刃が床に刺さってない」

それは、かなり大きめの大剣。

地面に向けて刃が置かれているそれは、床を一切傷つけていない。
しかし、それはおかしいのである。当然、物の切れないものを作っているとは思えない。
それだけでなく、刃渡り約2、３ｍはありそうな大剣だ。
重さがゼロなどと言わない限り、地面に刺さらないなどということはないだろう。
それにかなり分厚くできている。むしろ大盾のほうが軽そうである。
「その剣気になったの？明ちゃん」
後ろから声がかけられ、思わずびくりとなる。
ドアには鈴がついていたので、誰かが入ってきたらわかるはずだ。
・・・・
しかし、私はこの声を知らない。
「あの、あなたは誰ですか？」
私は後ろを向かずにそういう。お姉ちゃんが不思議そうにこちらを見てくる。
「私？私はグラ、あなたが見ている剣についてる精霊だよ？」
「・・・精霊？」
疑問に思いながら、私は後ろを向く。
するとそこには、蒼い眼、薄紫色のロングストレートの髪、

身長は１２０ｃｍほどの少女が立っていた。
服装は黒のワンピースである。
「そう、精霊。私たちは、水奈が作る全ての武器に宿っている。
当然、性格もそれぞれだし、それのせいで使える人と使えない人がいる。
私たちは気に入った特定の人物しか見えないようにすることができるから、
私たちのことは製作者とほんの一握りの人以外知らない」
「・・・それで、なんで私に声をかけたの？」
それを聞くと、グラはにこりと笑みを浮かべ、
「当然、気に入った子には売り込まないと。買われないで廃棄なんて悲しいわ」
といいながら、明の腕に絡みつく。
「それと、いいことを教えてあげる。
私たち精霊がついた武器たちには、何かしらのスキルが組み込まれる。
私の場合は、初期でついているのが重力操作、
しばらく使い込んで、私が見限るなんてことがなければ、契約してあげる」
「契約すると、いったいどうなるの？」
当然の疑問、それに対し、グラは腕をからめたまま、
「新しくスキルが追加されるっていうのが一つ、あとは、切れ味が上がったり、

今までの戦闘の中で一番使われた効果が強化される。
例えば私の場合、盾として使えば契約した後、防いだ時の衝撃が減少するし、
斬る目的で使い続けてくれるなら、全てを切り裂く刃になる。
あとはあまり関係ないけど、人の体でそのまま動けたりとかできるくらいかな」
「・・・？　動けるところに利点をあまり感じないような・・・」
その明の一言に、グラは頬を膨らませると、
「そんなことないよ。私の説明するとき、私本人が説明したほうがわかりやすいもん」
という。
「それもそうかも。うん、それなら「どうかした？さっきから一人で話してるみたいだけど」」
買ってもいいかも、というところで、お姉ちゃんが声をかけてくる。
そういえば、グラの姿ってほかの人から見えないんだった・・・！
「あ、アハハ、なんでもないよ。それよりお姉ちゃん！私この剣がほしい！」
こんな風に強引にそらすしかないけど、お姉ちゃんが不思議そうにしながらも、
「そっか、ならこれを買おうか・・・ところでこれいくらだ？」
といいながら、近くに貼ってあった紙を見に行く。
よかった。ばれて？ない。いや、決して悪いことしてたわけではないけど！

「うん、これなら買えるね。水奈さん！この大剣買います！」
「うん、大きな声出さなくっていいからね？それじゃあ、これがグローブで、
こっちの大剣のほうは・・・今回は無料でいいよ。うん、整備にもお金かかるしね」
「え？いいんですか？これ結構いい武器ですよね？」
「むしろお金とったら殺されそう・・・いや、なんでもない。
うん、別にかまわないよ。これから先もこの店をご贔屓にってね」
そういうと、水奈さんはそのまま店の奥に行ってしまった。
「ふふふ、私が気に入った子なんだもの、そもそもこのお店は、
精霊が気に入ったら無料になるからね」
何てグラが言っていたが、聞こえないお姉ちゃんは首をかしげながら、
なぜ無料になったのかを考えていたのだった。

最弱は再びダンジョンへ（今回こそは！）

～ダンジョン　1F～

どうも、ナレッジです。

僕は今、明と一緒にダンジョンに潜っています。

ほかの二人は用事があるようなので、とりあえず二人で対処できるように、一体ずつ引き寄せて戦ってるのですが・・・

「これで五体目！」

明かりの武器の試し切りというか、火力が高すぎて、床とか壁がえぐれているのですが・・・

いや、どちらかというと振り下ろす力と、

あの武器の重量変化なる特殊効果が原因そうなんですけど。

「それはいいんだけど、魔石まで粉砕するのもこれで五回目だよ？」

「うぐっ」

うん、ついに灰が見えないからね。魔石はないから、二人そろって収入はないですよ。

・・・そろそろ僕もやらないとなぁ。

「あ、ゴブｒ「六体目！」はぁ」
発見した直後倒されると、僕が武器を試せないんだけど・・・
（，・ｗ・、）ションボリ
「今の顔なんですか？すごくかわいかったです！」
「いや、なんでもないから気にしないで。それと、次は僕に戦わせてくれるかな？」
「わかりました！」
そんな風に話していると、何やら奥から走ってくる音が聞こえる。
「なんだろ。すごいいやな予感がするんだけど」
私はそういいつつも、グローブから糸を取り出す。
それに従い、明も自身の武器であるグラを構える。
足音が近づいてくる。うっすらと姿が見えてきた。
「あれは・・・ゴブリンにコボルト？それに、あれの前を走っているのは・・・」
「人、ですね。しかし」
「うん、笑みを浮かべてる。それに、全力でこっちに向かってきてる」
一階層にいるゴブリンたちと、それをトレインしている二人の男の姿が見えた二人は、
そのまま足元に糸を張り、こちらに来るために時間を稼ぎつつ、

それ以外の場所にもいくつかの罠を張る。
そうこうしているうちに、その姿がはっきりとわかるようになった。
そして、男二人はナレッジたちのことを確認すると、
「ギャハハ！獲物がいたぞ！おい相棒！あいつらに押し付けるぞ！」
「おうともさ！後で死体から装備だけは拝借にし戻らねえとなぁ！」
などと笑いながら言う。
ちなみに罠は見えていない。
結論から言うと、
「「ぐわっ」」
二人そろって盛大に転ぶのだった。
「なっ、やめっ、てめえらか！こんなところｎ」グチャ
「明、行こう」
「うん、そうだね」
ゴブリンたちに囲まれ、一瞬にして見えなくなった男たちの声を無視し、
そのまま二人は地上に戻るのだった。
そうして、二人の二回目のダンジョンは終わったのである。
「あ、結局モンスターにたいして攻撃的な意味で使ってないや」

「あの二人組もある意味モンスターって言えるから、妨害面では平気・・・かも」

そんな会話があったらしい。

というか収入ゼロじゃない？（すみません私が砕きました）

～ロキファミリア　ナレッジの部屋～

どうも、ナレッジです。僕は今・・・

「今日の反省会を始めます！具体的に言うと収入がなかったことについて」

明と一緒に今日の反省しています。

「威力が大きかったというのが原因だと思います」

「うん、下のほうに行くまで重力操作はしないでいいと思うよ？持ちやすい重さにしておけばね」

降り下ろす速度に唐突に重量がたさせれいるのだ。

そう考えると腕とか折れてもおかしくないよね？冒険者って頑丈なんだなー。

って、そうではなく、

「まぁ、武器の試し切りみたいのは出来たんだし、それだけでも良かったと思わないとだね」

僕はできてないけど、と、心の中で付け加える。

「ほかに反省点は・・・とくにないか」
嘘ですほんとはあります。あとでこっそりダンジョンいかなきゃ（死なない程度に）
「ですね。でも、次に今日みたいなことがあった時に対策とかしなくっていいんですか？」
今日みたいなことというのは、
ほかのパーティーがモンスターを押し付けようとしたときのことだろうが、
それに関していうのであれば、
「対策の仕様がないんだよなぁ」
この一言に尽きる。
今回の場合は、相手に悪意があると言葉の端々から感じ取れたため、
あのような手段をとったが、
場合によっては仕方なく押し付けなければいけない場合が存在してしまう。
それに、上位の冒険者にあんな手は通じないと思うため、
糸の強度的にも、おそらく1、2のレベルの相手が限界だろうからである。
たぶんそれ以上は糸が切れるか、もしくは抜けてしまうだろう。
モンスター相手にもこれは言える。
ゴブリンやコボルト、それも、1～5階までが限界だろうと自分の中で考える。

「まぁ、相手の状況とこちらの状況を考えたうえで、
協力できるなら協力して倒すのがベストかなぁ・・・」
「相手が明らかに悪意がある場合はどうしましょう?」
「うむむ、糸を編んで、目の細かい網みたいのを前もって作っておいて、
それを設置してみるとか?でも、それだと相手にばれちゃうかな?」
二人そろって首をかしげる。なかなかいい案は思いつかない。
「いっそのこと、何本か触れたら切れるようなものを作ってもらおうかな?
ためすのだったらファミリアの予備の防具を使ってみれば多少わかると思うし」
「でもそれって、かなり高くなるんじゃないですか?」
「そこなんだよなぁ。水奈さんに相談してみないといけないかぁ」
もうそろそろお昼の時間だ。食べ終わったら、水奈さんの工房に行ってみることにしよう。

相談と契約（僕の仲間はみんな似たような身長になるらしいです）

～水奈の工房～

どうも、ナレッジです。僕は今・・・

「で、私の所に来たと」

水奈さんに相談しに来てます。

「しかし、糸を切断しやすくする、ねぇ・・・

できないことはないんだけど、ちょっと時間がかかるかなぁ。

その間は、糸を使い捨てにする代わりに斬ることのできる技を教えるよ。

こっちに来てくれるかな？」

水奈さんはそこまで言うと、立ち上がり、店の外に出ていく。

僕があわてて外に出ると、水奈さんはすぐ横で鉄の塊を動かしていた。

「君は結構筋がいいらしいからねぇ。これくらいならすぐに斬れるよ」

「つまり僕にこの鉄の塊を斬れと、糸だけで」

「うん！とりあえず見本見せるから、少し待っててね？」

そういうと、水奈は店の中に入っていき、すぐに出てくる。
その手にはナレッジの武器とよく似たものがつけられていた。
「あの、それはなんですか？」
明が水奈に対してそう問いかける。
「ん？あぁ、これは、そのドレスグローブ、チキのもとになったやつだよ。
名前はレイカっていうんだ。ちなみに名前のもとはレプリカの最初と最後をとって、
すこし言いにくいからいをつけただけっていう、われながらひどい名づけだったね！」
そんな風に楽しそうに言う水奈に抗議するように、グローブから糸が出てくると、
丸まり、そのままおでこのあたりにまるででこピンするように打撃を与える。
水奈は苦笑いを浮かべながら鉄の塊のほうを向くと、
「まぁ、とりあえず見ててよ。
あ、危ないだろうからちょっと後ろのほうに行っておいてね」
といって、糸を少し取り出すと、そのまま勢いよく鉄の塊へ腕を振るう。
その腕の動きに従うように、糸も伸びながら鉄の塊に向け、そのまま横を通り過ぎ、
少し後ろにまわったところで、水奈が鉄の塊のほうに体を少し移動させた直後、
腕を引く。

すると、すごい勢いで糸がこちらに戻ってくるが、水奈は途中で糸を切り離す。
「レイカ」
水奈が小さな声でそうつぶやくと、糸が勢いそのままに鉄の塊のほうへ逸れ、
鉄の塊を二つに切り裂いた。
って、
「ちょっとまってください。
今の不自然な軌道は何ですか?あれ、技術だけでは無理だと思うのですが」
ただ引き戻したものが、あそこまできれいに二つの斬るとは思えない。
そう思いながら聞くと、水奈は笑みを浮かべながら、
「もちろん、あれにはとある存在の協力が必要だよ?
でも、君が知らないだけで、君はもうその子の力を使っているし、
その子も君のことを少なからず認めている。
後は君が、それを自覚し、その子と契約すれば、
さっきみたいなこともできるようになるさ」
といって、ナレッジの額のあたりに手を置くと、
「まぁ、一回私の子とあってくるといい。
なに、ちょっと会う時期が早くなっただけさ。

『眠れ、あの子たちと会うために　ガイドスリープ』

直後、強烈な眠気を感じたと同時に、ナレッジの意識は途切れたのだった。

～ナレッジの夢の中～

目を開くと、そこには草原が見える。かなり遠くには森が見えた。

そして、そんな空間の中に、二つ、

いや、小物も含めれば八つほど違和感のある物が見える。

白い丸型のテーブルとその近くにおいてある二つの椅子。

紅茶のポットにカップが二つ、カップの下に小さな皿がそれぞれに一つおいてある。

ふと、その椅子の上に一人の少女が座った。

身長はおそらく１２０ｃｍよりちょっと高い程度だと思う。

灰色の髪のポニーテールが見える。リボンやひもなどが見えないことから、

おそらく髪の毛とほぼ完全に同色なのだろう。

瞳の色は・・・灰色に見えなくもないが、どちらかというと銀であろう。

全てを見透かすような、綺麗な瞳をしている少女を、

ナレッジはしばらくの間見つめる。

「・・・座らないの？」

少女がそう問いかけてくる。まるで鈴が鳴るようなきれいな声だった。

その声を聴き、ナレッジはハッとすると、
「えっと、それじゃあお邪魔します」
と言って、椅子に腰を下ろす。
「そんな遠慮しないでいいのに。私のマスターは不思議な人ね」
ん？え？
「マスター？いったいどういうこと？」
本当に何のことだかわからないといった様子の僕をみて、
彼女はため息をつく。
「私の製作者に聞いていないのかしら？まあ、あの人のことだから、
ロクに説明もせずにこちらに送り込んだのでしょうけど」
では改めて、と、彼女はそういいながらこちらのことを見てくる。
「岩鋼水奈製作ナンバー5、ドレスグローブに憑いている精霊のチキよ。
ナンバー4のレイカとは姉妹関係にあるわ」
と、自己紹介をしてくる。
「あ、えっと、知ってるかもしれませんが、ナレッジです」
それに対して、ナレッジも自己紹介をする。
「うん知ってる。まあそれは置いておくとして、

今からマスターには私と契約してもらうんだけど、
その前に軽く質問させてもらうわ」
その言葉に対して、ナレッジが反応するよりも早く、チキはナレッジを指さすと、
「まず一つ目、あなたにとってファミリアとはなに？
二つ目は、あなたはナンバー6の大剣グラの所持者である少女のことをどう思ってる？
そして三つ目は・・・あなたにとって私という存在はなんなのかしら？」
と言ってくる。それを聞いて、ナレッジは数秒考えると、
「まず一つ目だけれど、家族だよ。血がつながっていないけれど、大切な家族だ。
彼らのためなら死んでも構わない。
二つ目は大切な子だよ。
最初に助けたってだけじゃなくて、何かといって助けてくれる、
僕を支えてくれる、大切な家族の一人だ。
きっと、これからも支えてくれる大切な子だ。
三つ目は相棒だ。パートナー、自分の半身といってもいい。
君という存在がなければ、僕は前にダンジョンに潜ったときに、
あの二人のトレインしていたゴブリンに殺されていたのかもしれない。

こんな短時間で思いついたような感想だけど、だからこそ本心なんだと思う」
それでいいかな？といいながら、ナレッジは小さく笑みを浮かべる。
それを聞いて、チキはほっとしたような表情をした後、再び真面目な表情を作り、
「よかった。じゃあ最後。・・・君は、いったいどこの世界の人なんだい？」
と聞いてくる。
その言葉に、ナレッジは心臓のあたりを締め付けられるような感覚に陥る。
しかし、それも一瞬のもので、すぐに、
「君は何でそんな風に思ったの？」
と尋ねる。当然のように、若干の警戒心を入れつつであるが。
そんなナレッジに対して、チキはニコニコと笑みを浮かべながら、
「そんなも見ればわかるって。この世界の人とはどこか気配が違うもん」
という。
当然、馬鹿正直に話すような内容でもないため、どう説明すべきか悩んでいたのだが、
そんな時、突然空から一人の少女が落ちてくる。
「ちょ、オリジナルめ！なんてところに転移させてくれるんだ！」
その声は、ナレッジにとっては久しぶりに聞く恩神の声に似ていた。
「えぇっと、あなたは誰なのかな？」

突然の襲来に、チキは若干引きながらそう聞く。
「ふっふっふ、その質問の答えはとても簡単さ！
ナレッジ君を転生させた神様だよ！絆って呼んでね♪
・・・似合ってないなぁ。うん、♪はこれから先出さないようにしよう」
テンションの差についていけず、二人は少しポカンとしていたが、
チキより早く元の状態に戻ったナレッジが、
「転生の事って話していいものなのですか？」
と訪ねる。
そんなナレッジの質問に対して、絆は楽しそうな笑みを浮かべながら、
「そんなわけないじゃん。本来なら話したことがばれた時点で殺されるさ」
と、思いっきり爆弾を叩き込んだ。ナレッジは顔をひきつらせると、
「じゃあなんで唐突にそれを言おうと思ったんですか!?」
大きな声でそういう。当然の反応であろう。しかしそれに対して絆は、
「だって仕方ないじゃん？相棒だよなんていっておきながら嘘ついてますは、
さすがにないでしょう？それに、この空間からでるためには、
その子が満足いく答えを提示しなければならないからね」
と、真面目な顔でそう答える。

「まぁはっきり言っちゃうなら、この子は異世界から転生してきた転生者だよ。
もっとも、転生特典をいらない子扱いされたあげく、
でもせっかくだから、
って私と補助のもう一人の名前を聞くとかいうのに特典使っちゃってねぇ。
ほんと、それがなければもう少しまともなステータスだったと思うんだけどなぁ」
絆が苦笑いを浮かべながらそういったところで、チキは納得したような顔をしながら、
「だからマスターはこんなへんちくりんなステータスしてるんですね。納得ですよ」
という。ナレッジの心に５０のダメージ！
「人並みに鍛えれば筋肉はつくから、
ステータスは上がらないでも少しは今よりましになりそうではあるけどね」
「そうなんですか？」
「当然。ていうか、君の場合は、
その体で活動できる最低限くらいしか元の身体能力ないからねぇ」
「なんでさ!?」
当然のように絆のいたずらである。
もっとも、死にそうになっていたらドールが助けに入る手はずではあるが。

「まぁそういうことで、彼は転生者だよ。
っと、さっそくオリジナルのほうになんかゼ・・・ゼウス？
とかいうのがきたっぽいから、
そろそろ私は戻るね。じゃあねぇ～」
まったく、自分の担当世界の外でくらい遊んでいいじゃないか、
と、小さな声で呟きながら彼女の姿が消えていった。
「・・・えぇっと、とりあえずこれで質問は終わりかな？」
「え、えぇ、終わりよ。それじゃあ外の世界に送るわね」
何ともしまらないような雰囲気とともに、ナレッジの意識は再び途切れるのであった。

初めてのボッチダンジョン(ええ、もちろん死に掛けますとも！)

～ダンジョン　F1～

どうも、ナレッジです。あの後、チキと契約したことを話したら、
水奈さんに一人でダンジョンに叩き込まれました。
明はついて来ようとしてたのですが、レベル差の前にはスキルとか関係なかったらしく、
水奈さんに威嚇しながら、こちらを涙目で見ていました。
さて、そんな僕ですが、今どうしているのかというと、
「死ぬ！さすがに死んじゃう！ゴブリン一体どころか何でこんなに群れてかかってくるのさ！」
十体ほどのゴブリンとデスレースを繰り広げています。
こっちに来てから落ちていたスタミナが原因でとても息が苦しいのですが、
そんなことも言ってられません。
『グギャギャ』

なんかだんだん声が近づいてきているのですが、気のせいだと思いたい。
あれ？そういえば僕、最初以降ステータス更新受けてないよね？
これ、経験値そのままに死ぬ羽目になるってことじゃ・・・
「あぁもう！・えぇっと確か、『僕の魔力は全てを貫く糸となった　魔糸（まし）！」
それはさすがに許せん！って、そういえば僕の魔力の表示って０だった気がするんだけど・・・
「一応出た！・けど、一瞬ですごくめまいがするってことは、これ以上は危ないかなぁ・・」
とりあえず出すことに成功した糸を、体を回しながら腕を振るうことで相手向けて振り回す。
『グギャ!?』
突然のことに驚いたからなのか、防ぐこともできなかったゴブリンの首が綺麗に跳んでいく。
再び走り出したナレッジがちらりと後ろを見ると、
そこには一匹のゴブリンが仲間の魔石を食べようとしているところであった。
（まずい！）
ナレッジは急いで体の向きを変え、再び首のあたりに向けて腕を振るう。
が、目測を間違えたのであろう、首にはあと半歩分届かず、ゴブリンが一つ目の魔石

を食べてしまった。
しかも最悪なことに、魔糸の効果が切れてしまい、そのまま糸が霧散してしまう。
こうなるともう攻撃手段がないに等しい。
確かに糸はある。鉄製の糸なのだが、魔糸でできていたことがそのまま行えるかといえば、
それは否である。装甲無視の一撃が出せる魔糸と違い、鉄の糸では即死させられるかが微妙であり、
実は補充もそこそこなのである。なのでもっと踏み込まなければならない。
ナイフがある。しかし前回潜ったときのことを思い出してほしい。
そう、はじかれとるやん、使えないやん。つまりそういうことである。
とまあそんなことを考えている間にも、ゴブリンがすべての魔石を食いきってしまったわけであるが、
本人からしてみれば、何でそんなこと考えてるうちに逃げなかったんだよ、
といいたいものである。もちろん、逃げれたら逃げている。
しかしここで問題が発生してしまった。
実は向こうの壁のほうからも何やら音を立てながらモンスターを生み出している最中なのである。

その少し奥には二体のゴブリンの姿も見える。
後方には多数のゴブリン、前方には強化されたゴブリン。
しかも実はここは後ろに行くと下に行く階段があるのだ。
何が言いたいかというと・・・
積みました。これは無理です。と、あきらめるのも嫌なので、とりあえず前方の、注意してれば動作も見切れそうなゴブリンの強化種に向けて走ることにする。
そうして、ゴブリンの攻撃に注意しながらできるだけ離れるように壁際を走っていると、
ミシリ
ゴブリンの拳が腹部に突き刺さる。
「え？」
直後、背後に衝撃が走る。どうやら壁に叩きつけられたらしい。
せき込むと、口から血が出てくる。
（いくら強化されたからと言って、この速度はおかしいだろう・・・!?）
あまりの衝撃に、意識が薄れていく。
ふと、あったことのない二人の女性の顔が浮かんでくる。
誰なのか、何者なのかはいまいちわからなかったが、ふと、二つの名前と、

謎の詠唱が頭の中に出てくる。

「覚醒の・・・時は来た。アリス・・・クロワッサン、今、再び僕とともに」

光とともに現れた二人を見るのと同時に、ナレッジは意識を落とすのであった。

二人に歌う、命の歌を（そんな格好いいものじゃないですよ）

～ダンジョン～

視界が赤い、と、どうも、ナレッジです。ついさっき目が覚めましたが、

いやぁ、本当に、この二人はどうして、僕のことを助けてくれたのでしょうか。

僕、この二人と会ったことないはずなのに、どこか懐かしく感じるんですよね。

そんなこんなで、周りを見渡してから二人のほうを見て首をかしげていると、

「国王のあなたがそんな風にぼへっとしてたら、私達のアリス王国が壊されてしまうかもしれないわ。

シャキッとしなさい」

「旦那様？元騎士ともあろうあなたがなぜそこで倒れて・・・何やら性別変わったいませんか？」

「本当ね。詳しく説明してほしいけれど、とりあえずはあれを処理しないことには始まらないわね」

そういって、二人は体ごと下に行く階段のある通路のほうに顔を向ける。

そこには、ゴブリンのような何かがいた。
おそらくゴブリンの強化種なのであろう。しかし、もはや面影などかけらも残っていない。
身長は元よりも二倍ほどになっており、見た目もどちらかというと人に近くなっている気がする。
しかし、モンスターであるのは明らかである。
理由は、心臓のあたりに淡く光る魔石が見える。
「あれ、奥にあった階段みたいな所から上がってきたのよ」
金髪の女性がそういいながら警戒している。
「あと、旦那さまとかいう言葉の意味も後で確認するから」
「それをいったら私もあなたに尋ねたいことがあります」
「え、えぇっと、とりあえずあれを倒さないといけないから、喧嘩は後でしてくれるとうれしいなぁって」
とりあえず、気を失う前の記憶を頼りに、二人の名前を思い出す。
「アリス」
「なにかしら？」
金髪の女性のほうがアリスというらしい。それならば、

「クロワッサン」
「なんでしょうか？」
やはり、銀髪の女性がクロワッサンでいいらしい。
「あれの弱点は心臓部の光っている部分、二人の使う武器は・・・」
「「レイピアね（です）」」
二人とも武器被りしているが、相手が素手な以上、
武器を持っている分こちらの方がリーチ的に有利ともいえる。
しかし、相手の方の情報が不足している。
モンスターながら知性があるのかがわからない、身体能力も不明である。
すると、モンスターが動いた。僕は見えなかったが、どうやら僕に向けて攻撃を仕掛けたらしい。
それが理由なのか、アリスとクロワッサンが敵の攻撃を防ぐようにレイピアで攻撃を仕掛ける。
ザシュ
そんな音とともに、二人のレイピアが心臓上と下を穿つ。
しかし、二人が引き抜いたレイピアを手元に戻した直後、
今度はモンスターが二人に攻撃を仕掛ける。

とはいっても、仕掛けられるのは一人ずつなため、先にアリスを狙うことにしたらしい。
アリスのレイピアの攻撃を横から攻撃を当てることで弾いたモンスターは、
しゃがんで背後のクロワッサンの攻撃をかわした後、アリスに足払いをかける。
アリスは転びそうになるのをうまく受け身を取り最低限の動きで立ち上がった後、
再び攻撃を仕掛ける。
しかしその攻撃はある程度予測していたのであろう。
モンスターはそれを手でつかんだ後、思い切り砕こうと力を入れ始める。
クロワッサンが横から攻撃を仕掛けたことで、なんとか武器の破損は回避できたのだが、
おそらく次一回攻撃したら砕けるだろう。そう思えるほどにひびが全体に入っている。
「アリス！いったんさがっ」
直後、アリスとクロワッサンが吹き飛ぶ。
「て、え？」
まったくもって訳が分からない。モンスターがあの一瞬でそれほど強化されてとも思えない。

しかしわかるのは、僕を守ってくれていた二人が血を流しているということと、
その原因が目の前のあれなことくらいだろう。
「魔糸！」
衝撃を吸収させるために、魔糸を編み、ロープを作り、それで網を作り出す。
イメージするだけでできる分、かなり楽な動作である。
それでも、多少勢いを抑える程度であり、完全に勢いを殺すには至らない。
魔力が切れかける。意識が遠のいていくのがわかる。
（ははっ、これじゃあ死んでも死にきれないや）
モンスターの拳が振り下ろされる。
おそらく回避は不可能だろうが、しかしそれでもあきらめられない。
咄嗟的に体が動く。拳を最低限の動きで回避すると、そのまま大きく後ろに跳ぶ。
ふと、何かの歌詞が頭をよぎる。口がひとりでに動く気がする。
『歌え、歌え、声高らかに、命の歌を、皆の心に響くように、
鼓舞するように、立ち上がれるように、
声高らかに、時に静かに、されど皆の心に響くように！
綴りましょうこの想い、現しましょうこの歌に、夢と希望に満ちたこの世界で、
きっとこれからも生きてゆく。命の歌』

二人の傷が塞がれていく。とりあえずこれで出血多量で死ぬことはないだろう。
しかし問題がある。そう、魔糸が使えない。魔力がもうないもの、当然だよね。
意識を強く持たねば、すぐにでも地面に倒れてしまうだろう。
モンスターが再び拳を振り下ろす。直後、
「お姉ちゃんをそれ以上いじめるな！」
「この子はチキの最初で最後の主人なのさ。私の娘を泣かせようとするなんていい度胸だ」
モンスターは突然出てきた明と水奈によって倒されたのであった。
「はは、来るのが遅いって・・・どうせ二人とも見てたんでしょ？」
「よくわかったわね。ええ、その通りよ。私たちが来たからには問題ないわ。
だから、安心して眠りなさいな」
水奈さんがそういうとともに、安心したのか、だんだんと眠気が襲ってくる。
「じゃあ・・・そうさせて・・・もらう、ね」
そうして、ナレッジは眠りについたのだった。

目が覚めたら性別も見た目も変わっていました（なんでさ）

～ロキファミリア　ナレッジの部屋～

「うぅむ」

どうも、ナレッジです。目が覚めたら不思議と少し視界が高かったので、とても疑問になったのですが、とりあえず自分の姿確認したら何となく理解しました。

男になっとるやん、なんでさ。ていうか、服が女物しかないんだけど・・・

いや、比較的体格も変わってないし、髪の毛の長さもそのままだが、

僕にはわかる。だって自分の体だもの。触って確認したから確定だね。

服は最悪誰かから・・・いや、案外着てもばれないかな？

「ナレッジた～ん、起きたんかぁって、へっ？」

ロキがとても楽しそうに部屋に入ってくる。

もっとも、こちらを見て固まったのだが。

「えぇっと、すみませんロキ様、とりあえずステータス更新すれば何かわかると・・・

思いたいので、はい。できることならお願いします」
うん、声も変わってない。でもちょっと待って!?なんで身長と体の一部以外変化無いの!?
でもとりあえずステータスだけでも確認しておこう。
「え?あっ、はい」
なぜだろう。ロキの反応がどこかおかしいような・・・
いや、眷属の性別が変わってたらそんなものなのだろうか?
しかしなぜだろう。頬を赤くするのは勘弁してほしいのだが。
ハッ、まさか風邪か!?神も風邪をひくのか!?
「体調が悪いのでしたら、ステータス更新は後でいいので、
少し休んできてはいかがでしょうか?」
「い、いやっ、そんなんじゃないから大丈夫や!それよりもステータスの更新をするで!」
うぅむ、それならいいのだが・・・
とりあえず上を脱いでベットに横になる。
ロキは僕の上にまたがると、そのまま血を僕の背中に落とす。
「お、出たでって、またなんか変なのが増えとるやないか・・・」

力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０　↓　Ｇ　２００
敏捷：Ｉ０　↓　Ｅ　４５０
魔力：Ｉ０　↓　Ｆ　３２５

【スキル】

【絆の加護】
死んだ時、その魂は絆の元へ帰る。
その時、転生、もしくは、この世界で出会った友と共に世界を渡ることができる。
絆を繋げば繋ぐほど、一部のステータスに大幅なプラス補正

【神軍師のなりそこない】
力、耐久が一切増えない代わりに、器用、俊敏、魔力にプラス補正

【特殊防御陣】
パーティー全体の耐久を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。

【特殊攻撃陣】

パーティー全体の力、魔力を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。
【戦略者】
パーティー全体のステータスを1．5倍する。魔力を五×人数分消費する（常に発動。
自分には効果がでない
【性別変化】
自身の性別を変化させる。任意で変更可
【魔法】
【その護りは味方の為に】
自分以外のパーティー全体に五回分の攻撃の無力化
代償として、自身のステータスが一週間一になる
【今まで救えなかった全ての者へ】
一回のみ、死んだ者を蘇生、全ての傷を治す。
代償として、体のどこかが使えなくなっていく。
自身に使うことは出来ない
【僕は最弱、故に最強】

自分以外のパーティー全体の魔法攻撃力（回復力も含む）を五乗
代償として、一部の臓器が活動を停止する
【あの愛しき女神に捧ぐ】
自身を殺す代わりに、敵対者全てを塵に返す。魂は絆の元へ帰っていく。
【魔糸】
精霊の宿った特定の武器から魔力で作られた糸を出す魔法。
詠唱
『僕の魔力は全てを貫く糸となった』
『僕の魔力は動きを縛る強固な糸となる』
【魔布（まふ）】
魔糸によって作られたものを布にする。
魔力の最大値を犠牲にすると実体化し、永久的に消滅しないものとなる。
『全てを包め、全てのものを逃さぬように。魔布』
【命の歌】
仲間の傷、病気などの状態異常、あざなどを治す。
詠唱
『歌え、歌え、声高らかに、命の歌を、皆の心に響くように、

鼓舞するように、立ち上がれるように、
声高らかに、時に静かに、されど皆の心に響くように！
綴りましょうこの想い、現しましょうこの歌に、夢と希望に満ちたこの世界で、
きっとこれからも生きてゆく。命の歌』
詠唱
その存在を一時的に自身に付与することでステータスが一時上昇
自身の前世に深くかかわりのある人物、武器、防具を召喚する。
【覚醒の時は来た】
『覚醒の時は来た。（呼び出す者の名前）、今再び僕とともに』
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
とりあえず性別が変化できるようになったらしい。どうしてこんなスキルが出たし・・・
そういえば、いままでの生活がどうとかあった気がするなぁ・・・
うん、だとしたら絶対それだわ。
あの二人の女の人たちが言っていた性別も男だったっぽいし、
僕の前世は男だし。ていうかなんで僕を女にしたんだろう・・・
まあいいや、とりあえず今はそれはそこまで重要じゃない。

好きなタイミングで変えられるらしいし、とりあえず一回女の方の姿に戻ろう。
そうしないと服が買えないから、ほんとに。
「あ、身長縮んだ」
しばらくの間はこれで活動をしよう。
服のサイズもこれでぴったりだ。
「上昇値がトータル９７５って、いったいどんなことしてんや・・・」
ロキが何かつぶやいてるが、聞いてないことにしよう。
「そういえば、アリスとクロワッサンはどこにいますか？」
「あぁ、あの金髪と銀髪の子か？あの二人なら食堂で趣味人と話しとるで」
とりあえず、食堂に行くことにしよう。
「そや、後でダンジョンで何があったか教えてほしいんやけど、ええか？」
「それは無理ですね、黙秘権です。家族であろうと話せないことはあります」
ロキにはそう答え、そのまま食堂に向かって走っていく。
「それは困るんやけどなぁ・・・」
ロキがそんな風に言っていた気がしたが、聞こえないふりをすることにした。

事情説明（転生について話す許可が出ました。一部の人だけだけど）

～ロキファミリア　食堂～

どうも、ナレッジです。僕は今、食堂にて・・・

「「何で性別が変わっているのか、説明してもらえるの（ですわ）よね？」」

尋問じみたものを受けています。

とりあえず、

性別が変わったことについてはステータスを見せることで納得してもらおう。

・・・あれ？見せても読めないよねこれ。

転生したことについては話せないしなぁ・・・

「えぇっと、目が覚めたらこうなっていたんだよ」

こういうしかない。悪いけれど、ステータスのことについては説明しずらいし。

「・・・そういうことにしておいてあげるわ。

でも！本当のことが言えるようになったらちゃんとに言うこと」

嘘ついてることがばれてますわぁ・・・というか、何でばれた？

「貴方が嘘をつく時、かならず少しだけ目に動揺が見えるのよ。
これでも何十年も二人で国を支えていたのだから、それくらい理解しているわよ」
おっと、心も読めるみたいだぞぅ。
しかし、うぅむ、国を支えていたってどういう・・・？
だめだ、全然思い出せない。
そういえば、助けてもらった時に、元騎士とか国王とか言われてたような・・・
「もしかして、記憶がないのでしょうか。
それに、どうやらこの世界も私たちのいた世界とは違うようですからね」
「ということは、また転生したのかしらね？
だとしたら本当に、神に愛されすぎじゃないかしらね？」
・・・おや？なぜ転生してることを知って・・・おいちょっとストップ、またってなに!?
「二人とも」
「なにかしら？」
「なんでしょうか？」
二人はナレッジの方を向きながらそういう。
できれば昔いったことがあるとかいう予想はあってないでいいと思う。

「なぜ転生のことを知っているんでしょうか・・・？
あとまたってなに？僕そんなに転生してるの？」
「結婚した後に聞いたのよ。転生のことを詳しく知ったのは死んだあとね」
「死んだ後にあなたを転生させたという神が目の前にいたので、
瀕死になるまで叩きのめして全部説明させたということがありましたわ」
予想はあっているらしい。昔はしゃべってよかったんだね。
でも、とりあえず言いたいことができた。
「アリス、色々って怖いんだけど・・・
てかクロワッサンもなにやってるのさ・・・」
そう言いながら、思わず頬を引き攣らせたのは悪くないと思う。
「それとまたっていうのは、私たちが別々の世界出身で、
前もってある程度の事情を知っていたからね」
うん、とりあえずなんとなくわかった。
知っていたのは、恐らく神にでも聞いたのだろう。
「なるほどね。ちなみに、二人はこの後どうする予定なの？」
一応これについても聞いておかねばならない。
返答次第では、色々と行動しなければならないからだ。

「それについては、さきほど貴方の主神を名乗る人物と話して、
二人ともこのファミリアに加入することにしたわ」
「そっか、それなら、一緒に潜るのかな？」
その場合は、他のメンバーにも話しておかなければならないだろう。
「ちなみに、他のメンバーには言っておいたわ。
あの人たちにプラスして、私たちが入る形ね」
「最終的には、昔のように最前線で指揮を執っていただけると嬉しいですわ」
・・・昔の僕って色々とどうなのさ・・・え？最前線で指揮を執ってる？
それって戦いながらってことだよね？
昔の僕ってきちんと剣振れたんだなぁ！
「って、反応するところがそこですの!?」
自然と思考を読んでくるクロワッサンであるが、それは今は置いておくとして、
とりあえず理由を言う。
「え？うん、だって僕、今の状態だとナイフすらまともに使えないもん」
「「え、」」
二人はそんな声とともに口をあんぐりとあける。
「お二人とも、女性の出すような声ではないです。

あと表情ももう少しきちんとした方がいいと思いますよ?」
明がそう指摘することで、二人はとりあえず表情をもとの状態に戻す。
ちなみに水奈さんは僕の隣で二人のことを笑顔で見ている。
その水奈さんが、
「ちなみに、性別が変わったってどういうことなのかな?
あと転生とかいうのにも説明お願いね♪」
という・・・あっ。二人にも説明しないといけない流れだこれ。
(どうしましょう絆様、もう言ってもよいものなのでしょうか)
「問題なくなったからいいよ♪もっとも、ここにいる人だけだけどね」
後ろから声が聞こえる。
それに驚きながら後ろの方を向くと、そこには絆がいた。
ガタガタッ
僕以外の全員が驚きながら絆のほうを見る。絆はニコニコと笑みを浮かべている。
「・・・あなたは誰ですか?」
明が絆にそう尋ねる。まぁ、当然の反応だろう。
「私?私は絆、ナレッジ君をこの世界に送った本人で、一応、
分類的に言うと神様やってます。よろしくね〜」

（唐突すぎて色々と整理が・・・これって話していいってことだよね？
だれか。これについてきちんと説明出来そうなドールさんも連れてきて・・・）
少し遠い眼をしながらそんなことを考えていると、
絆の背後からドールが現れる。
「おい絆。仕事終わりきってないんだから、説明が終わったなら帰るぞ」
「わかってるって。それじゃあまたね～」
そういって、絆が姿を消す。ドールはそれを確認すると、ナレッジに一枚の紙を渡す。
「これ、あとで説明するであろう時に困るだろうから、とりあえず持っておけ」
そういうと、ドールも風のように姿を消す。
とりあえず、許可が出た（ということにする）ので、説明しよう。
「ええっと、今来たのは、僕を転生させてくれた神様なんだよ」
「あの人が・・・」
明が小さな声でそうつぶやく。
「うん、ちなみに、僕が死んだ理由を聞いたけど、本当に聞きたいって人だけに話すよ」
僕がそういうと、そこにいた全員が僕のことを見てくる。
どうやら、全員が聞きたいらしい。
「わかった、話すよ。とはいっても、僕が知ってるのはほんの一部だけなんだけどね」

そうして、僕はそこにいた全員に僕の死んだ理由とその友人だったものについて話す。

〜説明中〜

所々わからない部分を、さきほどドールから渡された紙で補足しながら、明達に説明をし終える。

話しを聞いた全員の表情には、怒りのが見えていた。

とはいっても、なんとなくながらもその理由はわかる。

「まさか、その友人が貴方の父親に雇われた暗殺者だったとはね」

まさにその一言につきる。

僕もまさか、自分の父親が暗殺者雇ってまで僕を殺しに来るとは思わなかった。

というか、あの町じゃあ僕を殺しても隠蔽されるから、

別にわざわざそんなことする理由もないだろうに、

何て思ったりもするが、それは言わないでおこう。

「まあ、これで全部かな。とりあえずみんな理解できたってことでいいのかな?」

「「「はい（えぇ）」」」

「それと、一応言っておくけど、このことはほかの人には伝えないようにね?」

僕がそういうと、明が、

「わかってますよ!こんなこと言えるわけないじゃないですか!」
と言ってくる。とりあえず、これ以上説明することもないし、
この後は休憩もかねて解散にしようと思ったら、
「それじゃあ、この後は買い物に行くわよ。当然、ナレッジは参加だから」
と、アリスが言ってくる。
「え?ちょっ、え?」
「ちなみに拒否権はないわよ。私たちの服を選ぶためだから、
決して荷物持ちではないけれどね」
どうやら決定事項らしい。でも、僕も服を買いたいところだ。
なにせ、性別変わったら身長も増えるし、男性用の服も買わねばなるまい。
ワンピース着た男とかちょっと危ないだろうし（実は見た目があまり変わらない人）。
やはり、僕も買い物についていこう。服のセンスはないけれど、
なぜか他の三人もアリスと同じこと言い出しそうだし。
「わかったよ。それじゃあ行こうか。
服といえば、前偶然見かけたあそこってやってるのかな?」
この後の予定も決定したことだし、お金のほうは・・・
「そういえばさ」

「どうかしたのかしら？」
「・・・僕たちのパーティー、全然お金持ってないと思うんだけど、
買えるものあるの？」
「あっ」
どうやら明かりは気付いたらしい。そう、魔石なんて換金していないということ、
そして、魔石自体を持っていないという事に！
なんて、心の中で思っていると、水奈さんが一言。
「さっき倒したゴブリンの強化種と、足りない分は私が払うからいいわよ？」
その一言によって、とりあえずの資金があることが分かったのだった。
ところで、あのゴブリンの強化種の魔石っていくらくらいになったんだろう。

みんなで楽しくショッピング！　服編（予算は三十万くらいらしい）

～オラリオ　大通り～

どうも、ナレッジです。僕は今、服を見るために買い物に来ています。

予算はさっき水奈さんから聞いた限りでは三十万だそうだ。

ちなみに、目的地は、前に行ったことのある、ファンタジードレスショップです。

「お姉ちゃん、確かこの方向って・・・」

明が思い出したように僕に話しかけてくる。

「うん、もうそろそろつくはずだよ」

とりあえず、明にはこういえば、目的地もわかるだろう。

それはそうとして、何で水奈さんは不思議そうにしてるんだろう？

あの店を知らないのかな？

と言っている間に、目的の店であるファンタジードレスショップについた。

あ、水奈さんが驚いてる。この店、そんなにみんなに知られてないのかな？

そんなことを考えながらも、とりあえず店の中に入っていく。

「あら、いらっしゃい。それにしても、また来れるなんて運がいいわね。
それで、今度はどんなものをお求めですか？」
前に来た時と同じ女性がそういってくる。
「とりあえず全部見てみようと思います。他の皆もそれでいいかな？」
僕がそういいながら後ろを向くと、全員が頷く。
それを確認した僕は、他の皆が動き始めた時に、
周りには聞こえない声で女性に話しかける。
「ちなみに、ここって男性用の服ってありますか？」
ないのであれば他の場所も見て回らなければならない。
「もちろんありますよ？サイズなどに関しても、言ってくだされば調整します」
どうやらあるらしいので、他の皆とは別行動で見せてもらうことにした。
場所もどうやら店の二階にあるらしい。ていうか、二階なんてあったのかここ。
そんなことを考えつつ、二階に行った僕は、女性がいなくなったタイミングでスキルを使い、
自分の性別を変えてみる。
やはり身長が高くなっている。とはいっても、あまり変わらない気もするが。
服を見ていくと、本当にいろいろなものがあるのがわかる。

単純に布で作られたもの、所々金属の装飾がついているもの、
冬用なのか、もこもことした素材でできているものなどがある。
襦袢（じゅばん）などがあったことには驚いた。ここ、和服とかも扱ってたんだね・・・
とりあえず、あまり軽すぎず、かといって重くもなさそうで、動きやすそうなものを探す。
具体的に言うと、いま来ている服と同じか、それよりも少し重いくらいがいい。
というか、この服よりも重くしたい。この服って結構軽いから、
それよりも重くした方が筋肉付きそう。来てる気がしない軽さはまずいと思うよね。
そうなると、装飾品がついたのもいくつか買いたいところ・・・
ここら辺っていくらくらいなのかな？
そう思いながら、金額の書いてありそうなものを探していく。
・・・書かれてない。そういえば、前に来た時に、
値段はその時によって変わる、みたいなこと言ってたよね。
ということは、聞かなければならないのか・・・
とりあえず、気になったものを見ていこう。
色は・・・いっぱいありすぎじゃない？黒と白から選ぼう。
色別で置かれてるから、結構確認しやすい。

しかしこうしてみると、本当に同じものがないな。見事に全部ばらばらだ。
黒いマント・・・かっこいい。あ、コートもある。
ふむふむ、黒いマントなら汚れても目立たなそうだし、かなりしっかりしてるみたい。
サイズ的にも問題はなさそうだ。とりあえずこれは買いたいな。
あとは、とりあえず白い服も買っておこうかな？
でも、黒で統一させるのもあり・・・いや、それはそれとして、
黒マントとそれのシリーズは買いたいな。
手袋もあるけど、これに関してはチキがあるからいらないな。
でも、街中歩くときはあった方がいいのか・・・
他の人は知らないにしても、常に剣を抜きながら歩いているようなものだし。
それって、もれなく危険人物扱いされますよね。
よし、これも買っておこう。お金は水奈さん払いだけど。
それじゃあ、この黒い服一式と、それとは別に白い服も買っておこうかな？
う～む、白い服もまたいろいろとあるなぁ・・・
うん、これにしよう。灰色に近いズボンに、青系の色が混じっているコート、
その下には白い長袖の服。ズボンに巻き付いてる銀色に近い色の布？
も、いい感じである。いや、これ金属だわ。正確に言うなら金属糸で作られてるっぽ

い。
絶対これ高いでしょ。防御性能もかなり高そうだし。
とりあえず金額にもよるけどこれも買ってもらおうかな？
よし、そうと決まれば下に降りよう。と、スキルを使い性別を再び変更する。
「あら、やっと降りてきたのね」
アリスがそういいながらこちらを見てくる。その方向を見て、僕は思わず固まった。
「・・・えっと、その服はどうしたの？」
僕から漏れたのはそんな一言、普通に考えるならば、
試着か何かをしたのであろうことに気が付くが、
そんな思考が一時的にできなくなる程度には驚いている。
なぜか全員が着物を着ていたのだ。
明は黒に近い紫に星のように所々白い斑点があり、
満月を模したであろう白い大きな丸が目立つ着物を。
アリスはレモン色にトランプや紫色の猫の書かれている着物を。
クロワッサンは深縹（こきはなだ）の布地のみという落ち着いたものであるが、
よく見てみると魚のような柄がうっすらと見える着物を。
水奈は海の波を模したような柄をした着物を。

その全てが、それぞれのイメージにぴったりと重なり、
はっきり言ってしまえばとても魅力的に見える。
「どうしてって、試着させてもらったのよ」
そういいながら、アリスは僕の方を見ながら、
「それで、あなたはこの中で誰が一番にあってると思うかしら?」
と尋ねてくる。
「・・・え?それ、答えないとダメ・・・?」
この手の質問をされるのは困ってしまう。はっきり言ってしまうのならば、
誰がいいではなく、全員が自分に合っている服を着ているため、
全員にあっているというのが僕の解答なのだ。
「えぇ、答えてほしいわね」
アリスのその一言に、全員がこちらを見てくる。
ふと目をそらすと、店長である女性の姿が見えた。
先ほど案内したときは来ていなかったのに、
いつの間にかこちらも着物を着ている。
灰色の髪と銀色の目をした女性が着ている着物は、
柄が一切ないながらも、どこか惹かれるものがあった。

色は白、帯はみ空色という組み合わせ。布がかなり質の良いものなのか、
それとも着ている服に負けないほどに本人の存在感があるのか。
だが、そのどちらでもないんだと思う。
本人が自分に合うものを着て、それぞれがそれぞれを高め合っているからこそだと。
「え、ええっと、店長さんが一番似合ってるんじゃないかな～、なんて」
僕以外の全員が驚いたように目を丸くしている。
というか、あの女性が驚いたことに僕も驚いているのだが。
だって、このくらいのことなら驚かないかななんて思ってたし。
「まあ、みんなよくにあってると思うけどね。
それぞれの個性がよくわかるし、色もみんなのイメージに合ってると思うし」
「・・・なら、どうしてここの店長さんが一番って言ったんですか？」
明が私不機嫌ですと言わんがばかりのオーラを出しながら聞いてくる。
「うぅん、うまく説明しづらいんだけど、一番雰囲気にあっていたからかな？
こう、互いが互いを高め合っているというか、そんな感じだよ。
他の皆だと、どこか人の方が主張が大きく感じちゃったんだよね」
とりあえず、僕が言ったことに納得したのだろう。
明達は僕をジーっと見るだけで、それ以上は聞いてこなかった。

だがしかし、空気が重く感じる。
まあ、普通に考えるなら四人の中から選ぶべきものを、
店長なんて答えた時点で、この空気は約束された結末のようなものだろう。
だれか、この空気を何とかしてください。本当に。↑原因
「そう言えば、結局その服は買って行くのかしら?」
店長さんがそう聞いてくる。
そう言えば、服を買うのが目的だったね。うっかり忘れてたよ。
僕自身も服持ってるのにね。忘れるとか本当にどうなのさ・・・
「僕はそうですけど、他の皆は・・・その着物買っていくの?
というか、合計いくらくらいなのかな?これ」
「私たちはこれじゃなくて、普通の服を買いますよ?」
そういって、明たちはそれぞれ服を取り出す。とりあえず聞きたい。
「買うのが決まってるなら、何で着物を着てたんだろう・・・」
小さくつぶやいたので、他の人には聞こえなかったが、
とりあえずそのことがとても気になったのだった。
「あ、ちなみにうちの店、とある物を置いてみたのですが、
ぜひそちらも見ていってください。それと、服の方の代金は五万になります」

・・・あいかわらず安い値段設定ありがとうございます！

しかし、とある物ってなんだろう・・・？

みんなで楽しくショッピング！　髪飾り、装飾品編（引き続き、ファンタジードレスショップからお送りいたします）

〜ファンタジードレスショップ　店内〜

どうも、ナレッジです。服を買った後に、

店の一角へと案内された僕は今、みんなと一緒に髪飾りなどを見ています。

「試作品としておいてみたんですよ。感想さえいただければ、

皆様にお一つだけ無料でお渡しいたします。

感想とはいっても、簡単にこう思った程度のもので構いませんし、

こういったスペースがあって嬉しいなどでもいいですよ？

もっとも、同じことを何回も言われてしまってはあれなので、

できればその手のかぶりはない方がうれしいのですが」

女性がそういう。しかしやはり僕は思うのだ。

宝石とかかなり使ってて、果たして利益はあるのだろうか、と。

普通に考えればないけど、本人が直接手に入れて加工すれば、
まあかかる料金は少なくて済みそうではある。
「なにこれ、こんな金属初めて見た。銀に近い色をしているのに、
全く違う。それにこの宝石たちも、異常なまでに魔力がこもってる。
まるで、魔力を固めて石にしたような・・・魔石に近いけれど、どこか違う・・・
それに、色によって込められてる魔力も違うみたいだし・・・
こんなもの、いったいどこで手に入れたのかしら？
さっきの服も、一つ一つの素材が、かなり価値の高いものだったし、
全く知らないものが多かった。
そもそも、こんな店は前来た時なかったし・・・」ブツブツ
水奈さんが小さく何か言っているが、全く何を言っているのかわからないので、
とりあえず気にしないことにした。
それよりも、とりあえず一つ選ばせてもらおうと思い、
再び髪飾りなどを見ていく。
髪紐、簪、ヘアピン、リボン、ネックレス、指輪、腕輪、イヤリング、
うん、種類がかなりあるし、とりあえず気になったものを何個かとって、
その中から一つ選ぼうかな。

～考え中、しばらくお待ちください～
よし、これにしよう。他の皆も決まったみたいだし、そういえば、
この場所を作ったことに対して感想いうと無料になるんだっけ？
ちなみに、水奈さんに聞いたことだけど、
ここにある物全てが神の作ったものに限りなく近いらしい。
そんなものを作ることのできるこの店の店長は、いったい何者なのだろうか・・・
しかし、ある程度魔力がないと、一切操作できないうえに、
かなり使い辛くされているのが、ここにおいてある髪飾りなどらしい。
服のほうは、なんでもうちのファミリアの上位陣、
リヴェリアやフィンさんたちの着てるようなものと同じか、
それの数倍ほどのスペックらしい。
・・・前買ったワンピースもそうとか言わないよね？これ。
まあ、それのことは置いておこうかな。
ていうか、それは置いておくとしても、
「この手のスペース、専用の場所じゃなくて、服のイメージに合わせるように、
セットで置いておけばいいのに。服と同じ感じで」
ぼそりとそう呟く。店長さんはなるほど、というように頷く。

「そういう考えもありね。それで、貴方たちはほかにあるかしら？」
どうやら、あの小さな声を聞き取ったうえで、
感想として受け取ってくれたらしい。
そのあと、みんなで感想いってそれぞれ一つ、髪飾りとかもらった。
このあと、水奈さんが実験をするといって、ロキファミリアに帰ることになった。
「貴方ならばもしくは、と思い、この言葉を贈らせていただきます。
またのご来店をお待ちしております」
店のドアが閉じ終わる直前に、店長さんがそういったのが聞こえた。
それが不思議と耳に残ったのであった。

耐久実験（だからって何でメンバーがこんなに豪華なんですか）

～ロキファミリア　訓練場～

どうも、ナレッジです。僕は今、ロキファミリアの訓練場で、

「それで、この服の耐久度を確認するために、

思いっきり攻撃すればいいんだね？」

「魔法防御も試したい、なるほど、それで私たちが呼ばれたのか」

「それはいいんだけど、壊れても知らないよ？」

ロキファミリアの上位陣、フィンさん、リヴェリアさん、

ガレスさん、アイズさん、ティオネさん、ティオナさん、

ベートさん、レフィーヤさんと向かい合いながら、

先ほど買ってきた防具を着せた木人を設置しています。

あ、明にも手伝ってもらってますよ？僕一人では無理でしたし。

「そこらへんは大丈夫だともいますよ。この服に使ってる素材、

普通のものじゃないですし」

水奈さんがそういうと、一部の好戦的な人たちが楽しそうに、
リヴェリアさんが興味深そうに装備を見る。
あの、皆さん怖いんですが・・・
そんなこんなで、立て終わった木人から、僕と明が直後だった。
ガゴッ
そんな音とともに木人が吹き飛ぶ。
見てみると、どうやらフィンさんが槍で攻撃したらしい。
あぁ、せっかく買ってもらった服が・・・
というか、破けたりしたら修理できるのかな？
素材特殊だってってたよね？たしか。
「『レア・ラーヴァテイン』！」
リヴェリアさんが詠唱を終える。何やら火で包まれたらしい。
・・・それって、服だけじゃなくて木人の方も燃えないかな？
あ、ティオナさんが思いっきり地面にたたきつけた。武器で。
衝撃で少し浮き上がったと思うと、その下にベートさんが足を入れて、
そのまま上に蹴り上げる。
そんなベートさんの頭を踏み台にして、アイズさんがさらに下から攻撃を加え、

そのままさらに上へ跳んで行ってしまった。
あ、斧が飛んで行った。ガレスさんが投げたらしい。
・・・うん？斧の上に人がいる気が・・・って、ティオネさんがいる!?
斧が木人にぶつかると同時に、ティオネさんが素早くその反対に回り、
二つのナイフで複数回も斬りつける。
そして、木人を踏み台にして、ティオネさんが離脱すると同時に、
二つの魔法が飛んでいく。
リヴェリアさんとレフィーアさんが同時に撃ったらしい。
空中に爆発のようなものが起こる。
ワァキレイナハナビダナァ（現実逃避）
ゴトン
「あ、落ちてき・・・た」
なんとそこには、無傷の服があった。
木人も一切傷ついていない不思議仕様である。
って、なんで木人も傷とか一切ついてないのさ・・・
なんて思った僕は、おかしくないと思うんだ。

これを着れば僕も前線で！（近接戦闘できないから無理です諦めてください）

～ロキファミリア　訓練場～

どうも、ナレッジです。僕は今・・・

「あんな装備、いったいどこで手に入れたんだい？」

ロキファミリアの訓練場で質問されています。

どこでと言われても、店の名前を言ってもわかるかどうかわからないですし、

どう説明するべきか・・・

「そういえば、前に明拾ってきたときに、廃屋に入ったと思ったら、

袋持って出てきてたけど、もしかしてあそこに店があったのかな？」

ティオナさんがそういう。

「・・・廃屋だと？」

リヴェリアさんがそういう。表情も険しい。だが僕は言いたい。

「僕が言ったのは廃屋ではないですよ？僕以外の人もそのことは知ってると思いますし」

いや、本当に。決して廃屋ではなかった。
「私たちも見ましたけど、私の記憶が正しければ、
あんなところに店なんてなかったはずなのよね」
水奈さんがそういう。ええ、うそでしょ？え？
なにこれ、ドッキリか何かなのかな？ハッ、実は夢落ちだったのか！
いや、ないな、うん。そんなふざけたことは考えず、
きちんと考えてみようか。
わかっているのは、
僕と明が買い物をしたとき、ティオナさんから見たら廃屋だったこと。
水奈さんの記憶ではあそこは廃屋であったこと。
僕たちが買った服が消えていないことから、
あそこは実際にあったものであると思えること。
・・・これだけだとわからないなぁ。もう少し何か情報がほしい。
「そういえば、あそこの店長さん不思議なことを言っていましたよね。
たしか、『貴方ならばもしくは』って感じのことを。
あれって、どういうことなんでしょうか」
「たしかに。他にも、『また来れるなんて運がいい』って。

もしかしたら、一定の条件を満たさないといけないとか」
明と水奈さんがそういう。
そういえばそんなことを言っていた。
服の性能を見てすっかり忘れていたようだ。
でも、そうなると一体条件ってなんだろうか？
始めていたときは、僕、明の二人。監視でティオナさんがいたが、
ティオナさんには見えなかった。
そして二度目、前回の二人に、水奈さん、アリス、クロワッサンの合計五人。
共通点は、僕と明がいたことと、メンバーが入った時には女性だったということ。
そうなると、女性であることが条件？でも、おそらくそうではない。
いくら監視だからと言って、かなり近くで見ていたであろうティオナさんが、
その条件に入らないわけではないだろう。
だとするのならば、あり得るのは二つ。
一つは転生者、あるいは転移者と呼ばれる存在の約二メートル内にいること。
もう一つは、僕のスキルのどれかしらが作用したというところだろう。
そして、スキルであるのだとしたら、あり得るのは絆の加護くらいであろう。
あの加護の説明の一部に、世界を渡ることができる、とある。

死んだわけではないが、もしかしたら、
別の世界に跳ぶことのできるスキルと言えるのではないだろうか。
水奈さんが見たことのないような布、それも、あんなに性能が高い以上、
あるのであれば普通に使うはずだ。それを、
最前線で戦う冒険者が知らないという事実には首をかしげるしかないだろう。
だが、別の世界のものであるならば納得ができる。
そんなもの、普通に考えれば手に入れることなんてできないのだから。
「それで、結局この服の扱いはどうするんですの？」
クロワッサンがそういう。
「これを着れば、僕も最前線で戦えたりするのかな？」
「「「近接武器で傷つけられないのに無茶言わないでください」」」
買い物に行ったメンバー全員から言われました。
あとで水奈さんには使い勝手のいい短剣を用意してもらうことにした。
軽くって攻撃の刺さりやすいものを用意してもらおうそうしよう。

武器の依頼（短剣ほしいですほんとに）

～水奈の工房～

どうも、ナレッジです。あのあと、服は着ていくことで話は済んだので、
いまは水奈さんの工房で、僕でも使えそうな武器がないか見て回っています。
「貴方ならきっと私を使いこなせる。ほら、私を手に取って」
・・・ファ!?何今の声!?そんな風に思いながら、周りを見る。
「こっちよ、あなたの後ろ」
そういわれて後ろを向くと、そこには金髪緑目の幼女がいた。
服は若草色で、白い布が袖から出ていることなどから、
おそらく下には白い服を着ているのだろう。
「えぇっと、君は？」
「私はラティ、精霊短剣ラティよ。
あなた面白そうだし、折角だから私と契約しない？」
唐突な話ではあるが、ナレッジとしては嬉しい申し出である。
精霊短剣と銘打たれている以上、形状は短剣であろう。

そして、契約するということは、なにかしらの能力が使えるということだからだ。
「えっと、それじゃあお願いしていいかな？
とはいっても僕、チキとも契約してるから、二人がそれでいいならだけど」
「全然かまわないわよ？私としては、面白そうだからついていくってだけだしね」
直後、ナレッジの両肩に何かやわらかいものが乗っかる。
「私も別にかまわないわ。もとより、私は近接武器なんてもの用意できないもの」
どうやらチキだったらしい。ところで、筋力低い僕の上に乗ってて、
何で僕倒れないんだろう？軽すぎないかな？
・・・まあいいか。気にしないことにしとくべきだよね。
「チキもいいって言ってるし、そういうことならお願いします」
「もう、お願いしますじゃなくってよろしくでいいのよ？マスターさん♪」
ラティは楽しそうに笑いながらそういう。
ナレッジはそれに対して、
「それと、僕はナレッジでいいからね？
マスター何て呼ばれるのはなんというかなれなくってね」
という。マスター何て呼ばれることがなかったため、
どうしても違和感を感じてしまうのだ。

ちなみに前回チキと会った時には、色々あったせいか言うのを忘れていた。
「マスターはマスターなのだけれど、あなたがそういうなら仕方がないわ。
よろしくね、ナレッジ」
チキはそういった後、笑みを浮かべ、そのまま姿を消す。
「ナレッジさん、ほら、これが私よ」
ラティがそういうと、ナレッジの目の前に一本の短剣が浮かぶ。
濡れ羽色の持ち手に、若草色の刀身、
持ち手と刀身の間部分に金色の宝石が埋め込まれている。
あぁ、一応言っておかないとだよね。
「水奈さん！この短剣もらっていきますね！」
「まさかの決定事項告げただけだった!?私が探してる間に何があったの!?」
短剣の山を持ち運んでいた水奈さんは、とても驚いていたのであった。

試し切り（強敵は出てこない模様）

～ダンジョン　1F～

どうも、ナレッジです。今僕は、ラティの試し切りのためにダンジョンに来ています。

「これで！」

『グギャ!?』

僕の投げたラティはゴブリンの頭部に突き刺さり、再び僕の手元に戻ってくる。

ラティはすごいなぁ、ここまできれいに突き刺さると、驚きを隠せないんだけど。

なんといっても、契約後に聞いた能力の種類がかなり多い。

もっとも、これで慢心したらすぐに死んじゃうから、警戒を解くことはないけどね。

ちなみに手元に勝手に戻ってきたのは、投擲帰還という能力らしい。

効果は、突き刺さったらそのまま手元に戻ってくるというものだ。

ちなみに投げるときの注意点で、

重力強化という能力を並行して使わないとラティが吹き飛んでしまうらしい。

なんでも、最初からの効果で重量消失というものがあり、

重さがゼロになっているらしいのだが、

僕の時は最初から変更していたらしいのでいまいち理解できていない。
まぁ、本人がそういってるしきっとそうなのだろう。
一応言っておくが、すぐ近くに明たちはいる。
緊急時はすぐに助けに入れる距離なので、よっぽどのことがない限り安心だろう。
パキリ
そんな音と共に、壁からゴブリンが生まれる。
数は二体、やれないことはないだろうが、死なないように準備をしよう。
『傷を防げ、魔布』
魔力で作り出した布を、首や間接部分に巻く。
頭にも巻き、帽子のような状態になったところで、
ラティを構え、ゴブリンに向けて走り出す。
魔糸よりも魔布の方が魔力消費力は高いため、乱用することはできないが、
だとしても強力な防御だろう。
なにせ、込めた魔力分だけ、攻撃を無効化するからだ。
ちなみに今作ったこれは、即死するような攻撃を一回ずつ防いでくれる代物である。
ちなみにそれ以外にも、色々と効果があるのだが、
全てがステータスの紙に書いてなかった理由は、

容量が足りなくなってしまうためらしい。
まぁ、それは置いておくとして、とりあえず一体の顔面に向けてラティを投げる。
突き刺さったのを確認し、もう一体に向けて勢いよく走りだす。
手元に帰ってきたラティを使い、首を斬りつけ背後にまわり、両腕を切り落とし、魔石の周りを斬り飛ばす。言うまでもないが、確実にオーバーキルである。
魔石を回収して、袋の中に入れる。
「試し切りはこれくらいでいいかな。他の皆と合流しようか」
「わかったわ」
チキとラティの返事を聞いた後、僕は明たちと合流するために移動するのだった。

みんなと合流しよう（戦闘もあるよ！）

～ダンジョン　1F～

どうも、ナレッジです。前回に引き続き、ダンジョンからお送りいたします。

『グァァァァ』

ゴブリンの叫び声が聞こえたので、そちらの方へ行ってみる。

そこにいたのは明・・・なのだが、その周りの光景を見て思わず頬を引き攣らせる。

「なんで壁がえぐれて、地面にクレーターができてるの?」

明がこちらに気が付いたのか、手を振りながらこちらに来る。

周りを見ていて気が付かなかったが、ご本人もすごかった。

所々ゴブリンの返り血で赤くなっているのを見て、僕は顔を青くする。

えぐれてる壁の近くにも、血がそこらじゅうにまき散らされている。

う～んこの、僕のＳＡＮ値を削りきるつもりか。

初期値の時点であまり多くないっていうのに、と、

冗談はこのくらいにして、とりあえず明と合流したし、

他の三人とも合流しよう。

〜移動中〜
あ、ゴブリn
ドゴッ
・・・死んだな。明の一撃で壁のしみになっちゃったな。
『『『グェ・・・グエッ』』』
ゴブリンのうめき声が聞こえる。
・・・うめき声？
声のした方に行くと、
アリスがゴブリン三体の首をレイピアで串刺しにしているのが見えた。
ｏｈ、なんてこったい。
え？僕の前世の妻ってこんなに物騒なの？なに？
僕を殺しに来ようとしている感じ？
いや、ないな、うん。いったん落ち着こう。
「アリス、早くとどめさしてあげて。見てられないから」
いや、割とマジで。
「あら？クロワッサンから聞いた話だと、
騎士やめたころのあなたはこれより酷かったってきいたのだけど」

「前世の僕ってどんな人だったんだろう・・・」
「クロワッサンに聞いた話では、
邪魔しようとするやつのリーダーを串刺しにしたり、
その死体で歪なオブジェ作って、
相手の部下の前にさらしたりしてたらしいわよ?
ちなみに、王だったころは敵国軍串刺しにして、
嫌がらせのようにさらしまくってたわ」
「うん、いったい何やってんの僕は!?ヴラド三世かなにか!?」
後ろにいる明の視線が冷たくなっている。記憶にないんです許してください。
え?ダメ?そんなぁ・・・
「そこまでにしなさいな」
「ナレッジ君、そんなことしてたんだ」
クロワッサンと水奈さんが合流して、
ダンジョンに潜ったときのメンバーが揃ったところで、
僕たちは外に出ることにした。
いいもん、そんな記憶今の僕にはないから気にしないもん・・・
語尾にもんつけるとか、男がやると違和感あるよね、この言い方。

今の僕は見た目女の子だから問題ない、たぶん。
『グルァァァ』
あ、ゴブリンが五体出てきた。一人一体かな。
「「フッ」」
アリスとクロワッサンの一撃で、ゴブリン二体の顔面がはじけ飛ぶ。
「「はぁ！」」
明の振り下ろしと、水奈さんの刀による一撃で、
残っている三体のうち二体が左右に切り裂かれた。
「セイッ」
残った一体の頭部に向けて、ラティを投擲する。
片眼に突き刺さったラティは、そのまま僕の手元に帰ってくるので、
ゴブリンに向かって走っていき、もう片方の眼にも突き刺す。
ゴブリンが一歩後ろに足を引いたおかげでラティが抜けたので、
ゴブリンの首に突き刺し、ゼロ距離で魔糸を生成、
追撃として、首に巻いて思い切り後ろに下がる。
そのとき、ラティに巻きつけたので、おそらく後で怒られる。
なんて考えているうちに、ゴブリンの首が斬り落とされ、灰になって消える。

「さ、いこうか」
　僕はそういいながら、出口に向かって歩いていくのだった。
「あ、明、血はきっちり拭いておいてね？ほら、ハンカチ」
「ありがとうございます」

ステータス更新（やはり異常な伸び率）

～ロキファミリア　ロキの部屋～

どうも、ナレッジです。僕は今、
ロキの部屋でステータス更新のお願いをして、
つい先ほど終わったのですが、それの結果がこちらです。

ＬＶ　１
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｇ　２００　→Ｂ　７５０
敏捷：Ｅ　４５０　→Ｓ　９００
魔力：Ｆ　３２５　→ＳＳ　１０００

あと、自然と増えたのにプラスして、
ラティと契約した結果スキルが増え、

スキル
今、この時を妻たちに捧ぐ
特定条件下で人格とステータス、見た目が変化する
ステータスの限界を突破する
常に彼女らとともにある

重量消失
武器の重さを０にする
投擲帰還
投げたものが対象に突き刺さると手元に帰ってくる
重量強化
自分の好きなタイミングで重さを変更することができる
絶対帰還

投擲以外の方法で手元から１００ｍ以上離れた場合、手元に戻ってくる
共鳴
水奈が制作した武器を多く所持するほどに速度と技量にプラス補正
属性付与
全属性から状態異常にかけてのすべてを一つだけ好きなようにつけることができる
なお、変えてから三十分は変更できない
ちなみにスペックとして言うのであれば、状態異常は必中
属性攻撃ボーナスは消費魔力依存である
最低でも二十パーセントの魔力を消費する

といった感じ。空いたスペースで区切ってあるからわかりやすい。
あと、文字化けしたのがスキルの横だったり下だったりに書かれていたとか。
・・・うん、ひとつ言っていいかなこれ。
「どうしてこうなった・・・」
魔力もＳＳってなにさ・・・
「そんなもんうちが聞きたいわ。文字化け起こすから書き取れんし、

明の方もまたおかしなことになっとるし、
ナレッジのチームメンバーはそろいもそろって不思議なことになっとるわ」
そういいながら、今度は明の紙を見せてくる。

ＬＶ　１
力：Ｉ　０　→Ｓ　９６０
耐久：Ｉ　０　→Ｂ　７５０
器用：Ｉ　０　→Ｄ　５００
敏捷：Ｉ　０　→Ｃ　６５０
魔力：Ｉ　０　→Ｅ　４００

おいこらちょっと待て、Ｓってなにさ Ｓって!?
僕より上がり方おかしいのがいたよ!?
スキルは増えていないので放置。
他の二人ものもの見せてもらう。

アリス
ＬＶ　１
力：Ｉ　０　→Ｆ　３６０
耐久：Ｉ　０　→Ａ　８７０
器用：Ｉ　０　→Ｂ　７４０
敏捷：Ｉ　０　→Ｓ　９９０
魔力：Ｉ　０　→Ｉ　０
スキル
カリスマ
味方全体の力、魔力にプラス補正
アリス王国の女王
王の妻として、常に隣に立ち続けていた女王としての証。
指揮することによってメンバーのステータスを一時的に強化する。
特定の人物とともに活動している時のみ経験値にプラス補正
王とともにこの道を逝く

王と同時に一生を終え、その後も探し続けた証明。
特定の人物が死んだ場合、自身も死に至る。
限界を超え、つねにその身は彼の人のために・・・

たしかに、魔法らしい魔法は使ってなかったし、魔力は鍛えられないのか。
次はクロワッサンの方を見る。

クロワッサン
ＬＶ　１
力：Ｉ　０　→Ｄ　５００
耐久：Ｉ　０　→Ａ　８９５
器用：Ｉ　０　→Ｓ　９００
敏捷：Ｉ　０　→Ａ　８９９
魔力：Ｉ　０　→Ｉ　０
スキル

カリスマ
味方全体の力、魔力にプラス補正
追いかけ続け、この先も
死してもなお、ひたすらにある人物を追いかけ続けた証明
その魂は、常にそのものを探し、隣を歩き続ける。
この身、絶望はせず
何十年、何百年と探しながらも、一度もあきらめず、ひたすらに歩み続けた証明。
絶望することを知らず、ただあの方に歩み続けるための特異スキル
その人と、常にともにあり続けるという決意の証であり、
自身の命すらかけた契約式呪術。
限界を超え、片方が死ねばもう片方も死ぬ呪い。

・・・二人とも、愛が重いというかなんというか・・・
うん、ステータスの伸び率はこんなもんだということにしておくことにした。
時々胃が痛くなるのは気のせいだと思いたい。ホントに。
・・・よし！今日はここまでにしよう！僕は食堂に行く！

そうして、僕は明たちと一緒に食堂で夕飯を食べるのだった。

ダンジョンに潜る。その前に（二人の武器を見に行こう）

～水奈の工房～
どうも、ナレッジです。
僕は今、水奈さんに工房でアリスとクロワッサンの武器を見に来ています。
ちなみに、一応言っておきますが、今は朝です。
でも思ったんだけど、
なんで短剣見に来た時に二人の武器も見なかったんだろう・・・
と、それはまぁおいておくとして、二人が武器を見ている間に、
僕は防御用の魔布を作っておこうと思う。
何枚かあれば、緊急時に防ぐ盾として使えるし、
体の急所にでも巻いておけば死ににくくなるだろう。
というわけで、チキに頼み、意識を失う直前まで魔力を吸い取ってもらい、
その魔力で布を作っていく。
魔力回復薬なんてものはないから、作るといっても一枚程度だが、
まぁ、前もって作っておけば損しないだろうし、

ダンジョンに潜らない日もこれだけは習慣づけようと思う。
と、そんなことを考えているうちに魔布ができたようだ。
どのくらい防げるかわからないし、過信はしないでおこう。
出来上がった魔布を見ていると、ふと影が差す。
「？」
疑問に思い目の前を向くと、
アリスとクロワッサンが、細剣（さいけん）を持ちながら立っていた。
どうやら決まったらしい。ちなみに、あまり詳しくはないのだが、
レイピアと細剣は分類的に言うと違うのだとかどうとか。
まぁ、いまは置いておくとしよう。そんなことより二人の武器の確認である。
アリスの武器は、夕日色の刀身に、
持ち手が白銀にピンクの桜がはめ込まれたようなもの。
クロワッサンの武器は、銀色と金色の混じった刀身に、
銀の装飾の施された持ち手らしい。
もっとも、邪魔にならない程度の装飾だが。
「準備できたわよ。ところで、その布どうしたの？」
アリスが聞いてくる。

「あぁ、魔力で作ったんだよ。効果は一定ダメージの無効化だね。
とはいっても、あんまり魔力量は高くないし、
そんなに多くダメージは防げないけど」
そういいながら、僕は魔布を腕に巻きつける。
「そういえば、その武器の名前ってなんていうの？」
僕がそう聞くと、アリスが、
「私の方はクレザクラね」
という。色とかから考えるに、
夕暮れの暮れと、桜の花をイメージしたのだろう。
「私の方は無華（むか）ね。理由はわからないけれど」
確かにそれは僕にもわからないけど、
「なるほどね」
そういって、僕は二人の武器を軽く撫でた後、
「さてと、それじゃあダンジョンの方に行こうか。
他の皆も待ってるだろうしね」
といい、そのままの流れで、水奈さんの工房から出ていく。
「それじゃあ行ってきますね、水奈さん」

「ええ、せめて死なないように気をつけなさいね」
「そんなフラグになりそうなこと言わないでほしかったですけど。了解です」
水奈さんとそんな会話をした後に、
僕たちはダンジョンに向けて歩き始めるのだった。

これぞチート！（仲間の皆がね）

～ダンジョン　５Ｆ～

どうも、ナレッジです。前まで一階にいた僕たちでしたが、なんで五階まで降りてきているかというと・・・

「せいっ」

「はあっ」

・・・他の三人が敵を一方的にボコ殴りにしてるからです。

うん、やることないんだけど、どうしようかなぁ・・・

『動きを止めて、魔糸』

とりあえず敵の動きを止めておくことにした。

ちなみに、意味があるかどうかで言えば無い。すぐに殺しちゃってるし。

というか、使った先から魔力が回復していくんだけど、いったいどうしたんだろ。

『むぅ、きみが気が付いてくれないのは、見えてないからなのかな？』

何か聞こえた気がする。周りを見回すと、肩に何か乗っていた。

「・・・狐？」

その声が聞こえたのか、小さな狐はナレッジの方を向くと、
『お、やっと気が付いた。きみは覚えてるかな？キュウイだよ』
うん、全然覚えてない。狐の知り合いなんていたのか。
前世の僕ほんとにすごいな。
『うん、その顔は覚えてないって顔だね。
まぁ、今までの話は聞いていたから、予想してはいたけど、
それでも悲しいものはあるねぇ』
狐、キュウイは少し寂しそうにそういう。
『まぁ、私から魔力を供給できる程度にはパスは出来たらしいし、
そのうち思い出すでしょ』
その声とともに、キュウイは姿を消す。
・・・いったい何がしたかったのだろう。
『グルァァァ』
「ナレッジ、戦闘終わったわよ」
最後の一匹も死んだらしい。
全員が血を振り払いながら僕のところに集まってくる。
「はいはいっと。それじゃあ魔石回収したら一回上がるか」

僕がそういって動こうとした直後である。
『ブヒィィ』
もはや豚の鳴き声にしか聞こえないような声が聞こえたと同時に、
紅いオークがこちらに向けて走ってきた・・・
待った、オークはまずいだろう!?
十階層から離れてこんなとこにいるんじゃないよ!
「ハァァッ!」
明が掛け声とともにグラを投げつける。クルクルと回っていったグラは、
そのままオークの顔面を斬り壊し、オークを魔石に変化させた。
あれは、武器の性能が良かったのだろうか、
それとも、明の力補正によるあの火力なのか、
もしくはその両方なのか・・・
まぁ、どっちもって事にしておこう。
「よし!帰るか!」←気にしないことにした
結論から言ってしまえば、
そのあとは特に何もなくダンジョンから出たのだが、
オークの魔石のせいでギルドから報告があったのだろう。

リヴェリアに叱られた四人なのであった。
しかし、誰が倒したのかという質問に、
明が一撃で倒したと言ったら、
変な奴を見る目で明を見たリヴェリアが印象的だった。

ステータス更新と遠征（あんまり僕たちには関係・・・え？・あるの？）

～ロキファミリア　ロキの部屋～

どうも、ナレッジです。僕は今、ステータスを更新してもらったのですが・・・

「なんでさ」

「それはウチのセリフやで」

魔力がＥＸとかいうのになりました。どうしてか一万超えたよ、

やったね、これで僕もチート軍団の仲間入り

「出来るか！・魔力チートとかなに？

魔糸とか魔布とか大量に作れって意味ですかね!?

よっしゃやってやらぁッ！魔布で装甲あげまくってやる！」

しかし、戦闘にかんしては圧倒的に弱者、その現実にかわりなし・・・

いや、魔糸にどの程度概念を込められるかにもよるか。

そんなこと考えていると、ノックのあとに部屋の扉が開き、

フィンが現れる。

「すまない、ナレッジに少し話があるんだ・・・が?」
だんだん小さくなっていった声に、どうしたのだろうか、と、
フィンの方を見ると、フィンは気まずそうに視線をそらしながら、
「すまないがナレッジ。上を隠してくれないだろうか」
と言ってくる。
・・・上?と、自分の状態を思い出す。
更新した直後で服を着直した記憶がない。
加えて、今の姿は女のままだ。
小さいが、それなりに膨らみも・・・って、
「明!フィンを外に放り出して!」
と、今はいないはずの明にそう言う。すると、
「わかった!」ドゴッ
突然現れた明が、フィンの事を室外に放り投げる。
うん、どこからきたのかなほんとに。
さっきまで僕とロキ様しか居なかった筈なんだけどなぁ、っと、
それはおいておくとしよう。今はまず上を着ることが大切だ。
「『服を作れ　魔布』」

うん、チキつけといてよかったぜ。魔力で編んだ服は、
縫い目が無いからとても着心地が良い。
ちなみに暑ければ涼しく、寒ければ暖かくなる使用だ。
「いたた・・・見ちゃったのは悪かったけど、
明の一撃でここまでダメージ食らうのも想定外だったな」
明がフィンを片手で持ち上げながら部屋に入ってくる。
フィンの頭にはたんこぶができており、見ていて痛々しいが、
まぁ、人の上半身見た時点で扱いはこんなものだろう。
「それで、なんのようですか?」
声が少し冷たくなった気がしないでもないが、
気にしない方向で行こうと思う。
「あ、あぁ、遠征のことで少し話しておきたくってね。
他の人に聞いたら、ロキの部屋にいるといわれたのだが・・・
せめてステータス更新のために行ってるとか教えてほしかったなぁ」
「いったい誰に聞いたのだろうか・・・?」
という僕の疑問に、明とフィンが答える。
「あぁ、もしかしてアリスさんが楽しそうに笑いをこらえていたのって、

そういうことだったんですかね?」
「そうだね。僕が聞いたのはアリスとクロワッサンだから」
元凶発見。あの二人どうしてくれようか・・・
それはまぁ今は置いておいて、
「それで、遠征についてって話ですけど、僕関係ないですよね?
深いところなんて潜れませんし」
割りとまじである。ていうか、要求されても困る。
「いや、かなり関係あるね。
君の持っているスキルで、後方から指示をしてもらいたいんだよ。
もちろん護衛もつけるから、守りは気にしないでくれて良い」
「・・・あの、それって素直に指示にしたがってくれますかね?
言っちゃ悪いですが、低レベルの人間の指示とか、
従いたいと思う人って少ないと思うのですが」
間違ってはいないし、事実その通りだろう。
そもそも、レベル一を深層の方まで連れていくのがバカなのだ。
「説明したら、他のみんなからは了承もらえたよ?
一部は、『美少女の指揮なんて燃えるじゃねぇか!』

とか言ってたし」
誰だよそれいったの。絶対危ない奴だろそいつ。
「明とかはどうするんですか？あの三人の武器とか、
他の人とかなり違うから、
他のパーティーと組ませるのは問題が出る可能性があるのですが」
「三人と、水奈という鍛冶師も同行する事になっているよ」
「一気にリスク跳ね上がったなおい」
突っ込みどころしかない。足手まといばっかで良いのかよ、遠征。
「質問はそれだけかな？ちなみにいっておくけど、
遠征は一ヶ月後だから、
それの一週間くらい前までに結論を出してくれると助かる」
そういって、フィンは部屋から出ていってしまった。
しかし、よく僕たちのパーティーをつれていくことを許可したと思う。
まぁいい、言われた通り、少し考えてみることにしよう。
そのあとは、特に特別何かあったわけでもなく、
アリスとクロワッサンをくすぐり倒して疲れさせ、
魔糸をつかってぐるぐる巻きにした状態で部屋に放り込み、

そのまま寝た。

キャラ設定　０章

注意　オリキャラのみの紹介です。どこか抜けているかもしれません

ナレッジ

今作の主人公。王として活動していた前世と、騎士として活動していた前世と、一般人として活動していた前世を持つ。

本人の戦闘能力は、どちらかというと技術特化に近い。

メイン武器は糸と短剣

明

オリキャラの一人。力が高めのステータスを持っている。

父親から虐待を受けていた少女。

大通りの端の辺りでナレッジに拾われた。

メイン武器は大剣

水奈

オリキャラの一人。鍛冶師でありながら、作る武器の性能はちょっとおかしい。

主人公たちの武器の製作者である。

武器整備に来た時にナレッジたちと出会った。
時々変なものを作って団長や主神に迷惑をかけている。
主神であるヘファイストスは、
「ちょっとあの子の作った武器を作るのはいろいろな意味で無理」
と言っていたというが、真偽は不明。
メイン武器は特になく、自分の作った武器なら何でも使う。
アリス
ナレッジの王として活動していた時の妻の一人。
アリス王国の女王であり、他の妻との仲もよかった。
もう一人の妻と自身のみで、一国攻め滅ぼせたりするのは秘密である。
時々ツンデレっぽくなるのはなぜなのか、それは誰にもわからない。
メイン武器は細剣、レイピア
クロワッサン
元騎士であったナレッジの妻の一人。
他にも妻はいたのだが、あまり記録には残っていなかったり、
狐の神っぽいのに取りつかれていたり、
座敷童に好かれていたナレッジには、思わずあきれていたという。

メイン武器は細剣、レイピア

サラ

オリキャラの一人。梅重（うめがさね）色の髪と目の女の子。

泣き虫なのが玉にきずだが、やるときはやる。

これから先も時々出番がある。

メイン武器は片手剣

レン

オリキャラの中で現在登場している唯一の男キャラ。

え？主人公いるだろって？あれはオリ主であってオリキャラじゃないから。

あんま変わんないけど。

それは置いておくとして、明と若干仲が悪い。

これから先出番があるかは考え中。

メイン武器は両手剣か二刀流のどちらかである。

絆

ナレッジを転生させた女神。別作でも割と登場してる女神さま。

おっちょこちょいというべきか、ドジというべきか。

時々とんでもないことをやらかす。

ドール
絆の従者。別作にもよく出てる。絆の指示で時々ナレッジの周辺警護してたりする。
仕事場に別な女神が入ってきたり男神が入ってきたりするが、
相手によって対処を変える。
これから先、出番がある予定はない。
ファンタジードレスショップの店長
異世界の魔王だったりするが、そこは気にするだけ無駄だろう。
敵として出てくることはない。

1章　遠征編

遠征開始（はぐれたあげく襲われるのははたしてどうなのだろうか）

～ダンジョン　入口～

どうも、ナレッジです。あれから一ヶ月たち、
結局同行する事になりました。
アリスとクロワッサンと明が涙目でいきたいと言われたら、
断ることはできなかったよ。
ちなみに、新しくスキルが出ていたが、
塗りつぶされて読めなかったらしい。
まあそれはともかく、そんな風に流された僕ですが、
「遠征に同行する事になりました。ナレッジです。
よろしくお願いします」
メンバーの前で色々話させられています。

いやまぁ、自己紹介が必要なのはわかるけど、
なんでファミリアの中でやらせてくれなかったのかな!?
・・・まぁ、そんなこんな有りましたが、自己紹介は全カットです。
～ダンジョン　１８Ｆ～
ゴライアスはいませんでした。指揮するようなこともなかったです。
なので、後ろでひたすら魔布作ってたら、変な奴見るような目で見られました。
いやまぁ、実際他の人から見たら、
ダンジョン内で魔力を無駄に消費してるようにしか見えなかったでしょうけども。
とりあえずいまは、みんなで水浴びの時間だ。
僕と明、アリス、クロワッサン、水奈の五人で水浴び中である。
ちなみになぜか男になるようにと脅された。下は脱がないから良いけども、
問題だと思う。
というか恥ずかしいとか言う感情をどこかに捨てちゃったんですかね？
見ることはできないので、皆には背を向けて体を拭いていく。
水を吸い込んだ魔布は、その水を冷やしてくれるので、
とても気持ちいい。
それから少ししたあと、他のメンバーと合流するために移動しはじめて・・・

迷った。移動してる最中に作ってた道しるべは誰かに壊されて、
それをたどって帰ることができなくなってしまっていた。
とりあえず、魔布を身体中に巻き、魔糸でさらに補強する。
何があるかわからない以上、装甲が薄いのは危険だ。
移動中に作ったものに加え、遠征前からコツコツ作ったものを、
明たちにも渡していく。
それから少しして、開けた場所が見えてきた。
どうやら森を抜けることが出来たらしい。
そう思いながらも、周囲を警戒しつつ外の出る。
そこには、一人の大男と、何人かのフードを被ったものたちがいた。
背筋の辺りになにか冷たいものが流し込まれる感覚と同時に、
ナレッジは大きく後ろにとぶ。
先程いたところに視線を向ければ、大男が地面に穴を開けていた。
それも、拳で。
いくら地面が土とにたような材質だからとて、
穴を開けるほどに威力があったものが、
自分に突き刺さる可能性があったと考えると、

ゾッとするどころの騒ぎではない。
フードを被ったものたちが動き出す。
森の中に入ってきた彼らは、明たちにナイフを使い攻撃を仕掛ける。
一瞬そちらに気をとられてしまったナレッジは、
大男の一撃に気づくのが遅れ、回避行動をとったときにはもう遅く、
深い傷を負ってしまった。
「あの方が目にかけるから、どの程度かと試してみれば、
なるほど、この程度か」
大男はそう言うと、興味を失ったように他の四人を見る。
フードのものたちも、相当高レベルなのだろう。
明たちは武器や魔布で防いでいくが、少しずつ傷をおっていく。
そうして、動きが鈍ってきたアリスに、フードを被ったものの攻撃が当たる。
バタリという音と共に、アリスが倒れ、地面が赤く染まっていく。
そのとき、ナレッジの中の別な側面が、ちらりと姿を表した。

しかし彼は、確かに英雄であり化け物である（本来の実力なんてあってないようなものですよ）

もし彼らの中に、彼の中に宿っている、
異常な王と騎士の存在を知っているものがいたなら。
もし彼らの中に、木の枝一本で隣国を滅ぼし、
憎悪とともに世界を半壊させた王のことを知っているものがいたなら。
もし彼らの中に、単独で国を滅ぼせるような者二十人と、
惑星を砕けるほどの者一人を相手に、
被害を部屋一つと自分の命のみで抑え込んだ、
たった一人の騎士のことを知っているものがいたのなら。
もし彼らが、その者達の転生体である彼、
ナレッジの逆鱗に触れなかったなら。
きっと、こんなことにはならなかっただろうに・・・

181　しかし彼は、確かに英雄であり化け物である（本来の実力なんてあってないようなすよ）

なにかが体の中を這いずるような感覚に陥る。
頭に中に何かの記憶が流れてくる。
城のような風景、こちらに向けて笑みを浮かべる二人の女性。
吐き気が込み上げてくる。
その二人がなにかに殺されるような光景が頭の中に現れる。
『また失うのか？』
そんな声が聞こえた気がした。
『再び会うことのできた妻を見殺しにして、貴様は満足なのか？』
その声には、どこか慣れ親しんだものに聞こえる。
『まったく、あの程度の雑魚に遅れをとるなどと、
ずいぶんと弱くなったようだな。俺は』
ドクン、と、心臓が大きく鼓動する。
『仕方がない。一時的に力を貸してやろう。
あの程度の者たちなど、雑草のように刈り取ってやれ』
何かの技術が入ってくる。頭に直接叩き込まれたそれは、

だがしかし、確かにどこか懐かしい技術だ。
体に力が溢れていく。傷が塞がっていくのがわかる。
目を開く。先程の光景と変わらず、アリスが地面に倒れていた。
「Ａａａａ」
自分の口からそんな声がこぼれ落ちる。
意識が別な何者かに奪われる。
肉体が無理やり変化していく。
「ヤット、アリスニフタタビアエタンダ」
意識がなくなる直前、
「アァ、ヤハリコノ体はよくなじむ」
という声が聞こえた。自分の口から出たそれは、しかし、
いまの『ナレッジ』という個体の出す声ではなかった。
〜視点変更　明視点〜
いつもと違う声と共に、お姉ちゃんが立ち上がる。
嫌な気配だった。本能が訴える。あれはお姉ちゃんじゃないと、
その皮を被った別のものだと。
否、その皮すらすでに存在していない。

183　しかし彼は、確かに英雄であり化け物である（本来の実力なんてあってないようなすよ）

綺麗な男の人だった。でも、それがとても怖く感じた。
お姉ちゃんの体がその男の人に変化した後、服装も同時に変わる。
まるで、鎧のような服。しかし、所々に白い布地が見える。
チキとラティが地面に落ちる。勝手に落ちていったところを見ると、
本人たちが嫌がったのだろう。
「・・・剣よ」
その男の手に大剣が現れる。
「魔力を纏いて万物を粉砕せよ」
背筋が凍る。そんな感覚に陥ると同時に、男の剣に何かの靄が見える。
男が剣を振るう。前方に向けて振られたそれは、
暴力となってローブの者たちを吹き飛ばす。
ふと、男の足元を見ると、そこにはアリスさん達が倒れていた。
いつの間に、なんて思う暇もなく、振られた剣の衝撃が原因なのか、
木々が倒れ、地面が大きくえぐれる。大男は回避が間に合ったが、
・・
残りのローブの者たちはそのままそれに飲まれて消滅する。
私に被害が一切ないのは、彼が考えたうえで行った行動なのだろうか？

という疑問がよぎる。
男はしゃがむと、懐から赤色の薬ビンを取り出し、アリスさんに飲ませ始める。
コクリ、と、アリスがそれを飲み込むと、
アリスさんの傷が瞬く間に消えていく。
それからすぐ、アリスさんが目を開き、彼の方を見ると、
突然涙を流し始める。
アリスさんの口から、
「やっと、やっと会えた・・・」
という声が聞こえる。何のことだか分らなかった私だが、
そのあとの光景に思わず固まってしまった。
キスしたのだ。アリスさんと彼が。唐突に、何の前触れもなくである。
それが終わるとともに、大男が再び姿を現すが、
腕が変な方向にねじ曲がっていた。
「そこの小僧。次、我が妻に手を出してみろ。その四肢もいで、
吐き気の催す視線を向けてくるババァもろとも犬の餌にしてやる」
大男がその言葉と共に男に向かって斬りかかる。
その攻撃を、男はそこら辺に落ちていた石ころひとつで、

185　しかし彼は、確かに英雄であり化け物である（本来の実力なんてあってないようなすよ）

完全に、衝撃すら残さず受けきる。
「急に斬りかかるとはどういうことか、是非とも教えていただきたいなぁ」
男はそう言うと、大男に石を投げる。その石は、一切ズレを作らずに、
大男の肩を粉砕した。
というより、大きく抉れたといったほうが正しいだろう。
「つたく、せっかく繋がったリンクが切れちまったじゃねぇか」
彼はやれやれと言わんがばかりのしぐさをとる。
「魔力の残量がなくなったら終わりとはねぇ。面倒くさいことだ」
大男は気絶したのか、地面に倒れる。
「さてと、そこの少女、えぇっと、明だっけか？
俺が出ていったあとの体はよろしくぅ」
彼はそう言うと、目を閉じ、地面に倒れる。
それと同時に、元のお姉ちゃんの姿に変わっていく。
いったい彼がなんだったのか、それを知るためには多分、
アリスさんに聞くしかないのだろうと思った。
ところで疑問なのだが、なぜわざわざアリスさんやクロワッサンさん、
水奈さんに頼らず、私にいったのだろうか？

ちなみにそのあと、近付いたらなぜなのかすぐわかった。
四人揃って、とても気持ち良さそうに眠っていました。
そんな光景を見た私は、おとなしくお姉ちゃんの頬を突っつきに走るのだった。

起きたら明達に心配された（記憶が一部ないという問題点）

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、目を覚ましたのですが、

はて、なにか四、五人くらいに襲われて・・・

あれ？どうなったんだっけか？う～む、思い出せない。

ただ、今自分の頭の中に、いくつか覚えのない記憶があることだけはわかる。

直後、腹部に突然の衝撃。声を出すことすらできない衝撃を出したそれは、

僕にスリスリと頭を擦り付けてくる。

そこをみると、明がいた。

目のところが赤くなっている。先程まで泣いていたのだろうか。

とりあえず状況を確認するために、明に話しかけることにした。

「えっと、一体何があったのか教えてもらっても良いかな？

なんか、森を出た辺りからの記憶が曖昧で」

とかいったら、納得しているような顔でこちらを見てくる。

おいまて、マジでどうしたって言うんだ。
「なにがあったんヒデブ！」
なにがあったんだ、そう言おうとした直後、
三回ほど衝撃が襲ってくる。目の前が真っ暗になってしまった。
いや、ネタじゃないからね？ちなみにいいにおいがするが、
いったら何かに殺されそうだからやめておくことにする。
視界が再び開けるとともに、服の破れているアリスと、
見たところ傷等は一切見えないクロワッサン、水奈の姿があった。
・・・とりあえず言いたいことがある。
「アリス、服着替えない？その服装はさすがにアウトでしょ」
「変えの服なんて持ってないわよ？」
すぐに返されたその返答に、思わず固まってしまう。
それから数秒ほどして、
「・・・それもそうか、わかった。チキってどこにある？あれがあれば服なら作れるから」
といった僕の手には、チキがはまっていなかった。
周りを見渡しても、チキもラティも置かれていない。
というか、見渡して気が付いたけど、たぶんここ、

ロキファミリアの僕たちのテントだ。
「ああ、それなら私が持ってるよ。さっき起きた後に調整していたからね」
水奈はそういうと、チキとラティを渡してくる。
とりあえずどちらも受け取り、ラティを側におき、チキを手にはめる。
『服を作れ　魔布』
とりあえず肌が見えないように、服の下に薄い布地の服を作る。
『補強しろ　魔布』
そのあとに、切れているところにあわせて魔布を作り、
服に出来ている傷を無くす。もっとも、見えなくなっているだけなのだが。
「とりあえず、説明お願いしても平気かな？」
僕がそう言うと、明達はうなずいた後に、
「それじゃあ簡単に説明しますね」
といって、話始めたのだった。
まあいってしまえば、襲われて、僕が気絶したあと謎の服を着て、
怪我したアリスに紅い瓶に入っていたなにかを飲ませて、
目が覚めたアリスにキスされて、
襲ってきた集団を一人を除いて全滅させたらしい。

・・・は？ってなっていた僕は悪くないと思う。
まあとりあえず、全員無事でよかった、と笑顔でいったら、
全員から心配させた奴の台詞じゃないと言われ、思い切り抱きつかれました。
『今回は代金なしで良いが、次は貴様の左目を対価に頂くぞ』
そんな声が聞こえたが、そんなことよりも先に、首が閉まって死にそうだ。
誰か、この拘束を外してくれ・・・カクッ
そうして、僕は再び意識を失うのだった。

のんびり行こうぜ（上に上がれませんもんね）

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「これで最後ですね。さっきから言ってますけど、耐久は多くないと思うので、あくまでも保険程度に考えておいてください」

作ってきていた魔布を配り終えました。

ていうか、フィンに渡せばそれで済んだんじゃ・・・まあいいや。

この後の予定を聞かされたのだが、僕たちはこの階層に残るらしい。

他の全員はこれよりさらに下に潜るそうだ。

となるとやれることは限られるのだが、地上に行くにしても僕ら全員を護りながら水奈さん頑張って、

なーんて言えるわけもなく、まあこの階層で待機してほしいっていうのはわかる。

しかし、近くの町は物価が高いし、手を出す気にはなれない。

・・・散歩でもするかな。

「せっかくだし、壁際をぐるっと一周するか。みんなも一緒にどうかな？」

「やることもないですしねぇ」
「当然ついていくわ。暇だし」
「紙とかも持ってきてるから、簡易的な地図でも書きながら行きましょう。
暇もつぶせるでしょうし」
そういいながら、クロワッサンがカバンから紙を大量に取り出す。
「なんで大量に紙を持ってきてるのかと思ったら、そういう・・・」
水奈が呆れ気味にそういう。
「つまるところ、全員行くってことでいいんだよね。これ」
「当然。だって待ってても暇だし」
「お小遣いなんてもらってないので、
ただでさえ物価の高い近くの町じゃあ買い歩きなんてできませんし」
まぁ当然である。そんなこんなで散歩に行くことになった。
クロワッサンは紙とペンを持ちながらである。
～少年少女移動中～
「何かここだけ少し地面の色が違うな・・・」
「ここ、さっき私たちが襲われたところよ?」
「まじでかぁ・・・」

　～少年少女移動中～
「壁についたな」
「ここからどう移動するんですか？右？左？」
「うーむ、とりあえずどうせ一周するし右でいいんじゃないかな」
「目測で軽く作ってみたけど、やっぱり難しいものね、地図って」
「書こうとしたらそうなるでしょう、普通」
「地味に時間かかったから少し急がないと日が暮れかねないわよ？」
「「「えぇ・・・」」」
　～少年少女移動中～
「うん、なんか薄暗くなってきたし、一回キャンプに戻ろうか」
「この明るさだと何も書けなくなりそうですし、そうしたほうがいいと思いますよ？」
「というかもうすでに見えないから書いてないわよ？」
「とりあえず帰りましょう。私が先導するからついてきてね」
「「「了解」」」
　～キャンプへ移動中～
「近くに水場あったはずだし、軽く汗流して、ごはん食べたら寝ようか」
「「「賛成」」」

そんなこんなでみんなで水浴びしてパンとスープ食べてその日は寝た。

遠征組と合流、そして帰還中のあれこれ（原作主人公不在でお送りいたします）

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「え？怪我しないですんだ？変な液体まき散らす芋虫のせいで死にかけた・・・

って、笑いごとじゃないですよねそれ!?」

遠征から帰ってきた人達から話を聞いています。

ちなみに明たちも同じなようで、いろいろな人から話をされているみたいです。

「あの布ってスゲーな、まさか武器とかを溶かす液体を防いでも、全然壊れねえんだから」

「ていうかあの布を腕に巻いた状態で、ティオネの姉御なんて魔石抉り出してたしな」

（何やってるんですかティオネさん・・・！）

心の中でそう突っ込みを入れた僕は悪くないはずだ。

「・・・って、大丈夫だったんですか!?」

「ええ、問題なかったわ。布が全部なくなってたけど」

ティオネさんが後ろにいたらしい。唐突に話しかけられたのでビクッっとしてしまったが、
「怪我がなくってよかったです。あとで布渡しておきますね」
と、ティオネさんの方を向きながら言う。
「ええ、お願いするわ。予備も何枚かくれないかしら」
といわれたので、とりあえず寝る前に作っておいた何枚かを渡しておく。
キュウイのおかげで細かい魔力調整をしないで済んでいるので、
個人的にはとても助かっている。
「さて、休憩もある程度済んだろうし、そろそろ上に上がろうか」
フィンがそういうと、周りの人たちも準備をし始める。
(・・・そういえば)
「ねぇクロワッサン、書いてた地図ってどうしたの?」
「あぁ、あれなら近くの街みたいなところで売ったわ。
なんでか一枚一万ヴァリスで売れたから、結構な金額になったわよ?」
「マジでか」
暇つぶしに書いたにしてはうまくできていたが、普通そんなに出すものなのかね?
注)目印になる物や、高低差のわかるように書かれている。森の範囲なども正確であ

る。
「なんでも、かなり前に作ったやつはかなり雑だったみたいで、
それに比べてかなりわかりやすくって助かるって言ってたわ」
「へー、なるほどね」
そんなことをはなしていると、明が二人の方に来て、
「お姉ちゃん、そろそろ私達が行く番だよ。水奈さんたちも準備終わったみたいだし、
早く上に上がろ？」
というと、すぐにほかの二人の方に歩いて行った。
「よし、僕たちも早く上がろう。おいていかれたらつらい」
おもに戦闘的な面で。何があるかわからないし。
なんて思いながら、僕たちは移動を開始した。
～移動中～
う～んこの、実はトラブル体質なわけじゃないよね？
『ブモォォォォ』
そうだと信じたい。きっと目の前にいるミノタウロスの群れは、
なにか別な原因でここにいるんだ。多分、きっと
「てりゃー」

あ、明がミノタウロスをたたき殺してる。
武器の重さは偉大なのかな？真っ二つになってるや。
『ブモォォォ』
自分たちが不利であることを理解したのだろうか、ミノタウロスが全力で逃げ出す。
突然の行動に、僕たち全員が固まった、ということもなく、
「「今！」」
最後尾を走っていたミノタウロスの魔石のあたりに向けて、
アリスとクロワッサンが武器を突き刺す。
「魔糸よ！貪り喰らえ！」
『魔力いっぱい使っていくね！出来れば遠慮して！』
そんなキュウイの声とともに、僕が糸を二本ほど伸ばし、ミノタウロスを二体消滅させる。
三本出すと気絶しかけることが分かったので二本だけだ。
おそらくだが、ミノタウロス以上の敵には効かないわけではないが、
消費魔力的に一本が限界である。
残りの数は見たところ十、おおよそ僕たちだけでは倒しきれない。
そんな時、明が体を一回転させながら、

「これでもくらえぇぇ！」
と、グラを投げる。クルクルと回っていったそれは、ミノタウロスの首を跳ね飛ばす。
それで三体、残りの七体は、残念ながら上に逃げ「刺され！砕け！『ピア』」
訂正、ランスのような武器によって、
ミノタウロス二体の頭がはじけ飛び、残りの五体が逃走した。
（ていうか、僕たちのパーティー以外が一切動かないのはなぜ・・・）
と思いながら周りを見ると、あり得ないものを見るようにこちらを見る他の人たちの姿があった。
ちなみにいっておくと、アイズさんたちは先に行って敵を殲滅しながら進んでいるため、
この場にはいない。とはいっても、十分もたたずに追いかけているので、
ここに来るまでは一切戦闘せずに済んでいたのだが。
「お姉ちゃん！速く追いかけよう！」
明がそういいながら、自身が投げたグラを回収し、上り坂に向かっていく。
「ちょっと明！あんまり先に行ったら」
危険だ、そう言おうと思った直後、壁から白い腕が生え、明のことを殴り飛ばす。
咄嗟にグラを使って防いだものの、大きく吹き飛ばされてしまった明は、

そのまま壁にめり込んでしまう。
「カフッ」
力が抜けたように壁に埋まり、手から武器を落としてしまった明を見て、
その場にいた全員が息をのむ。
明を殴ったものの正体を知るために僕が視線を向けると、
そこには白いミノタウロスが立っていた。
「ハハッ、本当にトラブル体質だったのかな、僕」
そういいながら、僕に向かって突撃してくるミノタウロスを見て、一言。
「今の僕には無理だから、頼んだ『私』、みんなのことを護ってくれ」
『よく私の存在に気が付いたね。報酬として、今回は対価なしにしてやろう』
心の中でタハハ、なんて思いながら、『僕』は意識を落とした。
「任された以上はやらんとならんからね。さぁて牛、
私の護りを貫くならば、星のひとつでも砕いて見せな！」
～近くにいた冒険者A視点～
いや、きっとこれは夢だろう。そう思いながら、俺は目の前に広がる光景を見る。
白のミノタウロスと、その攻撃を防ぎ、流し、時には反撃する白髪の騎士。
白髪というよりは、白銀といったほうが正しいと思える髪の騎士は、

どこか、不思議な雰囲気を放っていた。
それと同時に、どこか強い覚悟のようなものを感じる。
他の冒険者のところに流れそうになっている石の破片を盾で防ぎ、
周りに大きく被害の出るものを受け止め、時には攻撃して動きを鈍らせる。
まるで、この場にいる全員を確実に護りきるという強い意志の力を感じる、
そんな動きに見惚れていた俺の横から、同じように綺麗な銀髪の女性が走り抜ける。
たしか、クロワッサンと名乗った女性のはずだ。
しかし思うのだが、先ほど通常のミノタウロスを倒すために、
ミノタウロスが逃げようとしていた通路側にいたはずなのだが、
一体いつの間に帰ってきたのだろうか・・・
そんなことを考えているうちに、騎士のもとにクロワッサンがたどりつき、
白いミノタウロスに攻撃を仕掛け・・・
たった一突きの後、白いミノタウロスの脇腹のあたりに細い穴が開く。
ちょうど彼女が攻撃したあたりにぽっかりと空いた穴、あまりの痛さゆえか、
白いミノタウロスは大きな声を上げ一瞬ひるむ。
そこに、さらに頭上から二人の女性が攻撃を仕掛ける。
一人は水縹（みはなだ）色の髪の毛で、二つ名が完全なる趣味人とかいう岩鋼水奈、

もう一人は、たしかアリスと名乗っていた金髪の女性だ。
その二人の攻撃により、ミノタウロスの肩が千切れ落ちる
その衝撃でミノタウロスが地面にたたきつけられる・・・が、
次の瞬間、俺はあり得ないものを見た。
地面の土が、ミノタウロスの腕を包み込む。
そして次の瞬間、腕が最初より太くなった状態で生えていた。
空を切る音とともに動かされた腕(凶器)を、騎士が防ぐ。
しかし、そのあとが問題だった。
確かに防いだその攻撃、しかし、衝撃によって背後の壁が崩れていく。
近くに倒れていた他の冒険者も、1～2ｍほど吹き飛ばされる。
先ほど攻撃を仕掛けていた女性たちは、咄嗟に回避行動をとっていたので無事ではあった。
直後、再度ミノタウロスから仕掛けられた攻撃にたいして、
「なめるな、牛風情が」
騎士が突撃し、盾と突撃の勢いのみで衝撃を消滅させる。
『唄え、謳え、我らはただ護る者であるのだと。
盾を持ち、剣(つるぎ)を構え全てを護ると高らかに　挑発』

騎士は詠唱を終えると同時に、ミノタウロスの首に剣を振るう。
ミノタウロスは体を曲げるように回避すると、地面から石でできた大剣を取り出し、
騎士に向けて振り下ろす。
騎士はその攻撃に対して、盾の下を剣の側面に勢いよくあてて、そのまま武器を破壊する。
その勢いのまま、騎士は剣を地面に突き刺し、
その柄を蹴り飛ばしてミノタウロスの首めがけて飛び・・・
青く光る半透明な剣でその首を斬り飛ばした。
首が斬り飛ばされ、そのまま倒れたミノタウロス。
これで終わり、かと思いきや、地面が盛り上がり、ミノタウロスが飲み込まれる。
再びその土がなくなったころには、
白銀のミノタウロスが、魔石のような光を宿している大剣を二本もち、
立ち上がっていくのが見える。
「うっそだろ・・・」
思わずそんな声が口からこぼれる。
しかし、そんな中で自分が何かを握りしめていることに気が付く。
それは、剣の柄。元鍛冶師の妻が作った、最後の一振り。

今は鍛冶師もやめ、冒険者としても活動していない彼女が、
嫌な予感がするからと持たせてくれた片手剣の柄であった。
ミノタウロスは、こちらに背中を向け、騎士の方を向いている。
周りを見ると、同じように剣を持っている同業者の姿が見える。
互いに顔を見合わせ、頷いて見せる。
騎士が突撃する。大剣が少女、明といったか？が吹き飛ばされた方から飛んでくる。
騎士の左右からも三人の女性が飛び出し、騎士が攻撃を仕掛けるのに合わせて武器を突き刺す。
バランスが崩れたところで、大剣が突き刺さり、直後、俺たちは追撃として全方向から攻撃する。
傷口に抉りこむように放った突きが、魔石のようなものを砕いた感触を伝えてくれる。
いいところだけ取ってしまったが、
この一突きで、ようやく白銀のミノタウロスは灰になったのだった。
そこで気が抜けてしまったのであろう。最初の方から戦っていた女性たちと、
騎士風の男だった少年が、そのまま気絶してしまった。
俺たちはそんな光景を見て、急いで少年たちを回収、

そのままダンジョンを脱出するために、
それぞれ班を作り、そのまま脱出に成功したのだった。
ちなみに後で思い出したのだが、
とり逃してしまったミノタウロスたちは団長たちで処理したらしい。
それを後で聞かされた時、動けていなかった全員が頬を引き攣らせ、
皆のお母さんことリヴェリア様に叱られたのは、もはや言うまでもないだろう。

戻ってきました（白いミノタウロスあたりから記憶がないけどネ）

～ロキファミリア　ナレッジの部屋～

どうも、ナレッジです。ついさっき目を覚ました僕は・・・

「み・・・みんな、く・・・苦しい・・・」

なぜか僕の部屋で寝ている明たちに押しつぶされています。

筋力足りないから抜け出せず、そのまま倒れていること数分。

「んにゅ」

という声を出し、明が体を起こして、それに引っ張られる形で全員が地面にたたきつけられる。

寝ていた所に唐突に発生したダメージのせいで、

それぞれぶつけた個所を抑えてうずくまってしまった。

とりあえずいうことがあるとすれば・・・

「みんな、大丈夫？」

直後、全員の動きが止まり、僕に視線を向けてくる。

「「「こっちのセリフよ（だよ）！この馬鹿！」」」
殴られました、本気ではなかっただろうけど、体が浮いた感覚、
そして、地面にたたきつけられた衝撃により、今度は僕がうめく事になった。
「なんでか全然起きないから、みんな心配していたんですよ!?」
「遠征終わってから二日間寝っぱなしってどういうことよ！」
「あげく、『みんな、大丈夫?』って、ふざけているのかしら貴方は！」
「あとでチキ達もお仕置きするらしいから、そっちも覚悟しておくことね・・・！」
どうやら僕は二日も寝ていたらしい。このごろよく寝込むのは何ゆえか・・・
遠征中も変な奴らに遅られてしばらく寝てたしなぁ・・・
「とりあえず、神様たちに伝えてくるから、
アリスさんたちは見張りよろしくお願いします」
「「「わかってる（わ）」」」
監視が付きました。そんな理不尽ぬぁ！
突然後頭部の衝撃に驚き、心の中でも変な声が出てしまったが、
とりあえず今はそれは置いておく。
自分の後方を見ると、そこにあったのはラティの腹のぶぶｎ
顔面に衝撃、長座体前屈している時みたいになってしまった。

顔と首と後頭部が痛い。犯人はチキとラティの模様。
「いてて・・・首が変に曲がった気がする」
「自業自得ね」
「ていうか、それで済んだだけまし。本当はその子たち、
糸で吊るして往復ビンタ（短剣（ラティ）の腹で）するって言ってたし」
ヒエッ
なんて話をしていると、廊下の方から走っているような音の後、
「ナレッジた～んー今っから宴会いくでー!!」
ロキが飛びかかってくる。咄嗟のことだったので、僕は反応できなかったのだが、
ベチン、ゴス、パシッ、メキャ
という音とともに、チキから伸びた布、ラティの柄、明が服をつかみ、
地面にたたきつけるなどが行われたことで、とりあえず被害は受けなかった。
チーン
なんて音が聞こえてきそうだが、
とりあえずアリスたちに先ほどのロキの言っていたことを聞こうと思う。
「で、宴会って何?どうしてそうなったのかが全く分からないんだけど」
「ほんとは遠征帰ってきて当日くらいに行こうとしたけれど、

ナレッジが寝てたから延期になったのよ」
「それで、目が覚めたって報告をしたら、さっきみたいなことになったんですよ」
なるほど、と思いながら、床に転がっている自分の主神（ロキ）を見る。
「なら、とりあえずそれを起こさないとだね」
チキを手にはめ、魔布を作る。ハリセンのような形を作り、概念付与で硬さを上げる。
魔力代わりと無くなってしまったが、とりあえず気にしないことにして、
全力でロキの後頭部をたたく。
ロキの叫び声が、ロキファミリアのホームである、黄昏の館に響き渡った。

宴会・・・？（そういえば、僕たち遠征で何もしてないよね？）

～豊饒の女主人～

どうも、ナレッジです。あのあと、ロキのことをたたき起こし、
他の皆と合流、ちょっとした用事を済ませ、
夜に現地集合と言って店の名前を言われました。
ちなみに今はアリスたちに言われ、性別変化で男性化中、
ロキ以外の全員が気が付かなかったようです。
といっても、別の席に座って、アリスたちもなぜか変装しているので、
他の人はそもそも見ていないかもしれませんが。
というか、変装で完全に別人にしか見えない四人がすごい怖いのですが・・・
適当に料理を食べつつ、ファミリアの方からの会話を聞く。盗み聞きではない。
ベートさんが何か他の人の悪口を言っている気がする。
食事の場でなくとも、僕個人としてはとてもやめていただきたい。
なんて思った直後、おそらく俺か私に意識を奪われたのだった。

～第三者視点～

唐突に響く打撃音と、何かが叩きつけられるような音に、全ての客がびくりと動きを止める。

その中には、ベートの発言を聞き、思わず逃げ出そうとしていたベル・クラネルの姿もある。

「すまない、あまりに耳障りだったので、つい足が出てしまった」

そう言い放つのは、黒いコートのようなものを纏った、白銀の髪の青年。

本人も、先ほどの言葉通りというか、どこかすまなそうな表情を浮かべている。

「テメェ!何しやがる!」

「先ほども言ったとおり、食事の時のマナーとかどうこう以前に、

あまりに耳障りだったのでつい蹴ってしまったといっただろう?

食事中にあのような話をされては、食欲も落ちるというものだ」

やれやれと言いたそうにそういう青年に、今度はベートが蹴りを飛ばす。

青年はベートの蹴りをはじき、そのまま道に放り出した。

「犬ならおとなしく庭ではしゃぎまわっていればいいんだ、わかったらそこにいろ、駄犬が」

周りから、スゲー、とか、なにもんだあいつ、みたいな反応がある中、

青年は店のカウンターにいたドワースの店主に向き直ると、
「今回は、このような騒動を起こしてしまい、大変申し訳ありません」
と、頭を下げて謝罪する。とはいっても、椅子、机、床や壁等に対する被害は全くなく、
あえていうなら集団客の一人が途中退場した程度なのだが。
「ふん、あんたの言っていたこともまあわかるし、物も壊してないから、
今回は明日の皿洗いで許す・・・が、今回だけだよ」
「ありがとうございます」
なんて話していると、後方からけりが飛んできたので、体をそらして回避し、
腕を捕まえ引っ張り、地面に倒して拘束する。
正体は案の定というか、ベートだったのだが。
拘束されたベートの上に乗り、まるで椅子に座っているようにしながら、
他のロキファミリアの方を向くと、
「というわけで、今回はこんな風に拘束させていただきました。
あ、私の事は、流れの元騎士とでも思っておいてください」
といって、ベートのことを投げ渡すと、
お金を払い、女性たち四人を連れて店から出ていくのだった。

2章　原作開始

ステータス更新（まぁ、何か言うほど上がってない・・・あれ？）

～ロキファミリア　ロキの部屋～

どうも、ナレッジです。僕は今、ステータス更新に来ています。

とはいっても、もう更新自体はしてもらって、今は結果に驚いているのですが。

「レベルアップしてる・・・」

ちなみに最後のステータスが、

ＬＶ　１

力：Ｉ０

耐久：Ｉ０

器用：Ｂ　７５０　→ＳＳ　１０５０

敏捷…Ｓ　９００　→ＳＳＳ　１１６０
魔力…ＳＳ　１０００　→ＥＸ　２０００
【スキル】
【絆の加護】
死んだ時、その魂は絆の元へ帰る。
その時、転生、もしくは、この世界で出会った友と共に世界を渡ることができる。
絆を繋げば繋ぐほど、一部のステータスに大幅なプラス補正
【神軍師のなりそこない】
力、耐久が一切増えない代わりに、器用、俊敏、魔力にプラス補正
【特殊防御陣】
パーティー全体の耐久を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。
【特殊攻撃陣】
パーティー全体の力、魔力を超上昇、自分には効果がでない。
常時発動、効力は魔力が多いほど高くなる。
【戦略者】
パーティー全体のステータスを１．５倍する。魔力を五×人数分消費する（常に発

動。
　自分には効果がでない
【性別変化】
　自身の性別を変化させる。任意で変更可
【残虐な王であり理想的な騎士】
　自身の前世のスペックを肉体、精神と共に取り戻す
【魔法】
【その護りは味方の為に】
　自分以外のパーティー全体に五回分の攻撃の無力化
　代償として、自身のステータスが一週間消滅する
【今まで救えなかった全ての者へ】
　一回のみ、死んだ者を蘇生、全ての傷を治す。
　代償として、体のどこかが使えなくなっていく。
　自身に使うことは出来ない
【僕は最弱、故に最強】
　自分以外のパーティー全体の魔法攻撃力（回復力も含む）を五乗
　代償として、一部の臓器が活動を停止する

【あの愛しき女神に捧ぐ】
自身を殺す代わりに、敵対者全てを塵に返す。魂は絆の元へ帰っていく。
【魔糸】
精霊の宿った特定の武器から魔力で作られた糸を出す魔法。
詠唱
『僕の魔力は全てを貫く糸となった』
『僕の魔力は動きを縛る強固な糸となる』
【魔布（まふ）】
魔糸によって作られたものを布にする。
魔力の最大値を犠牲にすると実体化し、永久的に消滅しないものとなる。
『全てを包め、全てのものを逃さぬように。魔布』
【命の歌】
仲間の傷、病気などの状態異常、あざなどを治す。
詠唱
『歌え、歌え、声高らかに、命の歌を、皆の心に響くように、
鼓舞するように、立ち上がれるように、
声高らかに、時に静かに、されど皆の心に響くように！

綴りましょうこの想い、現しましょうこの歌に、夢と希望に満ちたこの世界で、
きっとこれからも生きてゆく。命の歌』
【覚醒の時は来た】
自身の前世に深くかかわりのある人物、武器、防具を召喚する。
その存在を一時的に自身に付与することでステータスが一時上昇
詠唱
『覚醒の時は来た。（呼び出す者の名前）、今再び僕とともに』

だった。それで、レベルアップ後のステータスが、

ＬＶ　２
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
敏捷：Ｉ０

魔力：Ｉ０
新規スキル
【覚悟】
特定条件下でステイタスにプラス補正

新規スキルの覚悟だが、単独多々書くことが前提で、味方がピンチの時、敵が強大な時、
そして、自分が死にかけているときにのみ効果があるらしい。
あと、発展アビリティ？とかいうのも出ていた。
「で、共鳴（レゾナンス）って、どういう効果なんですか？」
「初めて見るし、わかるわけないやん・・・」
ちなみに、同タイミングでレベルアップしたらしい明たちにも同じものが出たらしい。
はっきり言って訳が分からないスキルなんてとりたくないが、
他に発現していなかったらしいので、とりあえずもらっておくことにした。
「あ、ちなみに記録更新やな、レコードホルダーってやつや」

「・・・?レコードホルダー?」
「たしかうちに入って一週間とちょっとくらいのはずやしなぁ・・・
はぁ、胃が痛くなってきたわ」
そういいながら、胃のあたりに手を置くロキをみて、少しだけ申し訳ないと思ったのでした。

怪物祭(お祭りと書いてあるので、とりあえず食べ歩きですかね！)

～オラリオ　広場～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「お、これなかなかおいしいね」

「こっちの味もおいしいですよ？ほら、あーん」

「こっちも食べなさい。折角全員別の味を注文したのだから」

「時々変な味があって思わず注文するか悩むくらいにはあったわね」

「いや、デスクリーム抹茶味とか、

アナゴキャラメルソフトクリームマシとかいう、

ゲテモノクレープに惹かれるのはどうかと思うけど・・・」

皆とクレープと食べながら屋台を見ています。

男状態なので、周りからの視線が痛いです。

ちなみにクレープには、他にも変な味がたくさんありました。

クリムゾンチキン～クリームと宇治抹茶ソフトを添えて～とか、

カスタードプリンと海鮮のチャーハン～ホイップ添え～とか、
まぁ、そんな感じのがあって、思わず全員で固まりましたね。
興味本位で買った人を一人だけ見ましたが、一口食べた後、
痙攣したと思ったら、泡を吹いて倒れてしまいました。凶悪どころではない。
そんなことを考えながら歩いていると、
「チェリーパイが売られている屋台がある」
まさか始めてみるパイが、チェリーパイだとは思いもしなかった。
『僕』が初めて食べるパイ。『俺』と『私』が結婚して初めて行った祭りで、
妻と共に食べていたのもまた、チェリーパイであった。
少し中の果実が甘く煮られ、
しかし、見た目からしてパイ生地はサックリとしていそうである。
果たして食べ歩きに向いているのかは疑問だが、とりあえず一個だけ買うことにした。
みんなとそんなにはなれないし、別に言わないでもいいだろう。
「すみませーん、チェリーパイひと・・・つ・・・」
僕の反対から出てきた人を見て、思わず固まってしまう。
「あ、アハハ、まさかこんなところで会うとは思ってなかったや」

「こちらも驚きを隠せないというか、仕事の方は大丈夫なんですか？絆様」
「うん、とりあえず仕事終わりだよ？ドールからも許可もらってるし」
そう言いながら、絆は買ったチェリーパイを口の中に入れる。
「思ったんですが、そのお金ってどこから出てるんですか？」
「ん？あぁ、時々ドールがこっちに来てモンスター倒してるんだよ」
ほら、と、紙を見せてくる絆。そこには、ステイタスが記入されていた。
「レベル５・・・」
低い・・・のだろうか？よくわからないが、
確かロキファミリアの幹部たちの多くもこんなレベルだった気がする。
「でも、スキルが異常ですね」
「触れてあげないでね、いろいろと事情があるんだよ」
特定条件下でレベルを五上げるとか、
世界特攻とか、ちょっとわけのわからないものまである。
「おい絆、勝手に動くなといっただろう」
そんな話をしていたら、人ごみの中からドールが出てくる。
「む～、ちゃんとに私言ったし。ちょっとあっちで買い物してくるって」
「俺が護衛かねてるって忘れてんのか？

そんな俺を置いていくように全力で逃げてんなよ」
とりあえずそれを聞いた僕は、絆をじっと見る。
「にゃっはっは、ドールでは吾輩を止められないのだ～ってね」
愉快そうに笑う絆を見て、ドールが頬をぴくぴくさせる。
「ほう、よくわかったわ。今日ご飯抜きな」
「・・・えぇ!?」
「うっし、こいつに対する罰も決まったし、じゃあな、ナレッジ」
「ちょ、それだけは勘弁して～！」
そういって、二人は去っていくのだった。
「まるで嵐みたいでしたね」
「ナレッジ、とりあえず周辺の食べ物はある程度食べたから、そろそろ帰るわよ」
「それにしても、チェリーパイなんて懐かしいもの食べてたのね。
一口だけもらうわね」
アリスはそういうと、僕が一口だけ食べたチェリーパイを小さく食べる。
「味もあの時と同じとは、驚きだわ」
全くである。似てる、近い味、ということはあっても、
まったくもって同じ味というのもまた、そうあるものでもないだろう。

なんて考えていると、クロワッサンも横から食べる。
「これ、結婚した後初めて祭りで食べたチェリーパイと同じ味ね」
「?あ、あぁ!なんか聞き覚えのある声だと思ったら、
アリス様にクロワッサンお嬢様じゃないですか!
ということは、そちらの男性はナレッジ様ですか?」
「「・・・え?」」
露店でチェリーパイを売っていた女性がそう声をかけてきたことに驚き、
思わず固まってしまう。
「・・・だれ?」
「さぁ?」
「どこかで見覚えが・・・ないわね、うん」
「ひどい!千年前にもパイを買いに来てくれたじゃないですか!ほら、結婚式の後!」
結婚後、パイを買いに・・・?
「え?あのときの店員さん?」
「そうですよ?いやぁ、まさか気が付かれないのは悲しいですわ」
「むしろ僕としては、君がまだ生きているという現実に驚きだよ」
そんなことよりも、世界が違うのにいるっていうのにも驚きだけど。

「はは、なにせ長寿な種族なので」
「世界わたるのはふつう無理でしょ」
「あぁ、私、変な現象に巻き込まれやすいんですよ。
　でも、私が移動したタイミングって、
　実はナレッジ様が死んだ日ばかりなんですよねぇ」
　不思議ですね、なんて言ってくる店員さんに、思わず頬を引き攣らせる。
（絶対僕の転生に巻き込まれてるよねこの人）
「確かに不思議ですね」
　とりあえずごまかすことにした。正直に話すようなことでもないだろう。
「本当ですよね。（すみません、これ一つください）あ、はーい。
　それでは、機会があったらまた来てくださいね」
　そういって、店員さんは他の人の接客に戻っていくのだった。
「・・・帰ろうか」
「「「そう（だ）ね」」」
　そうして、僕たちは自分たちのファミリアへと帰っていくのだった。

レベル上がってから初めてのダンジョン（また襲われる）

～ダンジョン　１０Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、ダンジョンに潜っているのですが・・・

「嫌な予感がするんだけど・・・」

寒気というか、悪寒というか、こう、嫌な予感がするんですよね。

「お姉ちゃんもですか？私もなんというか、

十八階層の変なローブの人たちに襲われたときみたいな嫌な感じがするんですよね」

そう、まさに明が言ったのと同じ感覚である。

それに加えて、全身を舐め回すようなこの視線がとても気持ちが悪い。

ふと感じた嫌な予感に、咄嗟に前に転がる。

後ろを向く、先ほどまで自分がいたところには、大剣が振り下ろされていた。

「あの時と同じ人ですかねぇ！『縛れ魔糸』！『防壁魔布』！」

魔糸の効果で相手の足を縛り、防壁魔布の効果で一時的に相手を隔離する。

その場からさらに離れる。直後に一閃、霧が裂かれ、鼻の前まで風を感じる。

霧のなくなったエリアから、大剣を持ったローブが迫ってくるのが見える。

「ラティ！腐敗毒！」
ラティを持ち、横に跳ぶ、大剣が地面に突き刺さったのを確認しないで、
先ほど自分がいたところに向けて投げる。
「ぬ」
先ほど自分のいたところから声が聞こえる。
見てみると、大剣の刀身、その付け根が融けていた。
『ブギィ』
後ろから聞こえる声、咄嗟にその方向を向くと、オークが棍棒を振り下ろしてきていた。
「お姉ちゃん！」
僕とオークの間に、大剣を盾のように構えた明が間に入ってくる。
ドゴッ
明の武器であるグラから鈍い音が聞こえる。
「この！邪魔です！」
明はグラを斜めにして棍棒を流し、オークの首を跳ねる。
しかし、忘れてはいけない。僕らの後ろには、あのローブがいるのだ。
明の方に跳び、魔糸で明を引き寄せつつ、先ほどいた場所から離れる。

腰の鞘に戻ってきたラティを再び抜く。
魔布はともかく、魔糸はここでは基本役に立たないからだ。
これがまだ木が生えてて、森のような場所なら、洞窟のような場所なら問題はなかったのだ。
しかし残念ながら、ここには壁もなければ木々もない。
身を守るためにも、ラティは持っている必要がある。
風を切るような音が聞こえた気がした。咄嗟に後ろに跳び、ラティを投げる。
明はそのままの勢いで後方に投げる。
「ちょ、合図はほしかったよお姉ちゃん！」
「ごめん！咄嗟だったからむｒ」
直後、脇腹に走る衝撃とともに、僕の体は宙に浮き、そのまま真横に大きく吹き飛ばされる。
「ゴブッ」
血の味がする。うまく呼吸ができない。目の前がちかちかする。
『ったく、なさけない。もっとうまく立ち回れよな？』
『俺』がそう話しかけてくる。無理を言ってくれるものだ。
僕のステータスなんて、それほど高いものじゃないのに。

『ちょ、急いで回復しないと！ていうかその前に、一回防壁を・・・！』

そんな声が聞こえた気がする。

この声は確か、キュウイと名乗った狐の少女の声だ。

そういえば、僕の守護霊だって言ってた気がする。

「お姉ちゃん!?この！あなたは一体何なんですか！

いきなりあらわれて、攻撃を仕掛けてきて！」

明が戦っている音が聞こえる。

「そこ！」

「追撃行くわよ！」

「伊達に高レベルじゃないのよ！」

アリス、クロワッサン、水奈の声と攻撃。

そして、それを軽々とかわすローブの姿が見えた気がした。

『助ける力がほしいですか～？』

今まで聞いたことのない声が聞こえる。そして、それに対する解答なんて決まっている。

（ほしいさ、全部なんて言わない。あいつらを護るためだけに）

そう、言ってしまうなら、あいつらさえ守れればあとはどうでもいいのだ。

それが、自分自身を犠牲にするようなことであったとしても、
僕という存在を、無意識ながらに助けてくれている彼女たちさえ無事ならば。
『やっぱり私のマスターは狂ってますねぇ。
世界を超えてまで、自分がどうなるかわかってるのに、私を手に取ってしまうんですもん』
ふと、目の前に白と紫の槍のようなものが見える。手を伸ばす。
手にとって、それをよく見るために。記憶が流れてくる。
何ゆえだろうか、その記憶が、他世界における自分自身の記憶であることがわかる。
それに加えて、彼女との記憶もよみがえってくる。
そうだ、彼女の名は・・・
「来てくれ、ジャガーノート=ルナ」
この世界に来て初めて、本来存在しないはずの記憶から現れた、彼女の名を呼んだ。
『やっぱりマスター、狂ってますねぇ、救えないほどに♪』
先ほどキュウイがどれほど直してくれたのかはわからない。
しかしまぁ、体がイカれる前に倒さなければならないだろう。
だって彼女は・・・
「十秒で片を付ける」

『狂わないといいですねぇ！』

使用者すら狂わせかねないのだから。

覚醒（体が軽くなったみたいだ）

～ダンジョン　１０Ｆ～

一突き、ローブの懐に入り込み、心臓に向かって突き出す。

咄嗟に後ろに跳んだローブの肌を、軽く刺す。

一薙ぎ、首に向けて振りぬく。軽く首を斬るだけで終わってしまう。

魔力を込め、声を張り上げる。かって、多く使用した力を開放する。

『Ｌ．Ｕ．Ｎ．Ａ．Ｃ．Ｙ．』！」

直後、ローブを囲むように光の柱が現れ、ローブを襲う。

「フンッ！」

ローブそれを、地面に拳で穴をあけることで回避場所を作り、別な穴を作り出てくる。

もはやマイクラとかの世界の住人みたいに見えなくもない。

しかし、それでもさすがに無傷とはいかなかったのだろう。

出てきた穴の近くには血がついているように見える。

しかし思うが、いつから僕はこんな視力が上がったのだろうか？

まあいい、ローブの前まで走る。攻撃があてられる距離まで来たら、

空中で体をひねりながら振り下ろす。
ローブは右斜め後ろに跳ぶ。
しかし、衝撃によって大きく吹き飛ばされ、木に背中を打ちつける。
きっちり十秒。ジャガーノート＝ルナを返還する。
同時に体に走る激痛に、そのまま倒れてしまう。
筋肉痛に近い感じの痛みに、顔をしかめる。
「明たちは大丈夫でしょうか・・・」
「こっちのセリフよ。嫌な予感がしたから、とりあえず遠くに逃げてたけれど」
「帰ったらきちんと話してもらうわよ？」
「さっきの武器、私が打ったものではないわよね？いったい誰が作ったものなのかしら？」
「もしかしたら死んじゃうんじゃないかって心配していた私たちにそれいいますか？
お姉ちゃん、帰ったらリヴェリアお姉ちゃんに叱ってもらいますから」
「デスヨネー・・・ついでにお願いできるなら、あの人といっしょに運んでくれるかな？
ちょっと今動けなくって・・・」
それを言うと、その場にいた全員に呆れたようにみられる。
やめてください。そんな目で見ないで！なんて思いつつ、地面に顔を伏せる。

ため息とともに、僕の体が浮く。確認すると、クロワッサンが持ち上げてくれたらしい。

ローブの方は、どうやら明と水奈が持っていくらしい。アリスはそんな僕たちの護衛だ。

「さて、それじゃあ速く上に上がるわよ。長い間貴方たちを護れる保証もないし」

そうして、僕たちのレベルアップ後の冒険は終わった。

そういえば帰っている最中、ウサギのような少年と、

大きなバックを背負った少女を見かけたが、

あの少女の眼、どこかおかしかったったような気がする。

まぁ、僕たちには関係のないことなので、そのあとすぐ忘れたのだが。

ある日ダンジョンの中で牛に出会った（言ってる場合ですか！逃げますよ!?）

～ダンジョン～

あれから何日かたち、僕たちは再びダンジョンに潜っている。

「で、安定のイレギュラーこと牛さんに出会った、と」

「牛じゃなくてミノタウロスです！早く逃げますよ！」

ちなみにここは・・・たしか五階層だった気がする。目の前のミノタウロスの色は緑、ていうより、苔が生えてるように見える。

おそらく強化種だろう。あの白いやつと同じように。

そこまで確認したら、もうすることは決まっているだろう。そう、

「全力で逃げるに限る！『魔糸』！」

魔糸をばらまき、通路妨害をしながら逃げる。

ていうか、すごい嫌な予感がして早くこの場から離れたい。

あれだ。ローブの正体だったレベル七の、

オッタルとかいう人よりはまだましな気配ではある程度、

うちのファミリアの、ベートさんと同じくらいだと思う。
どうやら、これが彼、オッタルの言っていた世界の修正力というものらしい。
「あ、魔糸引きちぎられた」
「秒も持ってないじゃないですか！毎回だからずっと思ってたんですけど、
いったいどれだけあの糸に魔力使ってるんですか!?」
「そんなこと話している暇あるなら前からくるミノタウロスをどうにかしなさい！」
「さすがにこの数は対処しきれないから、一点突破で行くわよ！」
そういうと、アリスとクロワッサンが前方の壁から　湧いて出たミノタウロスに攻撃を仕掛ける。
・・・待て、湧いて出た、って、おかしくないか？
「二人とも！急いで下がって！別の通り道に行くわよ！」
水奈がそう叫ぶ。それに従って、二人は一体ずつ頭に武器を刺すと、
その体を踏み台にして僕たちがいたところに戻ってくる。
確かにここには複数の道がある。
しかし、先ほど行こうとした道と比べて、そちらには少し問題があるのだ。
「そっちの道は、下に行くための階段しかないですよね!?」
そう、あくまで残った道は下りの階段、

つまるところ、今いる階より強いモンスターが出る。
しかし、それ以外に道がないのも事実である。それなら、もはや迷うことはできない。
「降りるよ！十八階層までとはいかないでも、他に冒険者がいそうなところまで！」
「パスパレードをするっていうんですか!?お姉ちゃんは！」
「悪いけど、僕はあくまでこのパーティーのリーダーだ！
他のパーティーが死ぬくらいならまだしも、
このパーティーから死者を出すわけにはいかない！『魔糸』！」
一人でもここに残るとでも言いそうな明を魔糸で捕まえ、水奈に持ってもらい、
そのまま階段を降りていく。アリスたちもそれに従い、僕たちの後方を走る。
そして、目の前に階段が見えたその時、
ゴシャ　バキッ
僕の体が横に吹き飛ばされる。腕の方から聞こえた音的に、おそらく折れているだろう。
ガゴッ
僕は体を壁に打ち付け、そのまま意識を失った。
最後に見えたのは、拳のように盛りだした壁と、
それをよけている水奈たちの姿だった。

こんなところでお姉ちゃんを死なせないんだから！（殺すわ、全力で！）

～ダンジョン　5F～

ナレッジ（お姉ちゃん）が横に吹き飛ばされる。

そんな光景に、頭が冷えていくのがわかる。

運ばれている（走っている）私の背後から牛の声が聞こえる。

横から伸びてきた拳を全員がよける。ナレッジ（お姉ちゃん）が目を閉じる。

糸が斬られる（糸を斬る）。私（明）を降ろし、武器を持つ（武器を構える）。

殺意がわいてきた。何も考えられなくなりそうだ。

私たちの体の周りに、黒いもやがかかる。

私たちの目の前に牛が現れる。邪魔だ。そう、だから・・・

「「「死（ね）になさい、貴方たちは（が）邪魔なの（です）！」」」

水奈は糸を固めると、敵の中心に向けて投げつける。

「『爆ぜろ』」

その塊が、ミノタウロスたちの頭を貫く。

まだ足りない。
クロワッサンが魔石のあたりを連続で突く。
魔石ごと砕かれ、ミノタウロスたちが灰になりかける。
まだ足りない。
アリスと明が残りの部位をすべて消し飛ばす。
超重量で振り回されたグラの一撃により、
通路ごとダンジョンの５階層が崩壊し始める。
まだ足りない。
だって、さっき消し飛ばした奴らの中に、最初にあった苔の生えたやつがいない！
私（明）が八つ当たり気味にグラを壁に振るう。
周辺の壁を破壊して、大きな広間になった。
私たちから逃げようとしている牛を見つける。
あいつだ、あの苔の生えたミノタウロスだ。
全員で駆け出す。容赦も慈悲もくれてやるものか。ただただ全力で武器を振るう。
一撃目、水奈の攻撃が弾かれる。
二撃目、アリスの武器がのどに突き刺さる。
ミノタウロスの首が千切れかけそうになるが、すぐにくっついた。

三撃目、魔石のあるはずの部分をクロワッサンが貫く。
防ごうとした腕ごとその姿を歪なオブジェに変換したが、すぐに治った。
四撃目、頭、胴体、下半身を明が砕く。
腕から治ろうとする。二人で一つずつ、
再生が止まるまでひたすらに武器を振り下ろし続ける。
刺して、裂いて、砕いて、斬って、穿って、だたそれを繰り返す。
機械的に、まるでひたすらに同じ動作を繰り返す人形のように。
そんな彼女たちの奇行は、
他のファミリアの人間が地上でおきた地震の原因を探るために降りてきても止まらず、
その光景を見た冒険者たちは、元に戻ったダンジョンの通路、
その血の匂いの濃さ、その中心にあったうごめく肉塊から、
しばらくは肉を見るだけで吐いていたという。
そんな彼女たちは、肉塊が動かなくなると同時に、ナレッジを回収して、
血まみれであることにすら気が付く様子無く、平然とその場を後にするのだった。

変な奴らに情報提供させられています（覚悟できてるよな?）

～ロキの部屋～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「え?五階層で何かあったのか?・・・変なミノタウロスに襲われて、逃げてる最中に気を失ったくらいですけど?そのあとのことはちょっとわからないですが」

「五階層が立ち入り禁止になるレベルでぶち壊したパーティーのリーダーの発言とは思えんな」

ロキ意外にもなぜかいた男神に五階層でのことを話させられています。

「そもそも僕たちみたいに低レベルの冒険者がそんなことできるわけないじゃないですかぁ。

第一、それが僕たちだって確信したのはなんでなんですか?

もしかしたら他の人だったかもしれないんですよ?

これ、こちらからしたらとても不愉快なんですけど。

それと、そんな力があるなら神なんぞぶち殺して平和に暮らすんですがねぇ」
「貴様っ！仮にも我らの前でそのようなことを言うとはいい度胸だな！」
何やら切れているようだ。しかし、それはこちらとて同じである。
「てめぇこそ覚悟できてんだろうな？
うちの嫁たちに手を出そうとした以上僕（俺）（私）は容赦しねえぞ？」
そう、僕たちのパーティーがダンジョンから出た直後、なぜか捕えられ、
僕はロキの部屋に、それ以外はどこかに連れ去られてしまったのだ。
その時、彼女たちを連れて行ったのも神や、冒険者だった。
そして、その冒険者たちの視線を思い出すだけで、僕は殺意がわいてくる。
「ハッ！手足を縛られておきながらよく吠える！
貴様ではその縄をちぎることなぞできまい！」
神はそういってくる。確かに、僕だけならこの縄を解くことはできない。
しかし、あまりにもこいつは僕のことを知らなすぎる。
なにせ、武器の一つだって取り上げられていないし、何なら魔法も使える。
「ロキ、これは、貴方も同じ意見ということでよろしいんですね？」
近くにいたロキに、そう話しかける。
「・・・そうや、うちのファミリアのためにも、

いつ爆発するかわからん危険物は置くことができへん」
何かに耐えるようにそう言い放つロキに、僕は軽く絶望する。まあいい。
「・・・それだけ聞ければ十分、もういいさ、どうせこうなるんだろうなって、どこかで思っていたしね」
何せ、どの世界でもそうなのだ。アリスのいた世界でも、クロワッサンのいた世界でも、
そして前の世界でも。僕は仲間だと思ったやつに裏切られて死んでいたらしいから。
いや、正確には直接的に関わりがあったのは1つ、残りの二つは間接的な原因なのだが。
「なら死んでくれ。来てくれ、ジャガーノート＝ルナ」
「マスターさん、やっぱりどこの世界でもこんな目に合ってるんですねぇ?
狂ってますねぇ、あなたの周りの環境も、そんな環境を理解して適応しまったあなたも」
そういいながら、ルナは縄を切り落とす。
「さぁ、そんな世界は救ってしまいましょ?救うところ見せてくださいよぉ」
「対価は胃だ、俺」
『いらん、むしろこいつらを殺せるならこっちが払いたいもんだ』

次の瞬間、ロキファミリアが土地ごと焦土になった。
死者数はわずか二名、男神とロキである。
その二人から恩恵を与えられていたファミリアのメンバーは恩恵を失い、
途方に暮れたという。
そして、それを行った者の顔は、とても悲しそうだったらしい。
その日、神殺しの犯罪者として、ナレッジの名は世界に響き渡った。
彼のパーティーメンバーも含めてである。

ダンジョンでの生活（そしてタイトル詐欺の予感）

～???サイド～

偶然出かけたとき、私の店で服を買っていった、三つの魂を宿した少女が、
神殺しの犯罪者になったと聞いた。思わず笑みがこぼれる。やっぱり彼女も、
私と同じように、少なからず神を憎んでいたのだろう。理不尽な運命を与えてくる、
あの忌々しい三神どもを憎んでいた私と同じように。
ならば会いに行こう。その道の先駆者として。
あの人族の神と同じ香りのする女に転生させられた彼女、いや、彼を、ね。

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、ダンジョンのセーフティエリア、
巨大な結晶の下で話し合っています。
「あはは、ごめんね、僕が暴れたのに巻き込んで、君たちまでついてきてもらう形になっちゃって」
他の四人と一緒に。あのあと、『俺』が全力で探し出して、
魔糸モドキ（チキは使えなかったらしい）まで使って全員をここに連れてきたのだ。

あんなことしてすぐだったので、幸い情報は回ってらず、
僕達は捕まらずにダンジョンの中に入れたのである。
「それは全然かまわないのですが、恩恵がなくなってもなぜ私たちは普通に戦えるんですか？
グラも軽く持ち上げられましたし」
「私も、店の武器全部持ってこれたし」
「いや、それは鞄一つに収まったでしょ」
「その魔法の鞄反則よね・・・重量も感じないんでしょ？」
「まあね、魔布から作った鞄だから、とりあえず人数分用意してあるけど、使う？」
「「「助かります」」」
ちなみに僕たちの服はあの店で買ってきたものしかないためか、全部無事だった。
『多分、あの共鳴とかいうアビリティ？の効果ね。
一番強い人の存在に合わせてその能力を持っている全員を強化する、
みたいな効果だと思うわ』
チキがそういってくる。突然しゃべられたので驚いた。
しかしなるほど・・・とはならない。なにせ、ステイタスがすでにない以上、
恩恵の効果は皆無だろう。

「確かだけど、普通はステイタスが背中に出るから、そこを見ればわかるんだよね？」
他の皆を見ながら言うと、全員が頷いてくれる。
まぁ、見たところで何もないだろう、なんて思いつつ、とりあえず上の服を脱ぐ。
全員が僕の背中を覗き込むと、え？と声が聞こえる。
「ステイタスがある・・・」
「・・・はい？」

ナレッジ
ＬＶ　エラー　現在表記することはできません
力：ＥＸ？
耐久：ＥＸ？
器用：ＥＸ？
敏捷：ＥＸ？
魔力：ＥＸ？

聞いた感じのステイタスはこんな感じ。
元のステイタスは忘れたので差がわからないが、とりあえずおかしくなっている。
というか力とかが跳ね上がってどうかと思うのですが・・・・
それと、もともとあったスキルは消滅しているらしい。
それの代わりに出たのが、

スキル
魔剣保持者
魔剣召喚時ステイタス強化、魔剣少女の召喚を可能にする。
また、力を開放することができる。
神殺し
神を殺した者に与えられる称号。
神、あるいは、それに属する者に対して特攻、特防を得る。

アヴェンジャー
復讐するもの。理不尽に怒り、憎悪のまま暴れまわったものに与えられる称号。
ステイタスとレベルを一時的に五段階昇華させる。
ブラッティキング
カリスマ、知略、戦略、そして暴力すらまき散らす厄災をまき散らした王に与えられる称号。
そこにいるだけで仲間以外を威圧し、精神の弱いものは発狂させる。
血に濡れるたびステイタスにプラス補正。最大三倍
逸般人
本来人間だったものがあらゆる可能性を踏み超え昇華したものに与えられる称号。
人の形を持つものに特攻、特防を得る。
キュウイの加護
狐の神キュウイに加護を与えられたものに与えられる称号。
ステイタスの上昇上限を消失させ、ステイタスが上がりやすくなる。
劇物作成
概念的な死を与える毒から魂単位で回復させる回復薬までなら生成できる特殊スキル。

知識は『俺』が持っている。
愛を捧ぐ（親愛）
特定戦闘時耐久、俊敏にプラス補正
ステイタス全体に成長補正
対象を愛し続ける限り効果が持続する。
凶悪なる王
魂を持つものに特攻を持つ。また、異界の門すら開くことができる。
門の通じる先は、過去の自分たちの存在した世界である。
敵対者を殺すごとにステイタスアップ
三魂一体（さんこんいったい）
三つの魂が混ざり、互いの能力を加算、増幅させる。
本来に比べスキル数と魔法数の限界数が跳ね上がる。
また、ある程度の記憶を共有できる。
戦闘スタイルによっても意識を切り替えることが可能
世界に反逆するもの
抑止力に対抗できる特異体質を持つものに与えられる称号。
世界に属しているものに特攻を持つ

そして時には神として
神性を持つ。ステイタスの更新などを行うことができる。
また、認識が阻害されることでダンジョン内でもステイタスの更新が行える。
ただし、効果は魔法、パーティーの効果内の人物のみである。
愛の果て
ある種の呪いともいえる称号。
愛する者が死んだとき、同時に死んでしまう。
代わりに、その対象のすぐそばに転移。
また、楔のような形で打ち付けた魔力痕にも転移できる。
共鳴
本来発展アビリティだったものが変質したスキル。
愛する者に対してステイタスを一時的に分け与える。任意で発動
感情が重なるとき、特殊な効果が発動するときがある。
デメリットとして、このスキルを持つものが一人でも死んだ場合、
連鎖的に全員が死んでしまう。
解放
復讐の闇　憎しみや怒りの感情が重なり解放された。

ステイタスを跳ね上げる。全員に憎しみ、怒りの感情がないと発動しない。
前提条件として魔法、パーティーを発動させておかなければならない。
周りの声が聞こえず、原因をひたすら苦しめ殺すことに特化する。
なお、解放時の影響からパーティー内の誰か一人が気絶状態でなくてはならない。
技能再現
過去の自身が行った武術や歩法を完全に再現する。
解放
縮地
秘剣・燕返し
ナインライブズ
三段突き
秘剣・鎧通し

とまあ、これだけスキルが出ている。ずいぶんチートになった。
というか三魂一体って、つまるところ本来速度、魔力特化だった僕のステイタスに、

他の二人のステイタスがたされて、それを強化、スキル、魔法を共有、
威力などを増幅させるってことかな？
あ、共鳴もある。ていうかスキルに移ってる・・・
でもこの中で一番疑問なのが、技能再現だよね。
秘剣・鎧通しって一体・・・剣なら貫くとか斬るくらいしかないよね？
鎧通しって拳の技のイメージがあるんだけど。
なんて考えていたら、頭にイメージがわいてくる。
・・・これの通りに体を動かすのは、ちょっと僕には無理かなぁ・・・
縮地がぎりぎり、それの応用というかで三段突きができればいいくらい。
ナインライブズが武器しだいだけど、
重い武器の方がいいなら僕には厳しいかもしれない。
鎧通しは・・・できなくはないかも？
使ってるの剣じゃなくて短刀だと思うんだけど・・・
燕返しは武器がないから無理。昔の僕は何考えてか知らないけど素手でやってたけど、
僕にはまねできそうもない。
ちなみに魔法はあった。内容がこれだ。

パーティー
対象指名型魔法
魔法の効果内のメンバーのステイタス、状況などを事細かに視界の端に表示する。
また、効果内のメンバー全員にもその効果は発揮される。
表示量は任意で変化させることができる。
効果は意図的に解除しない限り消えない。
また、少量の魔力で会話することができるようになる。
『我、ここに契約を結ぶ。仲間として共に歩んでくれ　パーティー』
チェンジキング
自身の意識と武器を王の時のものに変える。
『交代だ、俺』
チェンジナイト
自身の意識と武器を騎士の時のものに変える。
『交代だ、私』

サモン
過去にかかわりのある存在を召喚できる。
『今、我との縁を楔とし、その存在を現せ　サモン』
上の詠唱のサモンの後に、召喚した対象の名前を言うことで、特定対象を召喚できる。
代わりに大きく魔力を消費する。
言わない場合、魔力消費は少なくなるが、対象がランダムになる。

とりあえず一番上のは使っておこう。
残りの二つは、まあなんとなくどんな効果かわかるので放置。
多分パーティーを唱えたうえで、そして時には神としてとかいうスキルを使うんだろうな。
そう書いてあるらしいし。なんて考えつつ、詠唱をする。
「『我、ここに契約を結ぶ。仲間として共に歩んでくれ　パーティー』」
あ、誰にかけるのかわかるようにマーカーみたいのが見える。
とりあえずそれを全員に合わせ、そのまま魔力を消費すると、

視界の左上のところに名前やステイタスが表示されていく。
あと、緑と青のゲージが出てくる。
それの横に書いてある、ＨＰ、ＭＰをみるに、体力とか残り魔力量なんだと思う。
それを証明するといわんがばかりに、
パーティーの魔法を使った僕の青のゲージが少し減っている。
それと、全員が共鳴のスキルを持っていた。
ちなみに、他のメンバーのステイタスがこれだ。

星野　明
ＬＶ　３
力：ＥＸ　２０００
耐久：Ｃ　６００
器用：Ｅ　４００
敏捷：ＳＳＳ　１１００
魔力：Ａ　８５０

とまあ明がこんな感じ。レベルは僕以外は3みたいだね。
それと、全体的に高いが、力がずば抜けて高い。次に高い俊敏の倍くらいある。
元あったスキルや魔法は消えていたけど、ひとつだけ新しく出てた。

貴方に捧ぐ私の愛
ナレッジが死ぬまでステイタスアップと成長補正
代償としてナレッジが死んだときに命を落とし、その魂に寄り添い続ける

このスキルだが、これも僕以外の全員に発生していたものだ。
ついでに言うなら、他の皆も含めそれ以外のスキルも魔法も発生していないので、

これ以降はどちらも説明を省略させてもらうけど。
次はアリスだな。

アリス
力：Ｃ　６００
耐久：Ｅ　４００
器用：Ｂ　７００
敏捷：ＥＸ　１２００
魔力：Ｂ　７２０

俊敏以外は基本平均かな？一つだけ四ケタ言ってるけど。
耐久が低いのは、たぶん全然攻撃を受けてないからだと思う。
いや、全然受けてないっていうか、まともにあたったのを見た記憶ないんだけど。

とりあえず次はクロワッサンだね。

クロワッサン
力：Ｄ　５００
耐久：Ｄ　５５０
器用：Ｂ　７００
敏捷：ＳＳＳ　１１００
魔力：Ａ　８００

あまりアリスと変わったところは見えないけれど、
なぜか耐久が若干高くって、敏捷が少ない。
どちらかというと、首などを狙った攻撃がしやすくなっていそうなステイタスだ。
まぁ、似ている理由は二人の武器種が同じだからだろう。

最後に水奈だけど・・・

岩鋼　水奈
力：ＥＸ　２０００
耐久：ＥＸ　１２００
器用：ＥＸ　３０００
敏捷：ＳＳ　１０００
魔力：ＥＸ　４５００

一番おかしくなってる。どうしてこんな数字になってるんだ？
「あれ？レベル下がってる」
水奈さんはそういいながら首をかしげる。思うのだが、そんなことはあるのだろうか？

聞いたことはないが、実際に起こっている以上なにも言えない以上気にするだけ無駄か。

とりあえず、ステイタスとスキル、魔法を表示しないように設定する。

ずいぶんをわかりやすく、緑と青のゲージだけが見えるようになった。

そこまでやったところで、近くの森からガサガサと音が聞こえる。

全員が武器を構え、音から離れるように遠くに跳ぶ。

「そんなに警戒しないでほしいわね」

そういって現れたのは、ファンタジードレスショップの店員をやっていた女性だった。

しかし、店で見せていていた表情と全く別の、まるで同類でも見つけたかのような笑みに、

背筋のあたりがぞくりとするような感覚に襲われるのだった。

話をしよう（初めから問題発言に聞こえるのですがそれは!?）

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。僕は今、

「それで、涼華さんは元いた世界を全壊させて、

別の世界であるこの世界に引っ越してきた、と」

「そうなるわね」

ファンタジードレスショップの店員さんこと、涼華さんから話を聞いています。

ちなみに、他の皆は涼華さんを警戒するように武器を片手にこの話を聞いています。

「それで、その世界で殺したはずの神様と同じ匂いをさせている僕が、

神を殺したと聞いてここまでやってきた、と」

そこまで言っておきながら、自分の頬が引き攣っているのがなんとなくわかる。

「ええ、三人いた神様のうちの一人と全く同じにおいがするものだから、

少し気になってはいたけれど、『貴方は転生者か何か？』

なんて聞くわけにはいかないから、どうしようかと考えていたらこんなことがおき

て、
今がちょうどいいタイミングなのでは？って思ってココに来たのよ」
まぁたしかに、唐突にあなた転生者？なんて聞かれたら答えないだろうな。
と言うよりも、なぜ転生者だと思ったのだろう。
絆様みたいに姿を少し変えて地上に降りてきているかもしれないのに、
転生者に限定して聞いた理由はなんだ？
そんな風に考えていると、アリスが涼華に話しかけていた。
「それで、それを聞くだけなのかしら？私にはまだ何かあるように見えるのだけれど」
「まあ否定はしないわね。特に重要でもないから、あとで聞こうと思っていただけで」
「そう、それで、何を聞こうとしていたのかしら？
私たちの前で話せない、なんてことはないわよね？」
「そりゃどこで話しても平気だけれど、
質問は一つずつの方が分かりやすいでしょう？」
楽しそうな笑みを浮かべた彼女は、僕の方を向いてくる。
「その前に一つだけ聞かせてくれ」
「なにかしら？」
「なぜ僕が転生者だと思ったんだ？

こんな世界だ、神が姿を変えて降りてきたとしてもおかしくはない」
「あぁ、それに関しては簡単なことよ。貴方に魂が三つ存在していたから。
神は一つの魂のみしか持たない。例えどれ程他の神を殺し権能・・・
対象の力を振るえるようになったとしても、魂が大きくなるだけで、
複数の魂を共存させることができないの」
なるほど、つまるところ、僕の魂が一つじゃないのを見抜いていた、と。
一体どんな目を持ってるのかが気になりますが、
気にしても無駄だと思い思考の中から放り出す。
「まあいいかな。うん、僕は転生者だよ。聞いた話によると、
僕は合計して三回ほど転生を繰り返しているらしい」
「聞いた話？自分で体験したことなのに、貴方は覚えていないの？」
それを言われると痛いが、別にごまかすことでもない。
そう思い、僕は説明することにした。
「簡単に言うなら、僕じゃなくって、僕の中にある、
貴方のいうところの他の二つの魂がその記憶を持ってるんだよ。
だから、詳しいことは僕にはわからないってこと。貴女が来る直前に、
ステイタスを更新・・・更新？してから、少しずつ分かるようになってきたけど、

それも記憶というよりは、絵と文字で説明されている記録みたいな感じだしね」
「なるほど。それであんな言い方をしたのね」
どうにか納得してくれたようだ。というか、納得してもらわなければ困るのだが。
なにせ、これ以上話せることがない。これ以上この話を続けることもできないので、話を別のことにうつすことにする。
「それで、もう一つの質問は何かな？」
彼女が言っていた質問、最初の一つに答えたが、もう一つあると先ほど言っていた。
それを聞くために、僕は改めて彼女を見る。
「え？あぁ、もう一つね。なら聞かせてもらうけど」
貴方、神が憎くない？
彼女は薄く笑みを浮かべながら、こちらがぞっとするような声でそういった。

そのころ地上では

～ギルド内　ベル視点～

僕たちがダンジョンから出てすぐ、ダンジョンに入場規制が行われた。
なんでも、神様の二人を殺した人物がダンジョンに逃げ込んだらしい。
中に入っていた冒険者たちにもそれは伝えられ、
現在はレベル五以上の冒険者でなければ入れないことになっている。
そんなギルドの一角で、僕はとある人たちにつかまっていた。
「というわけで、君たちのファミリアに入れてもらいたいのだけれど、
神へスティアに話を通しておいてくれないだろうか」
「はっ、はいっ!?」
何を隠そう、今はなしているのは、
『元』ロキファミリア幹部であるフィン・ディムナである。
僕が緊張しないわけがない。
というか、なぜうちのファミリアに入りたいといってきたのかがわからない。
「で、でも、なぜ僕のファミリアなんですか?こういっては何ですが、

ホームだっておんぼろで、あまり多く人が生活できる場所じゃないですし、
お金もそんなにないから食事だってあまりいいものは出ませんよ？」
そこまで言ったところで、フィンさんは何が面白かったのか、クスリと笑うと、
「それはもう、君がいるからとしか言えないんじゃないかな？」
といってくる。僕がいるから入るって、一体どういうことなのだろう？
「だって君、ミノタウロスを単独で討伐していただろう？
偶然見かけて、それからすぐにこんな事件が発生したから、
君を治したうえで一緒に上がってきたじゃないか」
確かにその通りだが、まさかそれだけの理由で神様のファミリアに入るのだろうか？
こういってしまっては悪いと思うが、
そんな理由では、信用できるようなことではない。
この人たちだって、実際は引く手数多だろう。
それに、この状況では僕はしばらくの間ダンジョンに潜ることすらできない。
ということは、その間の収入などは神様のバイト、もちろんだが、
僕もバイトで稼がねばなるまい。この人たちが入ってくれるのであれば、
確かに得ではあるだろう。
それに、アイズさんとも一緒に活動できるってことだし・・・

考えてみる。これを受け入れた場合のメリットとデメリット。
メリットとしては、この人たちならダンジョンで稼いでこれるということ。
デメリットとしては、もともと名もないファミリアに、
ビックネームの人たちが入るということで、
周囲の視線が厳しくなりかねないということ。
そして、その被害を神様が受ける可能性があるということが大きいだろう。
直接的に何かあるとは思い辛いが、
何があってもいいように策は考えなければならない。
「その話を受け入れるのであれば、
前もって条件を付けさせていただくことは可能でしょうか？」
僕がそうといかけると、少し驚いた表情をしたフィンさんは、
しかしすぐに表情をもとに戻し、
「内容にもよるかな。よっぽどの無茶ではなければいいけれど」
と言ってくる。
「それでは、神様に護衛をつけてほしいんです。今僕はダンジョンに潜れない以上、
これ以上レベルを上げるのは難しいと思います。僕よりも強い人が現れた時に、
僕では神様を護りきることはできませんから」

「わかった。この中から一人ずつ順番に護衛に付けることにしよう。
さすがに、元ロキファミリアの幹部が護衛にいて、
攻撃を仕掛けてくるような人はいないだろうしね」
よし、とりあえずはこれで神様の方は安全だろう。では次は僕の番だ。
「それと、僕に稽古をつけてほしいんです。
弱いから、なんて言ってあきらめているようじゃ、僕の理想（英雄）には届かないと思うので」
「その程度なら構わないとも。それで、そちらの要求はそれだけかな？」
これ以上僕たちが追うであろうデメリットは・・・
「あ、それでは、今のホームでこの人数を入れると狭くなってしまうので、
どこかにホームを買っていただけますか？
町のはずれの方の境界後の地下室では、何かといって手狭なので。
まぁ、今言ったので僕からは何もないですね。
後は神様から話を聞けれ「ベルく～ん！」え？ちょっ」
直後、ベルは横から飛んできた神のタックルによって吹き飛ばされる。
マウントを取られたベルは、頭を強打した影響で、意識が薄れていくのだった。
ちなみにだが、目が覚めたら新しいホームの一室で、
元ロキファミリアのメンバーの何人かが所属したことを知らされたのだった。

ただのやつあたりってやつさ（憎い、ともまた違う）

〜ダンジョン　１８Ｆ〜

貴方、神が憎くない？

涼華のその言葉に、僕は苦笑いを浮かべながら答える。

「別に？神たちには特に何か憎しみがあるわけでもないし、あえて言うのであれば、僕が憎むべきは世界そのものさ。理不尽に命を奪った、奪うことをためらわない世界そのもの、

それこそが、僕が憎むべきものであって、そんな世界の操り人形に興味はないよ。

もっとも、だからと言って嫌いじゃない、なんてこともないけれどね。

第一、もし僕が恨むのであれば神ではなく人だ。こんな世界を作った人間さ。

与えられた力をまるで自分のものであるかのようにふるまうのが、

それを使って平然と略奪と暴虐の限りを尽くす人という、いや、違うな。

そういうことをできる思考できる生き物が僕は嫌いなんだ」

これもまた事実。実際のところ、今もある神の加護を受けている僕自身が、

その神も含めたすべての神を否定するわけにもいかないだろう。

僕のその言葉に、涼華はどこか驚いたような表情を浮かべる。
まるで想定外の解答を受けたかのような表情に、思わず首をかしげる。
そうしていると、涼華が話し出す。
「・・・そう、貴方の中では、神はこの世界を好き勝手にできる存在ではなく、あくまで世界が生み出した操り人形だというのね。それに、あくまでも悪いのは人だ、と。
まるで、私がここに来る前に出会った神の従者と話してる気分になるわ」
「その人、神の従者なのに操り人形とか言いきっちゃうんですね」
明のその一言に、涼華は苦笑する。
「彼は少し特殊だったのよ。付喪神の人形が、とある神に拾われて、神の従者になったの。だから、他の従者とは少し変な視点を持ってるのよ」
その話を聞いて、なぜかドールの顔が頭をよぎる。さすがに彼ではないだろうと思い、
頭からその考えを振り払う。
「まぁ、そういうことで、別に神様が憎いとかってわけじゃあないよ。
ただ、あえて言うのであれば、この世界の神様は嫌いかな」
「嫌い・・・なるほど、憎いとかではなく嫌いなのね。

あんな風に、理不尽に囚われて、脅されて、主神には危険物扱いされたっていうのに」
まるで感心するかのようにそう呟く彼女に、思わずクスリと笑ってしまう。
「あの程度で憎いとか言ってられませんよ。
だって、それ以上に理不尽なことだっていっぱいありますからね」
そういって思い出すのはつい最近思い出した、過去の、別の世界の僕の記憶。
「ある男がいました。女神に侵略された世界を救った彼は、
異世界で王となり、妻たちとともに暮らしていました。その彼は、
仲間の名をかたった偽物に、全てを壊されました。
妻を犯され、惨たらしく殺された彼は、
それを行った人物と、その周辺の国ごと滅ぼしました。
ある男がいました。かつて王国最強であった彼は、
結婚して王国騎士ではなくなりました。
そんな彼は、周辺の国から送られた刺客によって殺されました。
どちらの人物も、世界の危機から多くのものを助けたものでした。
それが、助けたはずの人物に殺されるだなんて、滑稽だと思いませんか？
そこまで行けば、僕もまだ憎いって言えたかもしれません」
暗に、僕の感じているこの程度の思いが、憎しみであるはずがないと、

ただそれだけの話である。
憎しみというのは、もっとどす黒いものだと知っているゆえに。
「こんな解答で満足していただけましたか？」
「十分よ。そこまで自分の意見が言えるのであれば、
私が手を貸してもいいかと思える程度には納得できる回答だったわ」
「そうですか・・・え？手を貸す？」
「そうよ？食料の調達とか、武器の整備、回復アイテムの補充とか、
色々と準備できていないでしょう？もっとも、同族ではなかったみたいだから、
そんなに割引はしないわよ？」
そういって、涼華は少しだけ楽しそうに微笑むのだった。

戦争開始の合図（時間が飛んでる？気にしないでください）

～ダンジョン　１８Ｆ～

どうも、ナレッジです。あの話し合いからしばらくたち、僕たちは今・・・

「あれ、絶対僕たちを狙ってるよね」

「十中八九そうでしょうね。大罪人を探し出せとか言ってるし」

「あ、ベートさんがいますよ」

「それ以外にも何人か、元ロキファミリアのメンバーがいるわね」

「まぁ、彼らもさすがに、こんなところにいるだなんて考えないでしょうね」

ダンジョンの壁の中にいます。え？わけがわからないって？

まぁ、普通に考えればそうですよね。この提案を涼華さんからされたとき、思わず何言ってるんだこいつはって感じの視線を送ってたと思いますもん。

「しかし、あの人は本当に何でもアリだな。まさかダンジョンにお願いして、意図的にセーフルームを作ってもらうことができるとは・・・」

「もはやルームというより一軒家・・・いえ、城っぽくなってるわよ？」

「というかダンジョンにお願いってなんですかね・・・?
ちょっと買い物行ってきた、
的なノリでこんな場所渡されるとは思ってなかったんですけど・・・」
明の一言に、思わず全員で頷く。
とりあえず、あの人の行動には深く考えてはいけない事だけはわかった。
「・・・そろそろ時間だね。涼華さんも起きたみたいだし、そろそろ配置に移動しよう」
こうして、僕たちはそれぞれの配置に移動するのだった。
～涼華視点～
目が覚めたので、着替えて外に出る。
１８階層の壁、その内部に作った空間に存在するこの城からは、
この階層全体を見回すことができる。
とはいえ、それは壁をなくしたときの話で、今は壁しか見えなのだが。
私が外に出ると、少年がちらりとこちらを見て、
周りにいるメンバーに何かを話すと、移動を開始する。
「さて、それじゃあ私も、戦闘服に着替えましょうか」
なんていうが、私の着替えなんて魔法を使って一瞬なので気にしないでほしい。
それに合わせて、とある召喚魔法を詠唱し始める。

本来なら発音できない特殊な言語で行われる魔法だが、それゆえ召喚される存在は凶悪だ。

詠唱を終え、あとは触媒を捧げればよくなったところで指示を出す。

「ダンジョン、もう壁を取り払っても平気よ」

『わかりました。我らが母よ』

そんな声とともに、正面の壁が消え去る。それと同時に、声を広域に広げる魔法を使用する。

「あー、今からこの階層にて立つことが許されているものの選定を行います。

勇気ある者、英雄の資格がある者、他者のために頑張れるものなら堪え切れるでしょう。

さ、皆様ご一緒に？ＳＡＮチェックの時間だよ！」

直後、１８階層に狂ったような叫び声が周辺に響き渡った。

倒れぬ意思をただ叫べ

～ダンジョン　１８Ｆ～

直後、狂ったような叫び声が周辺に響き渡った。
その声の発生源は、見るだけで精神を削る異形の神々。
まるで液体のようにあふれ出てきたそれは、
存在するだけでその場にいた心弱きものの精神を消滅させるようなものだった。
同時に、大半の冒険者たちが全速力で上層へ上がっていこうとする。
それこそ、武器を投げ捨て、邪魔するものを引きちぎって、
転んだものを踏みつけるように逃げ出す。
しかし、今回においてそれは悪手というほかないだろう。
なにせ、彼らが本来倒すはずの標的であった彼らは、すでに正気ではないのだ。
ゆえに、あの狂気では狂わない。
「グラ！この一撃で決めるよ！」
「そら、魔糸！あいつらの首を跳ねろ！」
逃げ出す敵をたたき殺すために振り下ろされる大剣（グラ）と糸（チキ）、

その二本の凶器によって、逃げ出そうとしていたものの首、あるいは全身が消滅する。
地面が揺れ、大剣（クラ）の威力を現すがごとく、下の階層までの穴が開く。
「なっ、てめぇら、そんな所に居やがったのか！」
近くの森の中から飛び出してきた二人に、ベートは声を荒げながら走り出そうとする。
「待てベート！さっきの二人の攻撃、動きが一切読めなかった。明らかに速度が上がってる！」
さらに明に関しては、明らかに攻撃力が跳ね上がっている！」
「それに、一緒に逃げたという他の三人の姿も見えない。
どこにいるかわからない以上、孤立したところを襲われるかもしれない」
「総員！警戒態勢！小さな変化も見逃すな！
僕、リヴェリア、ガレスであの二人を抑える！
アイズ、ティオネ、ティオナ、ベートは向こうに呼び出されたモンスターを倒せ！」
さすがは大規模ファミリアの元団長と元副団長いったところか、他の三人への警戒はしつつ、
ナレッジと明を確実に足止め、討伐できそうなメンバーで陣形を組み始める。
中心にいる魔法使いたちが詠唱を始めているのは、おそらく周辺の森を焼き払うため

だろう。
「でも、案外残ったな?あの人の説明的に、
あと半分くらいはいなくなると思ってたんだが・・・」
ナレッジが呟くのとほぼ同時だろうか。魔法使いを護るように囲んでいたはずの一部の冒険者が、
魔法使いたちに一斉に斬りかかる。また、魔法使いの一部は詠唱がまともにできず、
そこらじゅうで魔力暴走が起きようとしている。
さらに、いきなり腕に力が入らなくなったように、手に持っていた武器を落とす。
いきなりの出来事に対処できなくなったのだろう。
その場にいたメンバーのうち半数が瀕死、あるいは即死し、
さらに魔力暴走による爆発によって周辺にいた魔法使いが肉片となった。
生き残っているのは、そこから離れていた元ロキファミリアの幹部たちや、
偶然範囲にいなかった、巻き込まれなかった運のいい冒険者達である。
いや、ある意味運が悪いのだろう。なにせ、残ったのは本来いたメンバーの十分の一、
召喚された存在は全て健在、三人の伏兵もまだいる上に、最高戦力は分散済み。
『我が妻の呼びかけに答え馳せ参じた。我が名は水竜王である』
そのうえで、蒼きドラゴンが現れる。それも、残り少ない部隊の正面に、である。

『我が前に立とうとする者よ。倒れぬという意思を、声高らかに叫び続けよ。
貴様らが勇者であれば、英雄であるならば、蛮勇であろうがかざして見せよ』
そう宣言したドラゴンの周りには、無数の水球が浮かんでいた。

英雄の咆哮／三人の少女たち

～ダンジョン　１８Ｆ～

無数の水球が浮かぶ中、真っ先に動き出したのは兎の様な少年だった。

彼は小さな黒いナイフを構え、ドラゴンに向かって走り出す。

それがきっかけだったのだろうか。動きを止めていた全員が、すさまじい勢いで動き出す。

とはいえ、真っ先に動いた少年が接敵する方が速く、少年はドラゴンの足を斬りに行く。

軽く、薄く切るように動かされたナイフは、少年の予想とは裏腹に、鱗を切り裂き、その肉を軽く露出させた。

『なっ！・・・そうか、貴様がこの世界における英雄・・・主人公か』

直後支援として飛んできた魔法たちは、その鱗に弾かれて無力化された。

これは単純に、ドラゴンの装甲が魔法防御に特化している・・・というだけではなく、ドラゴンの持つ特性ゆえだ。

その特性の効果は、『特定対象以外から受ける攻撃を無力化する』というもの。

さらに、その特定対象というのは、本来の話における主人公、
そして、そんな主人公の影響を強く受けている人物であるということに限る。
この世界で言うなれば、リリルカ・アーデ、
もしくはヴェルフ・クロッゾがギリギリ入るだろう。
しかしその二人は現在地上で少年の帰りを待っている。
ゆえに、このドラゴンに致命傷を与えられるのは少年のみとなるのだ。
しかし、この能力にもデメリットが存在する。
そう、特定対象からの攻撃に対してのみ、装甲がほぼ機能しなくなるのだ。
それも、主人公に近い存在であればあるほどに。
『だが、まだまだ未熟だな！』
まるで咆哮の様な声とともに、ドラゴンはその巨体からは考えられないような速度で移動し、
地面に向けて尻尾を振り下ろす。
轟音、それと同時に発生した地割れによって、少年たちはバランスを崩す。
そこに追撃をかけるように、割れたところから水が刃のように吹き出る。
「っ！ファイアボルト！」
少年の口から咄嗟に出た魔法、それによって発生した炎によって少しだけ水の威力が

弱くなり、
少年の肌を薄く切る程度にまで弱める。とはいえ、そんなことができるのは少年一人、
それ以外の者たちは、腕や足、脇腹などが深く切られ、倒れている。
すぐに治療をしなければ、おそらくそのまま死に絶えるだろう。
しかし、少年にそれを行うだけの暇などない。少しでも目を離そうものなら、
現在も地面から吹き出ている水を操って攻撃を仕掛けてくるかもしれないからだ。
それだけではない。この水竜王を名乗る存在以外にも、
どこからか召喚された異形たちが残っているのだ。
召喚された存在達は、現在ベート達が動きを止めているものの、
処理が間に合わないのだろう。包囲網を通り抜けた異形たちの半数以上が、
魔法使いたちのもとに向かって走ってゆく。
そして残りの魔物が、前衛たちに向かって牙をむく。当然、少年も例外ではない。
「って、なんでミラちゃんの方にまで向かってくるのぉ～！」
しかし、そんな雰囲気とはまるで関係ないといわんがばかりに、
かわいらしい女の子の声が聞こえる。全員がそちらを勢いよく見ると、
そこにはなぜか魔物に追いかけられている少女の姿があった。

「なっ！何でこんなところに子供が!?」
少女の姿を見た冒険者の一人がそう声を上げる。それもそうだろう。
なにせ、魔物から逃げているのだ。戦闘手段を持っていないと思われたのだろう。
「そんなこと言われても、マスターさんにお願いされてここにいただけだからぁ！
ミラちゃん戦闘する予定ないって言ってたじゃんかぁ！
・・・あれ？そういえば、もしかして魔力補給してくれたのって、
私が戦う予定だったからじゃ!?　ふぇぇ～、マスターさんのバカァ！」
涙目になりながら、彼女が腕を横に振ると、
直後、まるで巨大な怪物を相手にしているような威圧感ともに、
彼女を追いかけていた魔物が灰となって消える。
「でも、そうだよね。マスターさんがこの戦いが終わったら頭撫でてくれるって言ってたし、
うん、なら、私が今出せる全力で！邪魔する人たちを全員やっつけちゃうよ！
・・・でも待って？別に私お留守番でもよかったんじゃ・・・!?
モアちゃんとかルナちゃんとかもいるんだし！」
フンス！とでもいいそうな少女が、やはりまだ少し涙目を浮かべながらそういう。
「あ、私も一緒にいいですかね？この戦いが終わったら、

マスターさんがマッチ買ってくれるっていうんです！これはもう頑張るしかありませんね！」
少女の背後から現れた白髪の少女が現れる。
「はぁ、マスターさん、そんな約束をホイホイするとか、どういう神経してるんですかねぇ？というか、あんなにいっぱいお嫁さん作って、体が持つんですかね？まあいいです。さ、マスターが救うところを見るためにも、全力でこの冒険者？たちを倒しましょうか」
最後に、空中からそう言いながら二人の前にウサギの耳をつけた少女が着地し、冒険者の方を向く。
周辺の魔物は、彼女たちの出現とともに姿を消した。あの蒼い竜すらも。
ただ、悪夢は終わらない。さらなる脅威が、魔物たちの代わりに現れたのだった。

魔剣少女たちと死の舞踏会

竜を模した服を着た少女が腕を振るう。大地が大きく裂けた。
炎を思わせる少女が近くの冒険者を見る。突然冒険者が焼けた。
どこか兎を連想させる少女が笑みを浮かべながら周辺に魔力を吐き出す。
魔力にあてられ、多くの冒険者が狂い、植物たちが冒険者の手足を縛り、
砕いた直後に消滅した。
あまりの光景に、最初の時点であまりの怖さに逃げ出したかった者たちが、
全力で逃げようとする。
そして、それを妨害するように、冒険者たちを二本の細剣が串刺しにする。
「ここから逃げられるだなんて思わなことね」
「っていっても、少し残ったやつらを倒すだけなら、
別にそこまでやる気を出さないで平気よね」
そこには、さきほどまでどこにも姿の見えなかったアリスとクロワッサンの姿があった。
「ちょっとそこのお二方、せっかくの私たちの獲物をとらないでください」

「そう言われても、私たちもナレッジからここを担当するように言われているから、
さすがに別の場所で何かするというわけにはいかないのよ」
そういわれたあたりで、何かを思い出したかのようにポンと手をたたく少女。
「マスターさんがいっていたのはあなたたちのことでしたか。
それなら、自己紹介しないとですねぇ」
そう言いながら、少女は薄く笑みを浮かべ、
「マスターさん・・・ナレッジのお嫁さんをしてました、
魔剣ジャガーノート＝ルナって言います。よろしくお願いしますね？先輩方」
「あら、これはどうもご丁寧に。
それじゃあ、聞いているかもしれないけれど。私はアリスよ」
「私はクロワッサン。少し長いかもしれないから、クロでもいいわ」
よろしく、といって握手しようとするアリスとルナだったが、
全力で後ろにジャンプする。
直後、彼女たちがいた空間が焼けつく。
「ずいぶんのんきに話をしているものだな。先の戦闘で何人も犠牲になった・・・が、
だからと言って私たちが全滅したわけではないぞ」
そういいながらあらわれたのはリヴェリア。杖を向けながらこちらを警戒している。

「っていっても、お姉さんじゃあ役不足では？この世界のマスターさん以外、
まともにあなた方が倒せそうな人いないと思いますよ？」
「これ以上強い人を相手しないでいいなら何でもいいからぁ！
というより、もしマスターさんが死んじゃったら、
また私達しばらく出てこれないんじゃない!?
・・・あれ？じゃあもうこの人殺っちゃったほうがいいんじゃ・・・？」
そういいながらリヴェリアの背後で腕を振り下ろす少女。
リヴェリアは、いつの間にか背後を取られたことに驚きつつ、
地割れまで引き起こした彼女の腕を回避しようと後ろに飛ぶ。
しかし、当然それだけで回避できるほど簡単ではない。
来るであろう衝撃に備え、少しでも衝撃をなくそうと、杖を前方に浮かせる。
轟音が響き渡る。が、その直前、リヴェリアは横に思いきり蹴り飛ばされた。
「ッ、ルァァァ！」
それを行った本人であるベートの姿が目に入る。
しかし、その体には片腕が存在しなかった。だが、そんなことは気にしないとばかりに、
ベートはリヴェリアを攻撃した少女に蹴りかかる。

「え!?その怪我でまだ攻撃してくるの!?うぅう、このっ!こっちこないでぇ!」
そういいながら横なぎに行われた攻撃を回避できたのは、
野生の感とでも呼ぶべきものなのだろう。
直前で急ブレーキをかけ、上空にジャンプすることで攻撃を回避したベートは、
そのままの流れでかかと落としを仕掛けようとする。
「あ、もうこの周辺にはその二人しかいないみたいです。
時間稼ぎありがとうございました。ミラ」
しかし、その一撃は横から入り込んできたルナに防がれる。
彼女の言葉にリヴェリアが周囲を見回すと、そこには地獄が広がっていた。
まるで自ら体を引き裂いたかのような爪痕とおびただしい血を流す死体があった。
腹が裂かれ、周囲に臓物を広げる死体があった。
まるでこちらに助けを乞うように、腕を伸ばす死体があった。
四肢がねじりきられ、目玉がくりぬかれた死体があった。
全身を串刺しにされ、口から槍のようなものが出ている死体があった。
「さ、あとは貴方たちだけです。わたし、とっても楽しみですよ?
あなた方が、どれほど惨たらしく死んでくれるのか、と」
ルナはそういいながら、まるでこの状況を楽しんでいるかのように嗤うのだった。

最後の戦い

「ゲフッ、ゴホッ、ゴフッ・・・まったく、やっぱり僕はとことん戦闘に向いてないね」
「お姉ちゃん！だから私の後ろに下がってって言ったのに！なんで私をかばったのさ！」
「そうは言ったって、体が勝手に動いたんだから仕方なくない？
というより、普通に考えて他のメンバーを連れてきておいたほうがよかったよね？
元ロキファミリア団長に高レベルメンバー三人とか・・・
他の何人かが別のところに行ってくれて助かったというべきか、
救援が来なさそうだと嘆くべきか・・・」
そんな風に言いながら正面を向くナレッジの前には、武器を構えているフィンの姿があった。
最初の奇襲は確かにうまくいったのだ。そのあとの追撃も。
しかし、そもそもの問題として、彼自身がそれほど強くはないのだ。
たしかにスキルを使えばその限りではないが、もしそれを行う場合、
体のどこかを犠牲にする必要がある。正確にいうなれば、

過去の存在に体を入れ替えるため、自身の体に異物を入れるようなものなのだが。
そうなった場合、急に体の一部だけ強靭になるゆえに、それに耐えきれず、
体が壊れてしまうことがあるらしい。一番最悪なのが、心臓。
俺や私に聞いたところ、心臓が送る血液の量に耐えられず血管が破裂するらしい。
「さて、こっちの事情で悪いと思うけど、これ以上無駄な抵抗はやめてもらえるかな？」
そういってくるフィン。当然といえば当然だろう。すでに両腕に力は入らないし、
立ち上がるにも先手を打って潰してくるだろう。
というより、実はかばった時に内臓がぼろぼろになったらしく、
まともに呼吸ができていなかったりする。
「そういわれて、まさかあきらめたりしないですよね？マスターさん？」
「本当よ。折角ベートを殺してきたのに、ここであなたが死んで全滅とか、
落ちとしては残念どころの騒ぎじゃないわよ？」
「まぁ、リヴェリアは逃がされちゃったけどね」
そういって、僕の横に移動してくるアリスたち。
「緑色の髪のおねぇさんは、お城の方に飛ばされてたよ」
背後に水奈が立ち、こちらに向かってそういってくる。
「あー、実はもう動けないんだけど・・・ゴボッ」

血を吐きつつそういう僕に、周辺の皆は苦笑する。
「まぁ、せっかくだから最低限、何人か道ずれにでもしましょうか」
「その間、別に寝ててもいいわよ？
今のあなただと、その場で倒れている方が守りやすいもの」
「もっと簡単に言えばいいじゃないですかぁ、
これ以上あなたが痛がってるところを見たくないって」
「まぁ、これ以上お姉ちゃんが傷付いてるのを見ると泣きそうになっちゃうので、
本当に休んでもらっていた方が助かるのですが」
「それに、それ以上チキたちをボロボロにされると、作った側としても微妙だしねぇ」
僕は、薄れゆく意識の中、彼女たちがそれぞれの武器を構えて、
フィン達に向かって走っていく光景を見たのだった。